
狸山の謎の少女

六角才セロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狸山の謎の少女

【Nコード】

N1307X

【作者名】

六角オセロ

【あらすじ】

一男は受験生だった。謎の少女からの電話、それは危険な誘惑の電話だった。謎のカラスの大群。大地震と大津波。謎の宇宙人。誰でも安心して読める健全な内容のものになっています。残虐シーンの多い小説ばかり読んでたり、書いてたりしていると、ほんとうにそうなりますよ。風邪をこじらすと肺炎になるように、最後には、ほんとうに心の病気になるですよ。そうなったら大変です！注意しましょう！

他人を傷つけたい！とか、他人を殺したい！とか。自分を傷つけ

たい！とか、自分を殺したい！とか、思うようになったら、それは、初期の心の病気です。手遅れにならないうちに治しましょう！
心の病気は、一度かかったら、決して治ることのない怖い病気です。初期のうちに、なるべく健全な小説を読んで治しましょう！
よい小説を読めば、心の平安を取り戻し、次第に治ってきます。
残弱な小説ばかり読んできると、心は荒れ果て砂漠化し、最後には心の廃人になります。そうなったら、人生終わりです！
心の病気というのは、自分が気がつかないうちになつてゐる場合が多いそうです。気をつけましょう！

謎の小さな少女

一男は焦っていた。母の声が耳に残っていた。

「私立は駄目だよ！うちには、そんな余裕はないんだからね。公立だよ、絶対に公立！」

来年は、いよいよ大学受験だった。

「公立かゝゝ、行けるかなゝゝ。」

一男はあまり自信がなかった。運動は得意だったが、勉強は得意ではなかった。

「頑張つてやるしきやないか！」

机に向かったときだった。携帯電話セルフォンが鳴った。

「うん、誰だろう？」それは知らない電話番号だった。

「どなたですか？」

「わたし、ユミといいます。」

「ユミちゃん？知らないなゝゝ。」

「はじめまして。」

「はじめまして。」

「あなたに逢いたいんです。」

「はっ？」

「公園で待つてます。」

「はっ？」

「近くの弥生西公園で待つてます。」

「はっ？」電話は切れた。一方的だった。

「なんだよ。失礼な奴だなゝゝ。」子供のような声だった。

「子供のイタズラだったのかなゝ？」

勉強を始めたが、気になつてできなかった。

「弥生西公園か…」壁時計を見たら、四時だった。

「よし、知らん顔して、行ってみよう。」

玄関を出ようとしたら、母に呼び止められた。

「一男、どこに行くの?」

「ちよつと、コンビニまで。」

「ちゃんと勉強やってよ。わたしなんか受験前は毎日三時間やってたんだからね。」

「分かってるよ。」

「お父さんは、毎日四時間やってたのよ。そのくらいしないと駄目なの。」

「分かってるよ。すぐに戻るよ。」一男は出て行った。

弥生西公園は小さな公園だった。行ってみると、小さな子供が三人、砂場で遊んでいるだけで、他には誰もいなかった。

「な〜んだ、やっぱりイタズラか!」

大きなイチヨウの木があった。その上から声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん!」

上を見ると、七歳くらいの女の子が、高さ三メートルくらいの大きな枝に座っていた。

「危ないじゃないか、そんなところで?」

「大丈夫、平気!」

「どうやって登ったんだよ?」

「それは秘密!」と言うと、その枝にぶらさがって、ぴょんと飛び降りてきた。

「わ〜〜、君って凄いね!」

昨日までのホットな夏の風から、急にクールになった秋の風が吹いていた。見知らぬ雑草が風に揺らいでいた。

ただの小学生

「どうして、僕の名を知ってるの？」

少女は、近くのベンチに座った。足が浮いていた。

「あなた、狸山の稲荷神社に行ったでしょう？」

「ああ、確かに三日前の日曜日に、友達と遊びに行ったよ。」

「これ落としたでしょう？」

それは、英会話スクールの会員証だった。

「あつ、これ落としたんだ！」

「これに、名前と電話番号が書いてあったの。」

「なあんだ、そういうことか。」

「はい、あなたのものだから返すわ。」

「これ、稲荷神社のどこに落ちていたの？」

「イチヨウの木の下。」

「あの大きなイチヨウの木の下」

「そう。あなた、あの大きなイチヨウの木を何度も撫でたでしょう。」

「
「そういえば、撫でたかな〜。どうしてそんなことまで知ってるの？」

「近くで見ていたんです。」

「近くで？」

「とにかく、逢えて良かったわ〜。」

「これだけのために、わざわざやって来たの？」

「そう。」

「電話をすれば、取りに行ったのに。」

「あなたの顔が見たくなつたの。どんな人かな〜と思って。」

「どんな人って、こんな人だよ。つまらない普通の人。」

「つまらない普通の人なんかじゃないわ。普通の人だったら、イチヨウの木を何度も撫でたりはしないわ。」

「そうかな〜?」

「自分のことを、そんな風に言ったらいけないわ。」

「君って一体何者?どこに住んでいるの?」

「近くに住んでいるの。ただの小学生。」

「どこの小学生?」

「近くの小学生。」

「弥生小学校?」

「そうです。」

「あまり見たことないね〜。」

「そうですか。」

「これだけのために、ここまでやって来たの?」

「これだけじゃありません。ついでにコンビニに買い物に来たんです。」

「コンビニだったら、僕もこれから行くところだよ。」

「わ〜良かったわ〜。一緒に行きましょう!」

「何を買いに行くの?」

「大好きな竹輪よ!」

「それだけ?」

「はい、そうです!」

少女はにこにこして張り切っていた。少女は違う方向に行こうとしたので、一男は呼び止めた。

「違う違う、こっち!」風が少し強くなってきた。

「一人で帰れるの?」

「帰れま〜す!」カラスが狸山に向かって飛んでいた。

また少女からの電話

少女の買い物は、ほんとうに竹輪だけだった。一男は、コーラとポテトチップスを買った。

店員が少女を呼び止めた。

「お客さん、あと五円あと五円、消費税。」

「困ったな〜。百円に負けてくれませんか？」

「駄目ですよ〜。」

一男が少女に聞いた。

「お金、ないの？」

「ちようど百円持って来たんです。」

「じゃあ、僕が払ってあげるよ。」

「ありがとうございま〜す！」

「ほんとうに竹輪だけでいいの？ジュースとか買ってあげようか？」

「わ〜、ほんと？」「いいよ。選んで。」

「じゃあ、おみかんのジュースがいいわ。」「少女は楽しそうに選んだ。

「じゃあ、この箱のでもいいわ。」

「これでいいの？もつと大きいのもいいんだよ。」

「これでいいわ。」

二人はコンビニを出た。一男は少女のことが心配になった。

「お家まで送って行ってやるよ、どこ？」

「…じゃあ、公園まででもいいです。」

「お家は、公園に近いの？」

「はい。」「公園まで見送った。

「じゃあね！」

「どうもありがとうございました！」

少女はジュースを飲んでいた。「わ〜、おいしいわ〜！」

一男は振り返った。「あっそうだ。名前は何て言うの？」

「ユミで〜す!」

「あつ、そうか、さつき電話でそう言ってたね。」

「あ〜〜、美味しかったわ!」

「そんなに?じゃあまた買ってあげるよ。」

「ありがとうございま〜〜す!」

「じゃあね、ばいば〜〜い!」

「ばいば〜〜い!」

振り向くと、少女は手を振り、まだバイバイしていた。一男も手を振った。

家に着くと、母が出てきた。「遅かったじゃない。何してたの?」

「ちよつと友達と話してたんだよ。」

「とにかく、さつさと勉強しなさい。受験はもうすぐよ!」

「分かってるよ。」

一男は、自分の部屋に戻ると、勉強を始めた。

「まったく、勉強勉強つて、うるさいな〜。」一男はカレンダーを見た。

「大学大学つて、大学に行っても仕事なんかないのにな〜。親は大学を出ると、いい仕事にありつけれると思ってる。時代が違うんだよな〜。認識不足もいいところだよ。」

一男は、いつものようにぼやいていた。

「大震災で困っている人々がいるのに、俺だけ受験でいいのか?もつと社会のためにやる必要があるんじゃないのかな〜。」

携帯電話セルフォンが鳴った。さつきの少女からだった。「はい、もしもし。」

「さつきはどうもありがとうございました!」

「もう帰ったの?」「はい。また、お金を盗んで竹輪を買いに行きますので、そのときはよろしくね!」

「お金を盗んで!?!」

高級竹輪三本

「お兄ちゃん、オヤツ。入ってもいい?」「いいよ。」

小学四年生の妹の幸子さいこだった。

「おつ、巨峰かゝゝ、いいなゝ。」

「お兄ちゃん、巨峰好きだからね。」

「この近くに、ユミっていう小学一年生くらいの女の子、知ってる?」

「知らないわゝゝ。」

「あつ、そう。」「どうしたの?」

「何でもない。」「変なの?」

一男は巨峰を食べ始めた。幸子は出て行つた。

「あの子、竹輪なんか買つてどうするんだろ? オヤツに食べるのかなゝゝ?」

何から何まで不思議な少女だった。

「ほんとうに、公園の近くに住んでいるのかなゝゝ?」

一男は、あの少女がなんだか遠くにいるような気がしてきた。

「なんだか見ない少女だったよなゝ。」

不気味な想像が走った。

「もしかして、幽霊!」巨峰をぐくつと飲み込んだ。

「そんなはずはないな。昼間っから、幽霊なんて出ないよな。」

翌日、一男は学校の帰りに弥生西公園に立ち寄った。ほぼ昨日と同じ時刻だった。

左手には、三百円の高級竹輪と昨日と同じオレンジジュースをレジ袋で持っていた。

公園には誰もいなかったの、一男は仕方なくベンチに座った。

「今日は待つても来ないか…」

少女が走って来るのが見えた。「来ましたよゝゝゝ!」少女は右足を前に出し、急ブレーキで一男の前で止まった。

「さあ、お兄さん。竹輪を買いに行きましょう！」

「買いに行かなくても、ここにあるよ。」「えっ、ほんと!？」

「ほらっ!」一男は差し出した。

「わくく、大きな竹輪!三本も入ってる!コンビニの小さな竹輪五本と大分違うわ!」

少女は、とっても喜んでいた。

「これで、盗んだりしちゃあ駄目だよ。」

「もう盗んだりなんかしないわ!」

「どっから盗むの?」「それは内緒。ばれたら叱られるわ。」

「叱る人がいるんだ?」「とっても怖い人がいるわ。」

「だったら、もう絶対にしないほうがいいよ。」

「なるべく、そうするわ。」

「なるべくじゃなくって、絶対に!」

「そうするわ。」「良かった。」

「どうもありがとう!この恩返しは必ずするわ。」「恩返しは、オバーだよ。」

「必ずするわ!」「いいよ、いいよ!」「必ずするわ。」

「僕、勉強があるから、これで帰るね。さようなら!」「ありがとう、さようなら!」

一男が去った後、少女は美味しそうにオレンジジュースを飲みながら誰かを待っていた。カラスが飛んでいた。

カラスの大群

翌日も一男は公園に行った。いつもの時間だった。一男は三十分待った。が、少女は現れなかった。

「しょうがない、帰ろう！」

一男は、高級竹輪とオレンジジュースを持っていた。

一男は家にたどり着くと、母にこっぴどく叱られた。

「遅かったじゃない。その一時間遅れが命取りになるのよ！」

一男は「ごめんなさい。」と言って、二階の自分の部屋に入った。

「まったく、勉強勉強って、頭に来ちゃうよ！」

セルフフォン
携帯電話が鳴った。

「もしもし……」女の子からだった。

「ユミで……す。こんにちわ。」

「こんにちわ。今日は来なかったね、どうしたの？」

「高級竹輪、あまり美味しくなかったわ。もういりません。」

「あつ、そう。」

電話は切れた。

「なんだ？ずいぶん失礼な電話だね。」

一男は、高級竹輪を取り出して、一本食べ始めた。「けっこう美味しいじゃん。」

一男は、なんだかむしゃくしゃしてきたので家を出た。

「どこに行くの？」

「ちょっと、コンビニまで。」

コンビニに着くと、少女を発見した。ちょうど出るところだった。

「あつ、あの少女だ！」一男は、こっそりと後を追った。少女は弥生西公園に入って行った。

そして、ベンチに腰掛けると、オレンジジュースを飲み始めた。

「美味しいわ……。」

一男は公園の垣根に隠れ、黙って息を殺して見ていた。

少女は、竹輪をレジ袋から出して、楽しそうに眺めていた。

「なんだ、またあの竹輪を買ってるじゃないか。」

少女は誰かを待ってる感じだった。

「いったい、誰を待っているんだろう？」

パトカーが一男の近くで止まった。警官が出てきた。

「君、こんなところに隠れて何をやってるんだね？」

「いや、別に。」カラスの大群がやって来た。

「カラス観察です。来るのを待ってたんです。」

「カラスの観察？君の趣味？」「そうです。」

「このあたり、最近変な人が出るんだよ。」

「痴漢とかですか？」

「そう。君は違うみたいだね。」

「違いますよ～～！」

「そうだな、まだ暗くないしな。」

「失礼しちゃうな～～。」

「そういうことやっていると、間違われるから気を付けてね！」

「はい、気を付けます！」

警官はパトカーに乗って去って行った。

一男は、ベンチを再度見た。少女はいなくなっていた。「あれ～～、どこに行っただろう？」

カラスの大群が、狸山に向かって飛んでいた。三人の五歳か六歳の子供たちが、童謡の七つの子を歌いながら歩いていた。男の子一人、女の子二人の、いつも砂場で遊んでる子供たちだった。

カラス なぜ鳴くの カラスは山に 可愛い 七つの子があるからよ

可愛い 可愛いとカラスは鳴くの 可愛い 可愛いと鳴くんだよ

山の古巣へ 行って見てごらん 丸い目をしたい子だよ

クールな秋の風

少女は、十センチほどの大きさになり、カラスに乗っていた。竹輪の入ったレジ袋はカラスがくわえていた。

少女を乗せたカラスは、狸山の大きなイチヨウの木の上で止った。

「どうもありがとう！はい一本あげるわ。」

少女は竹輪を一本、そのカラスにあげた。他のカラスが嫉妬して騒いでいた。少女も一本食べ始めた。

「やっぱり、コンビニの安い竹輪は美味しいわ。やっぱり、この味だわ。大きさも、ちょうどいいし。とにかく最高だわ。」

少女は、大きなイチヨウの木の妖精だった。

下から大きな声で怒鳴ってる人がいた。この狸山稻荷神社の神主だった。

「こら〜！また賽銭を盗んだな！返せ〜！」

「盗んでなんかいません！」

「その食べてる竹輪が証拠じゃ。コンビニの百円の竹輪だろう！」

「これ、もらっただけです。」

「嘘つけ！嘘つきは泥棒の始まり！もう泥棒だけどな。」

「百円くらいいいじゃないか、ケチんぼ神主！」

「なんだと〜！今度やったら空気銃で撃ち落とすからね！」

「お〜、怖！」

「妖精は妖精らしく、ドングリでも食べてろ！」

「だってあれ、渋くてまずいんだもん！」

「贅沢言っつな！」

「このイチヨウの木は、神社の中で一番有名なんですよ。」

「それがどうした？」

「だったら、もっと大切にしましょうよ。」

「分かった、分かった！」

神主は去って行った。カラスたちが、少女を声援するように騒いで

いた。イチヨウの木はカラスたちの寢座ねくらでもあった。

「二本は朝の分、あと二本は昼の分と。」

少女は、アオゲラというキツツキが開けた穴に、残りの四本の竹輪を仕舞い込んだ。

「これで良しと！」自分も、その穴に潜り込んだ。

「やっぱり我が家が一番だわ！」

日は、今にも暮れようとしていた。クールな秋の風が吹いていた。

「さて、一眠りしたら、夜の仕事にでかけましょう、っと！」

狸の雨宿り

それは、突然の大雨だった。少女は雨音に驚いて目を覚ました。

「わ~~~~、大雨だわ。」

少女は近くにあったレジ袋で玄関を器用に塞いだ。

「凄い雨だわ。」

百円ショップで買った小さな時計を見ると、六時だった。

「あの子大丈夫かしら？」

少女は妖精仲間のミクのことを思い出した。

「電話してみようっと！」

少女は、妖精の伝達手段である電波を発した。ミクはすぐに出た。

「ミク、大丈夫？」

「今のところ大丈夫よ。」

「この雨じゃあ、とても仕事なんてできないわ。中止にしましょう。」

「

「そうね、中止にしましょう。」

「じゃあ、また明日！」「また明日ね！」

イチヨウの木近くの常夜灯だけが、周りを明るく照らしていた。

「神主はケチだからな〜。」

少女は、穴から顔を出して空を見上げた。

「まだ止みそうにはないわね。」

雨は、他の音を遮るように激しく降っていた。少女は山ぶどうの実を一つつまんで食べた、「すっぱい！」

雨は強く地面に当たり、雨粒が跳ね返っていた。雨水は、地面に多くの小さな流れを作っていた。

突然、カミナリが光り、激しく鳴り響いた。ゴロゴロゴロ~~~~！

「わ~~~~、怖い！」

少女は身をすくめた。

「このイチヨウの木、大丈夫かしら？」

イチヨウの木の近くには小山があつて、そこに避雷針が建てられていた。

「あの避雷針で大丈夫かしら？」

少女は不安になった。空が光り、またカミナリが鳴った。

「きゃゝゝあ、怖いわゝゝ！」

同居のアオゲラが帰つて来た。「邪魔だなゝ、このレジ袋！」嘴でくわえて、ばいと外に放り投げた。

「あゝゝ、何するの！」「邪魔なの！」

「しょうがないなゝゝ。遅かったじゃない？」

「暗くなつて、道に迷つたんだよ。」

穴の中は、けっこう広かつた。

「びしょ濡れじゃない！外ではたいてきてよ。」

アオゲラは、枝の上で水をはたいて入ってきた。

見かけない小鳥が、穴に入ろうとした。少女は叱った。

「駄目駄目！ここに入っちゃ駄目！」

アオゲラがつついて追い返した。

「こらっ、入るな！」「やっぱり、あなたがいないと駄目ねゝ。」

アオゲラは竹輪を見ていた。「あつ、また竹輪だ！こんなものどきが旨いのかねゝゝ？」

少女は寂しそうに神社を見ていた。

「暗くなると、人は来なくなるね。」

「大雨だからだよ。」ザーザーと雨音だけが聞こえていた。

「これじゃあ、雨が入ってくるわ！」「じゃあ、ちよつと待つて！」

アオゲラは外に出ると、葉の多くついた枝を運んできた。それを玄関に立てた。

「はい、これで大丈夫！」「あなたって器用ねゝ。」

狸が神社で大雨を見ながら雨宿りをしていた。

ホームレスの共産主義者

一男は切れた。「まったく、勉強勉強って、うるさいな〜！」

「何言ってるの、あなた。勉強しないと、一生駄目になるのよ、それでもいいの？」

「大学出たって同じだよ。馬鹿は馬鹿のままなの！」

「馬鹿でも大学さえ出てればなんとかなるの。世の中ってそういうものなの。」

「大学なんて、もういいよ。止めた！」

「止めたって、あなたこれからどうするの？」

「就職するよ。」

「今どきは高卒で就職なんてないわよ。あっても零細企業。」

「零細企業のどこが悪いの？」

「だって、いつ倒産するか分からないじゃない。」

「それでもいいよ。」

「もし倒産したらどうするの？ホームレスになっちゃうわよ！」

「ホームレスのどこが悪いの？あの人たちは社会の犠牲者だよ。」

「犠牲者じゃなくって、社会の脱落者！」

「それは差別だよ。病気で働けない人だっているんだから。一生懸命に頑張ってる人だっているんだから。」

「負け犬になるのよ！それでもいいの！？」

「負け犬には生きる権利はないの？」

母も切れた。「世の中は、そんなに甘くはないのよ！」

「じゃあ僕はホームレスになって、ホームレスを助けることをするよ！みんなが平等の共産主義者になる！」

一男は出て行った。

一男は、弥生西公園にいた。友人の智明に電話をした。智明は自転車ですべて来た。

「母親と口喧嘩しちゃってよ。」

「それで出てきたってわけ？何の喧嘩？」

「進路のこと、大学のこと。」「大学行くんだろ？」

「お前は？」「行く予定だけど。」

「勉強しろ勉強しろってうるさくて、切れちゃった。」

「それだけのことで？」

「ホームレスになって、共産主義者になる！って出て来ちゃった。」

「ホームレスで共産主義者？そりゃあ誰だって怒るよ。」

「そうかな？」

「怒るさ、最悪のパターンだよ。」

「共産主義者の、どこが最悪なの？」

「共産主義と言えば、北朝鮮だろう。」

「キューバだってあるよ。あそこは立派な国家だよ。」

「まあそうだけど、イメージがね悪いんだよ。なんだか、怠け者を助長してるみたいで。」

「そんなことはないよ。それは偏見だよ。」

「それに、ホームレスはいけないよ。」

「どうして？どこがいけないの？悪いことしてないじゃん。」

「どうしてって…？かつこ悪いだろう？」

「そんなことないよ。それも偏見だよ。」

「なあ一男、ちょっと頭を冷やして考えろよ。」

「一男は、天を仰ぎ見た。「人間って、どうやって生きればいいんだ？」」

「一男、狸山に行こう！神社にお参り行こう！」

「狸山？今何時？」「まだ二時だよ。」

土曜日だった。二人は自転車で狸山に向かった。

空耳

狸山は二百十五メートルの山だった。稲荷神社は山の中腹にあった。ママチャリ三段ギアの一男は、途中で断念した。

「あゝ、もう駄目だ！」

マウンテンバイク十六段ギアの智明は、まだ自転車に登っていた。神社に辿り着いたのは、三時過ぎだった。一男は、持ってきた五百ミリリットルのペットボトルのコーラを飲んだ。

「やっぱり高いなゝゝ、ここは！」

智明も、自転車に付いているアルミボトルの何かを飲んでいた。

「何それ？」「ただの麦茶。」

「あゝゝ、疲れた！」一男は階段の下を見ていた。

「自転車を下に止めて、階段で登ったほうがよかったんじゃないの？」

「まあね。」

二人は自転車を降りると、神社に向かった。一男は智明に質問した。「前々から思ってたんだけど、稲荷神社の稲荷って、どういう意味なの？」

「稲荷神の神社のことだよ。」「稲荷神って？」

「穀物や食物の神様。」

「その神様って古いの？」

「古いつて？」

「歴史。」「そんなことまでは知らない。」

「日本の神様？」「そう、日本の神様。」

二人は、お参りを簡単に済ませ戻って来た。神社の近くにある大きなイチヨウの木の下で立ち止まった。

「この前も、ここで立ち止まったなゝゝ。」

「神社をバックにして、携帯のカメラで撮ったよなゝゝ。」

一男は、前回と同じように、イチヨウの木を撫で始めた。どこから

か声が聞こえた。「くすぐつたい！」

「おまえ、今何か言った？」「いいや。」

「おつかしいな〜。」もう一度撫でてみた、「くすぐつたい！」

「今、聞こえた？」「いいや、何も。」

「おつかしいな〜。空耳かな？」

どうやら、撫でた本人しか聞こえない声のようだった。

「今の声、この前の少女の声に似てたな〜。」

「おまえ、何言ってるの？変だよ。」

一男は、自分でも変だと思った。気が変になったのかと思った。智明が促した。

「さあ、ここにいても何にもないから帰ろう！」

「せっかくここまで来たんだから、狸小屋の狸を見て帰ろう。」

「そうだな。」

「餌をやると、ごほうびがもらえるらしいよ。」

「ごほうび？」「それは何だか分からない。」

餌は自動販売機で売っていた。芋とかニンジンとかが出てきた。

大きなイチヨウの木の上のアオゲラがあけた穴から、小さくなった妖精の少女が二人を見ていた。

レッツゴー！

「一男、あんまり変なこと考えるなよ。」

二人は、弥生西公園の前で別れた。一男は公園の中に入って行つた。一男は携帯電話の時計を見た。

「四時か」。このまま黙つて歸つて謝るのも癪^{しや}だしな。どうしよう？」

コーラが残つていたので飲み干した。

突然、カラスの大群がやつて来て、少女が走つて現れた。少女は、一男の前で右足を前に出して急ブレーキで止つた。

「久し振り！」「やあ、久し振りだね。」

「元気でしたか？」「元気だよ。」

「それはそれは良かったわ！」

「君、いつも走つて来るね？」「はい。」

「どこから走つて来るの？」「それは、秘密。」

「まあいいや。また竹輪買いに来たの？」

「そうで！」「好きだね。」

「いけませんか？」少女は、いたずらっぽい目になっていた。

「まあ、いいけどね。」

「竹輪は、とっても美味しいわ。」「君つて変わってるね。」

「そうですか？」

「じゃあ僕も、これからコンビニに行くから、一緒に行こう！」

「また、ポテトチップスとコーラを買うんですか？」

「そうだよ。」「あなただって変わってるわ。」

「そうかな？」

「今日は、ジュースはいりません。」

「あつ、そう。」「自分で買います。」「あつ、そう。」

買い物をする、二人はコンビニの前で別れた。

「じゃあ、まったね！」「ばいばい！」一男は少女の後を

追った。

「今度こそ、正体を見破つてやるぞ！」

少女は公園の中に入って行った。

一男は、公園の垣根に隠れて見ていた。パトカーに注意しながら。

少女が美味しそうにジュースを飲んでいると、カラスの大群がやって来た。

「あつ、またカラスだ!?」カラスは公園の中に舞い降りた。

少女の近くに舞い降りたカラスは、少女の持っていたレジ袋をくわえた。少女は飲み干したジュースのパックを近くのゴミ入れに投げ込むと、十センチくらいの大きさになって、そのカラスに飛び乗った。

一男は自分の目を疑った。「なんだなんだ!?」目を何度もこすった。

少女が「レッツゴー!」と叫ぶと、カラスたちは飛び去って行った。

「勉強ノイローゼで頭がおかしくなったみたいだ!」

一男は、狸山に向かって飛んで行くカラスたちを呆然と見ていた。

「こりゃ駄目だ。明日、病院に行こう!」

目の錯覚？

「ただいま〜」。」「おかえりなさい。」

「一男は元気がなかった。」「どうしたの、一男？」

「母さん、僕もう駄目だ。」「どうしたの？」

「僕、頭が変になっちゃったみたいなんだ…」

「そうでしょう。いきなりホームレスになるなんて言うんだもん。」

「そうじゃなくって、頭が変なんなんだよ。」

「どうしたの？」

「変な物が見えるんだよ。小人とか…」

「えっ、なんですって？」

「明日、病院に行くよ。ついていってくんない？」

「いいけど、明日は病院は日曜日で休みよ。」

「あっそうか。じゃあ月曜日でいいよ。」

「いいわよ。」

「少し休んだほうがいいんじゃない？ 顔色悪いわよ。」

「そうするよ…」

「一男は、二階の自分の部屋に入ると、布団を敷いて寝転んだ。母が心配して上がって来た。」

「大丈夫？何か食べる？」

「何も欲しくない…」

「人間、疲れてくるとね、見えないものが見えてくるってことがあるのよ。」

「そうなのかな〜。」

「目の錯覚ってやつよ。きっとあなた精神的に疲れているんだわ。」

「目の錯覚？そうなのかな〜？」

「きつとそうよ。母さんも悪かったわ。受験受験って追い立てて。」

「気にしてないよ。」

「さっきはごめんなさい。」

「僕こそ悪かったよ。余計なことまで言つて。ほんとうはあんな」と思つてもいなくなつたんだよ。」

「そう、安心したわ。」

「お茶が飲みたくなつたよ。」

「今持つて来るね。今日は、ゆっくり休んでなさい。」

「そうするよ。」

「休んだら、きっと治るわ。元通りになるわ。」

母は下りて行つた。

「目の錯覚かゝゝ、そんなのかな？」

母が、お茶を持つて来た。すぐに下りて行つた。

「あの子、確かイチヨウの木の下で拾つたつて言つてたな。」

お茶を一口飲んだ。「イチヨウの木の声、あの子の声とそっくりだつたな。」

一男にはなんだか、本当のことのように思えてきた。

神社の仲間

妖精ミクは、神主が百円シヨップで買った三百円の巣箱の中にいた。部屋の中の掃除をいていた。

細いススキの枯れた茎や葉を敷いて、ベッドを作っていた。

「こんにちわ、ミク!」「やあ、ユミ!」

ミクの巣箱は、神社のそばの桜の木の人間の目の高さくらいのところに取り付けられてあった。桜の木は、イチヨウの木の下に大きな木だった。妖精は大きな木にしかいなかった。

「な、なんだ、この巣箱、プラスチックじゃない!」

「なんでもいいわ、雨風を凌げれば。」

「どうせ百円シヨップで買ったんでしょ!」

「なんでもいいわ、住めれば。」

「神主、ケチだな。」

「ユミ、ちよつと入ってよ。とってもいいわよ。」

「どれどれ!」「ねっ、いいでしょう?」

「入ったら、けっこう広いのね。」「でしよう。」

「昨日の大雨は大丈夫だった?」

「大丈夫大丈夫、とっても大丈夫だったよ!」

「そう?」「雨がプラスチックをドラムみたいに叩いて、とっても面白かったわ。」

「そう。」「今度、雨の日に遊びに来てよ。」「そうするわ。」

「同居の小鳥、早く来ないかな。」

「一人じゃ寂しい?」「うん。ウグイスがいいな。」

「ウグイスか。」

「いつの間にか、秋の風になったわね。」「そうだね。」

「秋になると、なんだか切なく淋しくなってくるね。」

「そうでもないわ。わたし楽しくなってくるの。」「どうして?」

「だって、果物がたたくくさん実るでしょう!」「そうだね。」

妖精たちは、果物が大好きだった。

「昼間行ったら、ぶどうやイチジクが実っていたわ。」

「どこで?」「田辺さんとこの農園で。」

「じゃあ、夜のお仕事は何時からでしょう?」

「そうね〜、七時頃がいいんじゃないかしら?」「じゃあ、七時きっかりにここで。」

神主がやって来た。「やばい神主だ!じゃあ七時に来るね!」「待ってるよ!」

十センチのユミは消えた。妖精たちは、近距離なら消えて移動することができた。

「ユミだな、あいつの気配がしたぞ!」「違います。」

「まあいいや。今日は彼岸の入だから、おはぎを持ってきたよ。食べなさい。一つはミクの分、あと一つはユミの分だ。」

「ユミにもいいんですか?」

「いくら怒っても、神社の仲間だからな!」

「どうもありがとうございま〜す!」

神主は「泥棒はするなよ!」と言い残して帰って行った。

「ユミに電話しよつと!」

初秋の爽やかな風が吹いていた。小鳥たちが、ああでもないこうでもないそうであると、さえずり合っていた。

中庸の徳

日曜日だった。朝の十時過ぎだった。一男は二階の自分の部屋から、カラスの大群を見ていた。

「狸山のカラスだな。どこに行くんだろう？」

携帯電話が鳴った。女友達の由紀からだった。彼女は小学一年生からば友人で秀才だった。一男とは違う有名な進学校に通っていた。

「智明くんから電話があっただけ、大丈夫？」

彼女は、智明とも小学一年生からの友人だった。三人組だった。

「智明が電話したんだな。大丈夫だよ。」

「ホームレスになって共産主義者になるんですって？」

「冗談だよ、冗談。」

「だったらいいんだけど、あなた時々極端なことやるから、昔から心配になったのよ。」

「冗談だよ、冗談。」

「それならいいんだけど、とにかく裏表っていう考えは良くないわ。中庸の徳って言うでしょう。」

「ちゅうようのとく？」

「哲学者アリストテレスの言葉よ。つまり、不足も行き過ぎも駄目だってこと。」

「ああ、そういうことか。」「分かった？」

「分かった！ありがとう！やっぱり秀才は言うことが違うな〜。」

「何か悩み事があつたら、いつでも電話して。」

「電話するよ、わざわざ、ありがとう！」

「じゃあね！」電話は切れた。

「ちゅうようの得ね…、インターネットで調べようっと！」

一男はインターネットで調べた。「中庸の徳か、なるほど、こういう字を書くのか…」

母が上がって来た。「一男、大丈夫？」

「大丈夫。ただのノイローゼだったみたい。」

「それなら良かったわ〜。」

「目の錯覚、たぶん精神的に疲れてたんだね！」

「元気になって良かったわ〜。お父さんから叱られたわ。あんまり追い詰めるなっ！」

「そんなこと言った？」

「一男は、昔から極端なことをするから、あんまり刺激するな、って。」

「極端なこと？するかな〜。」

「あなたは、昔から何でも極端だったわね。母さん、つい忘れてたわ。」

「もう大丈夫だよ、今日から、中庸の徳で行くから！」

「ちゅうようのとく？」

「なあんだ母さん知らないの？」

「知らない。誰の言葉？」

「哲学者アリストテレスの言葉！」

「どついう意味なの？」

「つまり、不足も行き過ぎも駄目だったこと。」

「なるほど、いい言葉だね。」

「毎日三時間勉強したんでしょ？母さんの受験勉強も大したことないな〜。」

一男は、皮肉っぽく笑って見せた。母は、当惑した表情で笑っていた。隣の屋根から、一羽のカラスが二人を見ていた。

はいはいはいの、はいはいはいの

夜の七時だった。ユミは竹輪を一本食べてからミクのところにやって来た。

「あ〜〜、美味しかったわ、竹輪！」「あなたって、竹輪好きね〜。」

「そうね〜、竹輪のない人生は闇ってところね。」「そっんなに！」

「さあ、出掛けましょう！泥棒に。」「はいはいはい！」
「準備オツケーかい？」「オツケーよ〜〜！」

「楽しい泥棒に出掛けましょう〜」
「盗んで食べれば最高の味だ〜〜」

二人は楽しく歌い出した。

はいはいはいの はいはいはいの

妖精は〜盗み合って助け合う〜 仲良く盗み合って助け合う

こりゃあ〜とってもいいことだ はいはいはいの はいはいほ

い

地球をみんなで守りましょう みんなで仲良く取り合えば 平

和な世界を築けます

はいはいはいの はいはいはいの

一生懸命に働けば地球の空気が汚れます 他の生物殺します

だから盗み合って助け合う

こりゃあ〜とってもいいことだ はいはいはいの はいはいほ

い

欲張って働くと地球の空気が汚れます 地球の自然を壊します

だから盗み合って助け合う

こりゃあ〜とってもいいことだ はいはいはいの はいはいほ

い

二人は、小学一年生の大きさになり、リュックの中にハサミを入れて、夜の仕事に楽しく出発した。

「ほいほいほいの、ほいほいほい」 「ほいほいほいの、ほいほいほい」

「ここよ！」

農園は闇に包まり静まり返っていた。虫の声だけが聞こえていた。二人は、十センチの大きさになった。ユミは魔法をかけた。

「リュックもハサミも小っちゃくなっれ！」

ミクは目をぱちくりしていた。「暗くて、よく見えないわ。」

「十分ほど見てると見えてくるわ。」

目が暗闇に慣れてきた。「月明かりって、意外と明るいね。」

「ミクちゃん、あなた毎回同じこと言ってるわ。」

「あら、そうかしら？」

ぶどうの棚が見えた。ミクは、そっちに行こうとした。

「駄目駄目、イチジクが先よ。」 「どうして？」

「取りやすいからよ。もし途中でバレたら、何も取らずに帰ることになるでしょう。」

「そういうことか。」

イチジクの木の下に来た。「ユミ、高くて取れないわ。」

「大きくなりましょう。」二人は、小学一年生ほどの大きさになった。

「ミク、これで大丈夫。」

まだ少し背が足りなかった。下に生ってる実だけ取った。それぞれ十個だった。持ってきたリュックに入れた。

「今度はミクの好きなぶどうよ。」ミクは微笑んだ。ミクは、ぶどうの棚の下で手を伸ばした。

「駄目だ、とても届かないわ。」ユミは周りを見た。

「あそこに梯子が付いてるわ。あそこから登って取るから、下で受け取ってちょうだい。」 「うん。」

「ハサミちょうだい。」「はい、ハサミ。」

ユミは十房落とすと降りてきた。「五房づつよ。」「はい。」

「さあ、帰りましょう。」

夜の仕事は、ほいほいほいの、ほいほいほい♪で終わった。

アオゲラの巢穴

月曜日の朝だった。「あれ、お兄ちゃんは？」

「一男は今日は休み。学校の創立記念日なんだって。」

「そうなの。いいな〜。」

一男は十時に起きてきた。

「病院には行かなくていいの？」

「行かなくても大丈夫。ただのノイローゼだったみたい。」

遅い朝食を済ませると、出掛ける準備をしていた。

「あら、どこかに行くの？」

「ちよつと、狸山まで。」

「何しに行くの？」

「精神的ストレス解消と大学合格を頼みにね。」

「ってなこと言つて、野鳥観察かなんかじゃないの？」

「あたり〜〜！」

「それもいいわね。気を付けて行つてらっしゃい！」

「すぐ帰ってくるよ。」

一男はママチャリで狸山に向かった。自宅から山のふもとまでは、約三キロの距離だった。

「マウンテンを買つておけば良かったな〜。」

前籠にはバッグが入っていた。その中にはデジカメを入れてあった。

「マウンテンは、前籠がないからな…。」

毎日変わる刻々と変わる景色や人の顔を見ながら楽しく走っていると、いつの間にか狸山のふもとに着いた。

「ここからが大変だ！」

一男は坂の途中で自転車を降りた。一男は、神社の駐輪場に自転車を止めると、まっ先にイチヨウの木に向かった。

イチヨウの木の下には、ぶどうの実の皮が沢山落ちていた。

「なんだこりゃあ？」

一男の大好きな巨峰だった。「こんなところに捨てるなんて、撥が当たるぞ！」

一男は、イチヨウの木を、下からしげしげと眺めた。べつだん変わったことのない普通のイチヨウの木だった。

五メートルくらいの高さの幹に、キツツキの開けたらしい穴がある以外には。

「あれは、アオゲラの開けた穴だな。ひよっとすると、アオゲラの巣穴かな？」

一男は野鳥に詳しくかった。デジカメをバッグから取り出した。「あの穴を撮るか……」

ファインダーを覗いていると、急にアオゲラが飛び出してきた。

「わくくく、びっくりした！」一男はカメラのシャッターを押した。「やっぱり巣穴だったのか！おくくく、いいのが撮れたぞ！」

一男はイチヨウの木を撫でた。

「どうもありがとう。」反応は無かった。

「変だなくくく？」もう一度撫でた。やっぱり反応は無かった。

「これで当たり前か！」

一男は他の木に向かって歩きだした。

「やっぱりノイローゼで、耳も変になってたんだ。」

一男は、森全体を見ていた。

「ここは、野鳥が多いなくく。」

神社の屋根の上で、妖精のユミが一男を見ていた。「あの人、何しに来たのかしら？」

分かったぞ〜！

木の枝に止まり、雀よりもちよつと小さい、くちばしと首が短く丸つこ可愛いエナガが一男を逆観察していた。

ホーホケキョウ！

「うん？ウグイスか？」それは、ウグイスの鳴き真似をしている鳥だった。「なんだ、カケスカ！」

妖精のユミは、相変わらず神社の屋根の上で一男を見ていた。「なんだ、鳥の観察か。」

一男は神社のほうにやって来た。

「あつ、こっちに来るわ。」ユミは身を伏せた。

神社の渡り廊下の近くに、大きな桜の木があった。地面の一男からは見上げる距離だった。

「なんだ、あの巣箱は？」一男は、よく見た。

「なんだか、プラスチックみたいだな〜。」

一男は笑い出した。「はっはっは、あれじゃあ小鳥は一生待ったって入って来ないよ！」

一男は、神社の裏のほうに向かって歩き出した。「小鳥は用心深いから、木の巣箱でないと入らないよ。」

振り返った。「まったく分かってないな〜、この神主は。」

一男が見えなくなると、ユミがミクの巣箱にやって来た。

「ミクちゃん、中にいたの？」

「いたわ、中で隠れていたわ。」

「巣箱を見て、何か言ってたみたいけど？」

「プラスチックの巣箱じゃあ、一生待ったって小鳥は入らないって、言ってたわ。」

「ふ〜ん、そうなのかな〜？」

「あの人が言ってたこと、分かるような気がするわ。」

一男は、山の中腹を一回りすると、神社に戻って来た。

「何も不思議なものは無かったな〜。」

それから、ペットボトルのコーラを一口飲み、またイチヨウの木の下にやって来た。

「あの少女、カラスに乗って狸山まで来て、それから、このイチヨウの木…」

一男はイチヨウの木を見上げた。

「少女の声とそっくりのイチヨウの木の声…」

一男は、イチヨウの木を撫でた。まったく反応は無かった。

「もしかしたら、少女はここからやって来て、ここに住んでいるのでは？」

一男は、ここでよくユーフォーが目撃されるのを知っていた。「もしかして、宇宙人！？」

一男は指を鳴らした。

「あの大きさの人間、雑誌で見たことある！分かったぞ、絶対に宇宙人だ！」

一男は急いで自転車に乗って、大声で「分かったぞ〜！」と叫びながら帰って行った。ユミは神社の屋根の上で、不思議そうに彼を見ていた。

「どうしたのかしら、あの人？」

第三の道！

「母さん！俺、中庸の徳ってやつで、大学でも就職でもない第三の道！専門学校に行くよ！」

「専門学校？何の？」

「インターネットの！」

「そんなのあるの？コンピュータの専門学校じゃないの？」

「ううん、インターネットの専門学校！」

「そんなの聞いたことないわよ。」

「探せば絶対にあるよ。」

「コンピュータの学校だったら、母さんも知ってるけど……」

「コンピュータとかは、僕は苦手なんだよ。でも、インターネットなら得意なんだよ。」

「まあ、そういうところがあれば、別に母さんは反対しないけど。」

「これからは、ますますインターネットの時代だから！」

「まあ、そうだけど。」

「学校では、検索の鬼と言われてるんだから！」「検索の鬼？あら、そうなの？」

「じゃあ決まり！今からインターネットで探すよ！」

「まあ、何でもいいから、やって！ホームレスよりかましだわ。」

「それ言わないでよ……！」

一男は二階に上がり、自分の部屋に入ると、パソコンの前に座り得意の検索を開始した。一男の検索スピードは一級品だった。

「あつたあつた！日本コミュニケーション大学。これだ！」

一男は急いで駆け下りて行った。

「母さ……ん、あつたよ……！」母さんは喜んだ。

「お父さんが帰ったら、早速相談してみましよう！」「うん！」

「あ……良かったわ……、一男がホームレスにならなくて！」

「それ言わないでよ……！」

「あなた、検索が得意なんでしょう。だったら検索専門の学校なんてないの？」

「そんなの、ないよ。」「それは残念！」二人は笑った。

一男は二階に上がって行った。

「日本コミュニケーション大学、日本コミュニケーション大学！」

一男は、友人の智明に電話した。「俺、専門学校に行くことにしたよ……」話は続いた。

「いろいろと心配かけて、ごめん！」

由紀にも同じような電話をした。「日本コミュニケーション大学？わたし調べてみるわ。」「用心深いな……。」

「よ……く調べてから、また返事するわ。」「じゃあ、お願いします！」

一男は冷静になって思った。

「最近、詐欺みたいな学校も多いからな……。やっぱり彼女は頭がいいな……。」

一男は改めて彼女のことを思った。

「俺みたいなボンクラには、彼女のような頭のいいお嫁さんが必要だな……。」

一男は、いつものように勝手なことを考えていた。考えが極端に走るのも、一雄の悪い癖だったが、勝手に妄想するのも、一男の悪い癖だった。

ありがとう！

由紀から電話がかかって来た。

「日本コミュニケーション大学なんだけど、資本金十億円もしつか
りしてるし、歴史もけっこうあるし、と言っても五年だけど。イン
ターネットでも評判もいいようだし、学生援護制度にも入っている
し、大丈夫みたい。」

「ああそうなの。重要な情報、わざわざどうもありがとう！感謝し
てるよ！今度、君の好きなものを奢るね！」

「また何かあつたら連絡して、どっちかというとメールのほうがい
いんだけど。」

「分かった！」「じゃあね！」

「あつ、ちよつと聞きたいことがあるんだけど。」「なあに？」

「ユーフォー見たことある？」「あるわよ。以前、狸山で。」

「狸山？」「どういふ感じのだったの？」

「まあ、テレビで見るような光る物体って感じだったかな。」

「何色だった？」「青っぽい色だったわ。」

「宇宙人は見たことある？」「そんなのないわ。」

「いつごろの話し？」「去年の夏。」

「今度、詳しく教えてくれない、その話し。」「いいけど、どうし
て？」

「実は、宇宙人を見たんだよ。」「どんな？」

「体長十センチくらいなの。」「また~~~~あ！？」

「まあ、信用してくれなかったらいいけど。」

「目の錯覚かなんかじゃないの？」

「そうかも知れない。」

「きつとそうよ。もっとリラックスして休んだほうがいいわ。」

「ありがとう、そうするよ。」

「じゃあね！」「電話は切れた。」

彼女の話しを聞いて、やっぱり精神的ストレスからの目の錯覚かと思っただが、一男には妙な確信があった。

「あれは、絶対に目の錯覚なんかじゃない!」

約五分後、今度は智明から電話がかかってきた。

「宇宙人を見たんだって?」「ああ、見たよ。」

「どこで?」「弥生西公園で。」「いつもの、あそこの?」

「そう。」「どんなんだったの?」

「身長が十センチくらいだったよ。」

「ほんとに?」「ほんとだよ。」

「目の錯覚じゃないの?」

「この目で、確かに見たんだよ。」

「ホームレスの次は宇宙人か。」「ほんとなんだって!」

「で、どうなったの?」

「狸山のほうに、カラスに乗って行っちゃったよ。」

「カラスに乗って?」「そう、カラスに乗って。」

「じゃあ、それは宇宙人じゃないよ。宇宙人はカラスなんかには乗らないよ。」

「じゃあ、宇宙人じゃなかったら、何だ?」「分からない。」

「でも、宇宙人がカラスを改造したのかも知れないぞ。」

「カラスを改造?」

「宇宙人だったら、そのくらいはできるだろう?」

「また、一男の十八番の勝手な妄想が始まったな。」

「妄想なんかじゃないって、この目で確かに見たんだよ。」

「確かに、狸山はユーフォーの出現するところだけど…」

「絶対に宇宙人だったよ、あれは。」

「よし分かった!今度の日曜日にカラス山を調査に行こう!」

「ほんとうに行ってくれる?」

「昔からの友人だからな。見捨てるわけには行かないよ。」

「ありがとう!」

「じゃあ、今度の日曜日の朝九時に自転車ですっちに行くよ。」

「待ってるよ。」
「電話は切れた。」

狸山キャンプ場

次の日曜日がやって来た。智明は九時きっかりにやって来た。一男は玄関先で待っていた。

「やあ、智明、悪い！」

「いいよ、いいよ。気にするなっ！」

「勉強があつたんだろう？」

「年中勉強なんかしてないよ。」

「それならいいんだけど……」

「気晴らしに、ちょうどいいよ。」

「そう。」

「日曜日くらい、自由に遊ばないと、精神的におかしくなっちゃうよ。」

「じゃあ、ほんとうにいいんだ？」

「いいに決まつてるだろう。ここまで来たんだから。」

「じゃあ、出発しよう！」「出発しよう！」

空を見上げると、カラスの大群が飛んでいた。

「あつ、狸山のカラスだ！」

「いつも、どこに行くのかな？」

「いつも、この時間になると飛んでいるんだな。」

「あれに宇宙人が乗ってたのかよ？」

「そうなんだよ、あれに乗って狸山に飛んで行つたんだよ。」

「狸山にね、いつたい狸山に何かあるのかな？」

二人の自転車は、弥生西公園の前を通って行つた。いつもの三人組の子供たちが、公園で遊んでいた。

「子供のころを思い出すな。」俺たちも、よくあやつて公園で遊んでたな。」「ああ、そうだな。」

狸山には、約三十分で着いた。まだ、山のふもとだったが。

「智明、どうする？自転車をここで止めて階段を登る？」

「またここまで来るのは面倒臭いよ。いつものように、車道を自転車で行こう！」

「分かった！」

急な坂だった。二人は、自転車を降りて、押しながら歩き始めた。

「なんでも、由紀ちゃん、狸山でユーフォーを見たらしいよ。」

「聞いたよ。去年の今頃の話だろう。」

「どのあたりで見たのかな？」

「キャンプ場で見たって言ってたよ。」

「狸山のキャンプ場で？」

「あんなところでね？何時ごろ？」

「夜の十時ごろって言ってたよ。」

神社に着いた。駐輪場に自転車を止めた。

「狸山は昼間はカラスはいないけど、夕方になると帰って来て、カラスだらけになるんだよ。」

「そうらしいね。どつから調べる？」

「じゃあ、キャンプ場に行こう！」

キャンプ場は、神社の裏のほうにあった。神社が運営しているキャンプ場だった。

キャンプ場に行く前に一男は、大きなイチヨウの木の下にやって来て、イチヨウの木を触って撫でた。「この木を触るのが、ジンクスになっちゃったよ。」

「何かいいことあるの？」

「いいや別に。おまじないみたいなものだね。」

一男はまたイチヨウの木の下 of 巨峰の実の皮を発見した。

「あつ、また巨峰の皮だ？」「どうしたんだよ？」「この前、一人で来たときにもあったんだよ。」

一男は、木の上を見た。「アオゲラが食べたのかな？」

「アオゲラって？」「鳥の名前。」

「そんなことはどうでもいいよ。さあ行こう！」「ああ、分かった！」

二人は、キャンプ場に向かって歩きだした。妖精のユミとミクが神社の屋根から二人を見ていた。

ユーフォーだ！

一男は急に振り返った。

「どうした、一男？」

「いや、ちよつと背中に見線を感じたもんで。」

智明は周りを見た。

「誰もいないよ。」「気のせいだな。」

ユミとミクは、屋根の上で二人を見ていた。

「キャンプ場に向かっているわ。」

「わたしたちも行きましよう！」

キャンプ場は神社から近かった。歩いて五分くらいのところにあつた。キャンプ場の入口には、看板が立ててあつた。

狸山キャンプ場は、青少年の皆さんが野外活動を通じて自然とふれあい

情操を豊かにし、心豊かな人間性を培うことを願って設置された施設です。

管理人などはいなかったので、黙って中に入れた。

キャンプ場の中には、一泊三千円の九人用バンガローが一棟、一泊二千円の五人用バンガローが一棟あつた。

一泊千円の五人用のテントが十棟あつて、炊事棟一棟、管理棟一棟、便所二棟、一棟は障害者用トイレ、キャンプファイヤー場が2ヶ所あつた。キャンプ場の利用料は、大人が千円、二十歳未満が五百円になっていた。大人でも、学生証があれば、五百円になっていた。

管理棟から神主が出てきた。「君たち、何してるの？」

一男が答えた。「ちよつと、キャンプ場の見学に。」

「あつ、そう。だったらゆっくり見て行ってください。」

「はい、ありがとうございます！」

キャンプ場は、けっこう広かった。小さな庭に造られたような小川も流れていた。一男はキャンプ場は初めてだった。

「ここ意外と広いんだね。」

智明も初めてだった。「そうだね。」

キャンプ場は一年前にできたばかりだった。

「普通のものばかりで、変なものは見当たらないね。」

一男は、山の木を見ていた。「あつ、コンドルだ！」

「コンドルって、あのコンドルは飛んで行く、っていう歌の？」

「そう。こんなところにはいない鳥だよ。どうしてこんなところにいるんだろう？」

「密輸して飼ってたんじゃないか。それが逃げて。」

「そうかも知れないな。」

ユミとミクは、管理棟の屋根の上から、二人を見ていた。

「あの二人、いったい何してるんだろうね？」「何してるんだろうね？」

「何かを見てるわ。」「何を見てるんだろうね？」

ユミとミクの位置からは、コンドルは見えていなかった。

ユミとミクは、首をひねるばかりだった。

「神主がいないときに、ここのバーベキューで焼いた、盗んできたトウモロコシ、おいしかったな〜！」

「あれは、とつてもとつても美味しかったわね〜！」

「また、盗んでやろうね！」「うん！やろうやろう！」

少し高くなった丘の上に、それはあった。

「智明！なんだあれは！？」「ユーフォーだ！」

考えるのは時間の無駄

それは、ブリキのユーフォーだった。直径五メートルくらいの大きさのもので、三本の脚で立っていた。

「材質はブリキだ。よくできてるな〜。」

「これ、けっこう金がかかってるよ。」

高さは、人間の大人の身長くらいあった。

「中に乗れるのかな〜。」

「乗ったら、きつと壊れるよ。そういう感じ。」

「そういう感じだな〜。」

「ほら、書いてあるよ。絶対に乗らないでください。壊れます、つて。」

「やっぱり。」

「どうして、こんなの作ったんだろう？」

「きっと、ユーフォーの目撃場所として有名だから、あやかっ作つたんじゃないの？」

「そのようだね。」

「つまり、キャンプ場の宣伝のためだよ。」

「これで、キャンプ場を、ますます有名にしようっていう魂胆だな。」

「ここの神主、商売上手だね〜。」

「でも、この模型を見て、本当のユーフォーが来るかもな。」

「こんなものじゃあ、来ないんじゃないの。」

「とても無理か？」「無理無理！」

「由紀ちゃん、ここで見たって言うってたね？」

「言ってた言ってた。」

「あの由紀ちゃんが言うんだから、嘘とか錯覚なんかじゃないよな。」

「そうだね。」

「でも、本当だとしたら、何しにここに来るんだろう？こんなところ？」

「何かあるんじゃないのかな、ここに。」

「狸山に？」「そう。」

「それを探しに来たんだろう、俺たち。」

「それを探しに？そうだとそれを探しに来たんだ！」

「じゃあ探しに行こう！」「行こう！」

二人は、それを探しに歩き出した。

「それって、何だ？」

「ユーフォーが必要とするもの。」

「じゃあ、物とは限らないな。」

「そうだな、物じゃないかも知れないな。」

「難しくなってきたぞ！」

「難しくなってきたな。」

「もし、物じゃないとしたら、何だ？」

「何だろうね？」

二人は腕を組んで考え始めた。

ユミとミクは、管理棟の屋根の上から、二人を見ていた。

「あの人たち、何かを考え始めたわ。」

「何を考えているんだろうね？」

「人間って、いろいろ忙しいね。」

「やっぱり、わたしたち妖精とは大分違うわね。」

「なんでも盗めば楽なのにね。考える必要はなくなるのにね。」

「その通り！考えるのは馬鹿よ。時間の無駄だわ。」

「人間って、馬鹿なんだね。」

「盗んで暮らせば楽なのに、本当に馬鹿よ。」

一男と智明は、腕を組み、まだ考えていた。

「まだ考えているわ！」「ばっかみた！」

ユミとミクは、顔を見合わせ、両手で口を押さえて大笑いをこらえていた。

聞き込み開始

「腕を組み、いったい何を考え語り合っているのかしら？」

「聞きに行きましようか？」

「どつかいい場所はないかな〜？」

「ユミ、とってもいい場所を発見したわ！」

「どこ？」

「あのユーフォーの模型の中！」

「それはいいわね！」

ユミとミクは、消えて瞬間移動した。声が外に漏れるといけないうで、テレパシーで話すことにした。

「わ〜あ、ここいいわね〜！」「最高だわ〜！」

外では、相変わらず、一男と智明が腕を組み、ブリキのユーフォーを睨みながら、考え語り合っていた。

「物じゃない、としたら…」

「物じゃない、としたら…」「心…」

「心？」「だけどな〜、心なんて、人間はほとんど同じだよな〜」。

「そうだよな〜。」

「ユーフォーが、狸山の誰かの心を求めて来るわけがないよな？」

「そうだよな〜。」

「ひよつとしたら、ここには人間以外の特殊な心があるんじゃないか？」

「人間以外の特殊な心？」

「人間ではない、何かの心が。」

「人間ではない、何かの心？」

「幽霊も人間だしな〜。」

「う〜ん、分からないな〜。」

「ユーフォーが探している心…」「いったい何だ？」

ユミとミクは、息を殺して二人の会話を聞いていた。ユミは、心の中で二人に話しかけていた。

『そ・れ・は、妖精の心だよ!』

「さっぱり分からないな〜。」

『ボケ!』

「考えれば考えるほど、分からなくなってきたよ。」

『ボケ!』

「そんな心は、多分こんなところには無いな!」

『アホ!』

「心なんかじゃないよ。やっぱり物だよ」

「そうだな、やはり物だな!」

「ここにいても仕方ない、探しに行こう!」

「探しに行こう!」二人は歩き出した。

「あの二人、行っちゃったよ。」

「馬鹿みたいな会話だったね〜。」

「何の会話だったの?」

「何の会話だったのかしらね?」

「人間同士の会話は、さっぱり分からないな〜。」

「ユーフォーが探している心、とか言ってたよね?」

「言ってた、言ってた!」

「いったい、何のことかしらね?」

「何のことだろうね?」

「それにしても、ユミ。」「なあに?」

「ここ、いいね。」

「このブリキのユーフォーの中?」

「そう。」「そうね〜、なかなか、いいわね〜。」

「ここ、わたしたちの別荘にしましょうね。」

「名案だわ!別荘にしましょう!」

「あの人たちを追って行かなくていいの?」

「もういいわ、もうアホらしくって、アホらしくって。」

一男と智明は、キャンプ場内を何か不思議なものがないか探索していた。

「ここにはありそうにないな〜。」

「キャンプ場を出よう。」「そうしよう。」

二人はキャンプ場を出た。

「視点を变えて、ユーフォーじゃなくって、宇宙人が好みそうなものを探そう。」

「それは、いい考えだな。」

「そうだ、この辺りの人に直接聞こう。不思議なことがないかどうか。」

「それはいいね！」

二人は近くの田辺さんという農家の家に入って行った。

「すみません、わたしたちユーフォーを研究している者ですが、この辺りで不思議なことってありませんでしたか？」

「不思議なことって言えば、あるよ。」

「どんなことが？」

「ときどき、果樹園の果物が盗まれるんだよ。」

「人間に盗まれるんじゃないですか？」

「人間じゃないみたいなんだよな〜。」

「どうして分かるんですか？」

「赤外線感知器に反応しないんだよ。」

「つまり、人間の体温を感じないってことですね？」

「そういうことになるね。だから、監視カメラにも映っていないんだよ。」

「それは不思議ですね〜。」

「実に不思議なんだよ。」

「すみません、もっと詳しく教えてください！」

「いいよ。こつちも困ってたところだから。」

謎の果物泥棒

農家の田辺さん家の聞き込みは終わった。それから彼らは、他の農家を十件訪問した。ほとんど同じような内容の返事が返ってきた。

「不思議だな〜、みんな同じようなことを言ってるな〜。」

「つまり、人間じゃないものに盗まれてるってことか。」

「そういうことになるな。」

「やっぱり宇宙人かな〜？」

「宇宙人が果物を盗んでどうするんだ？」

「果物なんか食べるのかな〜？」

「ひょっとしたら、大好物かも知れないな〜。」

「そんな話し、聞いたことないよ。」

「でも、果物が目的だったら、別に狸山じゃなくってもいいわけだろう？」

「そういうことになるね。」

「それとも、狸山の果物には特別な何かがあるのかな？」

「そんなことはないと思うよ。同じだよ。」

「そうだな〜。狸山の果物は特別に美味しいなんて聞いたことはないしな。」

「それとも、狸山の果物には、別の何かがあるのかな〜？」

二人は、再び腕を組み考え始めた。

「とにかく、こういう貴重な情報を得ただけでも、今日は収穫だよ。」

「そういうことだな。」

二人は神社に帰ってきた。二人は、神社内のベンチに座った。

「宇宙人以外は考えられないな〜。」

「やっぱり宇宙人なのかな〜。」

二人は、腕を組み考え始めた。

「狸山の果物と宇宙人…。」

「どういう関係があるんだろうな？」

ユミとミクは、もう神社に帰ってきていて、神社の屋根の反対側から、隠れて二人を見ていた。

「まゝた、腕を組んで考えてるわ。」

「馬鹿みたい。」

「あゝ、おかしい。」「おつかしいわねゝゝ。」

ユミとミクは、両手で口を押さえ、大笑いを必死で堪えていた。

「そうだ、由紀ちゃんに聞いてみよう！」

「そうだね、彼女は頭がいいから、俺たちとは違う考えがあるかも知れないね。」

「電話してみよう。」

「邪魔しないようにな。」「分かってる！」

智明は由紀に電話した。

「今、大丈夫？」「大丈夫よ、何？」

「ちよつと聞いてくれる？」「いいわよ、何？」

「今、一男と狸山にいるんだけど…」

「ああ、そうなの？」

「宇宙人のことについて調べているんだけど…」

「宇宙人？」

「不思議なことがあつてね。ここらあたりの農家で果物が盗まれているんだけど、誰に盗まれているんだか分からないんだよ。盗難対策に赤外線の見視カメラで見張ってるらしいんだけど、その赤外線には反応していないんだよ。つまり、人間の体温がないってことなんだけど、どう思う由紀ちゃんは？」

「猿とかじゃないんだ？」

「猿だったら、体温があるから人間と同じように反応するよ。」

「うゝゝん。難しいなゝゝ。」

「由紀ちゃんでも？」

「わたし理数系の人間じゃないから、そういうのは苦手なのよ。」

「ああ、そつか。悪かった！」

「そういうこと以外だったら、遠慮なく連絡して。」

「ありがとう！」

電話は切れた。「何だって?」「分からないって!」

二人は、また腕を組み考え始めた。

「謎の果物泥棒か……、いったいどういう奴だ?」

「果物泥棒め、今頃どこで何してるのかな……?」

ユミとミクは、相変わらず神社の屋根の反対側から、隠れて二人を見ていた。

「また、腕を組んで考え始めたわ。」

「いくら考えても無駄だって!時間の無駄!」

「いったい何を考えているのかしら?あ……おかしい!」

「あの二人、完全なアホだね。」「そうみたいだね。」

果物泥棒のユミとミクは、両手で口を押さえ、大笑いを必死で堪えていた。

涙の隆次父さん

その日の夕食時だった。六時だった。珍しく家族全員で食事をして
いた。

隆次父さんは美味そうにビールを飲んでいた。

「あゝ、美味しい！」

一男は、お茶を飲んでいた。「父さん、もう秋だよ。」

「秋のビールが、また美味しいんだよ！」

料理が運ばれてきた。

「さあ、食べよう！」

みんなは「いただきます！」と言うと食べ始めた。

「一男、進路を決めたそうじゃないか。専門学校なんだって？」

「うん、日本コミュニケーション大学って言う専門学校なんだよ。」

「何の学校なんだよ？」

「インターネットの学校なんだよ。」

「インターネットで勉強する大学なんかで大丈夫なのか？」

「違うよ、インターネットを勉強する学校。普通の通学する学校。」

「大学って、専門学校なんだろう？」

「そうだよ、名前は大学になってるけどね。」

「ほんとうに大丈夫なのか、その学校は？」

「由紀ちゃんが調べてくれたんだけど、資本金も十億だし評判もいいし、大丈夫だって言ってた。」

「そうか。あの秀才の由紀ちゃんが調べてくれたんだから、大丈夫だな。」

「これで、受験勉強しなくていいと思うと、身体の調子も良くなってきたよ。」

「そうか、そんなに苦しんでいたのか。その学校、入学試験とかはないのか？」

「ない、全員合格の無試験の学校なんだよ。」

「そういう学校もあるのか、それで本当に学校なのか？」

「学校だよ、ちゃんとした文部科学省の認可を受けてる学校だよ。」

「ほんとうに、文部科学省の認可を受けてる学校なのか？」

「インターネットで、ちゃんと調べたよ。」

「まあ、それならいいけど。父さんは、お前がホームレスの共産主義者になるとか聞いたんで、びつくりしたよ。」

「それを言わないでよ。」

「まあ、若いときには、共産主義とかにはまるもんだ。そうだな、風邪みたいなもんだな。」

「風邪？」

「俺なんかは堅物の真面目学生だったけど、大学時代は共産主義に溺れていくやつが大勢いたよ。あれは危険思想だな。」

「そうなの。」

「あれは、思春期の若者がかかる共産主義という病気だな。」

妻の映見が、食べながら口を挟んだ。

「隆次さんは、秀才だったのよ。」

「知ってるよ。」

「俺とお前は違うから。一緒に考えるはよくない。これから、大学出だつてどうなるか分からない世の中だから、それでいいのかも知れないな……」

一男もみんなも、誇り高き隆次父さんの話を黙って聞いていた。

隆次父さんは、戦い時の侍のように目をかつと見開いた。

「お前はお前なりに結論を出したことだ。父さんは、お前を信じてる。勉強ばかりが人生じゃない。色んな生き方がある。男だったら頑張れよ一男！負けるなよ、一男！」

「うん、頑張るよ！」

隆次父さんは、少し涙ぐんでいた。食事が終わると、誇り高き隆次父さんは酒を飲み始めた。「一男も大人になったな……！」
妻の映見がやって来た。

「あなた、わたしにも飲ませて！」

二人は、酒を交わし合いながら、お互い涙ぐんでいた。

「一男は、ああ見えても、しっかりしているから大丈夫ですよ。あなた！」

「…そうだな。」

瞬間移動

ユミとミクは、キャンプ場近くの農園で夜の仕事を終え、キャンプ場内を通り、神社に向かって歩いていった。夜の十時過ぎのことだった。

急に雨が降ってきた。ブリキのユーフォーの前だった。

「ちょうど良かったわ。ミクちゃん、ここで雨宿りしましょう!」

「ちょうど良かったね!」

ユミとミクは、リュックをユーフォーの中に押し込むと、十センチの大きさになってユーフォーの中に潜り込んだ。

雨が、ブリキのユーフォーを叩いていた。

「わ〜〜、激しくなってきたわ〜〜!」

「どうでしょう?」

「しばらく、ここにいろしかないわ。」

雨がドンチャカドンチャカと激しくブリキを叩いていた。

「凄い音だわ〜〜!」

「なにせブリキだからね。」

「うわ〜〜!」「凄い音!」

二人は両手で耳を塞いだ。激しい雨は、十分ほどで止んだ。

「ミク、大分おさまってきたみたい。」

「良かったわ〜〜。」

リュックの中には果物が入っていた。

ミクは、そのリュックを見ていた。

「はやく大きくなって、この中の果物を食べたいわ。」

妖精は十センチの大きさのときには、花の蜜しか吸えなかった。大きくならないと、食べ物は食べられなかった。

リュックの中には、桃とみかんが入っていた。

「今日は収穫が少なかったわね。」

「こういうときもあります。」

「コスモスの花も持ってきたわ。これでも吸いましょう!」

ミクは、リュックが少し開いていたところから、コスモスの花を取り出した。

「はい、ユミの分!」「ありがとう!」

二人は、ブリキに当たる雨の音を聞きながら、花の蜜を器用に吸い始めた。

「おいしいわ〜!」「おいしいね〜!」

「これどこにあったの?」「キャンプ場の中よ。」

「だったら、泥棒じゃないわね。」「そうよ。」

「キャンプ場も、十時を過ぎると、不気味ね。」「不気味ね。」

キャンプ場には、客は一人もいなかった。管理棟だけが、電気の灯りがついていた。

「神主、いるのかしら?」「もういないでしょう。」

「電気はついてるわよ。」「いつもついてるのよ。」

雨は止みそうになかった。二人は我が家が恋しくなった。

「ユミ、このまま瞬間移動で帰りましょうよ。」「荷物はどうするの?」

「ここに置いておけばいいわ。後で取りに来るか、直接ここで食べるかにすればいいわ。」

「直接、ここで食べる!それはいい考えだわ。やっぱり、ミクはわたしより頭がいいわ。」

二人は、それぞれの我が家に消えて瞬間移動した。

現実主義の幸子

次の日の月曜の夕刻だった。六時過ぎだった。隆次父さんは、珍しく早く帰って来た。

「ただいま――！」「あら、早いわね――！」

そこで、全員集合の夕食となった。

「あなた、どうしたの、こんなに早く帰って来て？」

「いや、たまには早く帰って、家族みんなのことを見ないと駄目だな――と思ったんだよ。」

「どういうことかしら？」

「今度のことで、家族に目が行ってない。って痛感したんだよ。もっと家族サービスをしないと。」

妹の幸子は、不思議そうに父の横に座って、炭酸入りのブレイプジュースを飲みながら、父を見ていた。

「なっ、幸子！」

「家族サービスって、何するの？」

「それを今、いろいろと考えているんだよ。幸子はどういうのがいい？」

「急に言われても分からないわ。」

「そうだろうな――。父さんも分からないんだから。」

妻の映見が、お茶を持ってきた。

「早く帰ってくるだけでも、家族サービスじゃないんですか？」

「そうかも知れないな――と思って帰って来たんだよ。」

「ちよつと、夕食の準備とかで面倒ですけどね。」

「なんだよ――、ずいぶんじゃないか。せっかく早く帰って来たのに。」

一男が二階から下りてきた。

「父さん、もう帰って来たんだって？」

「よ――、一男。どうだ身体の調子は？」

「ぜんぜん大丈夫。」

「そりゃあ良かった！」

一男は、父の反対側に座った。母が、お茶を出してくれた。

「はい、お茶。」「ありがとう。」

父は話題を変えた。「一男、狸山で変なことがあったんだって？」

「うん、あったよ。日曜日に智明と行ったんだけど、多くの農家の果物が何者かに盗まれるうんだけど、犯人が分からないんだ、さっぱり。」

「猿とか猪とかじゃないのか？」

「あそこは、猿も猪もないよ。いるのは狸だけ。」

「じゃあ、その狸じゃないのか？」

「狸だったら、赤外線に反応するよ。」

「反応しないのか？」「まったくしないらしいんだよ。」

「それは不思議だな。」

「でしょう？」

「おまえ、宇宙人を見たんだって？」

「うん、見たよ。弥生西公園で。父さん、信じてくれるの？」

「ああ、信じるよ。おまえは、嘘をつけない性分だからな。」

「ありがとう。」

「で、どんな奴だった？」

「十センチくらいの奴で、カラスに乗って狸山に飛んで行ったんだよ。」

「カラスに乗って、狸山にか？」

「確かに見たんだよ。」

「ってことは、カラスも宇宙人の仲間ってことになるな？」

「僕は、狸山のカラスは、宇宙人に改造されたって思っているんだ。」

「なるほど、それはありえる話だな。」

「でしょう。」

いたって現実主義の妹の幸子が発言した。「宇宙人なんか、いるわ

けないじゃん！」

父が、幸子に諭すように言った。

「物事を最初から決めつけていけないよ。人の話をよく聞いてから、そして調べてからでないとね。」

「は～～い！」

「由紀ちゃんも見たんだった？」

「それは、宇宙人じゃなくって、ユーフォー。」

「狸山のどこで？」

「キャンプ場で。」

「あそこ。キャンプ場があるのか？」

「去年できたんだよ。」

「よし、じゃあ今週の土曜日に、家族みんなで狸山にキャンプ場に行こう！そして一晩泊まろう！」

幸子が喜んだ。「わ～～、キャンプ場に行って泊まるの～～！だったら、ユーフォーや宇宙人もいるかも知れないわ～～！」

いたって現実主義の幸子だった。みんなは幸子を見て笑っていた。

父さんの説教

隆次父さんは、二階に上がって行った。そして、一雄を前に説教は始まった。

「いいか一男、努力も大切だけど、世の中で一番大切なのは、一歩先に行く戦術なんだ。」

「一歩先に行く戦術？」

「そうだ戦術だ。先を読む戦術だ。」

「囲碁や将棋みたいに？」

「そうだ。ただ真面目に働けばいいってものじゃない。人や社会の先を読むことだ。読むだけでは駄目だ。読んで、行動を起こすことが大切だ。」

「他人より先を行くってこと？」

「そうだ。人間は仲間なんだが、同時に競争相手なんだ。油断したら蹴落される！」

「だから、戦術？」

「そういうことだ。そのためには知識も必要だが、それよりも知恵が必要だ。おまえ、俺よりも、将棋は強かったな。」

「まあね。」

「それで行け。俺には、あまりそういう能力はないが、おまえにはそういう先を読む知恵がある。」

「分かった！」

「人間というのは、困ったときには助け合うが、ちょっと贅沢になると、いがみ合いを始める変な生き物だ。」

一男は、黙って父の話を聞いていた。

「人間は、いいところもあれば、悪いところもある変な生き物なんだ。だから、いいこともすれば、悪いこともする。そのことを決して忘れるな。」

更に話しは続いた。

「みんなが善人ばかりだったら、全員平等の共産主義も有りうるだろう。だが現実はそのじゃない。現実の人間は、そのじゃない。取り締まる人間がいなければ、平気で泥棒もするし、獣のように他人を襲ったりもする。それが人間だ。」
更に話しは続いた。

「以前、三島由紀夫は、人間は他人の不幸を平気で見ていられるほどに強い。と言った。人間は本質的には、そういう動物だ。人間も動物である以上、動物の本能とはそういうものだ。それは、いいとか悪いとかいう問題ではない。ヒューマニズム以前の問題なんだ。」
更に話しは続いた。

「動物は、たとえばシマウマなどは、大勢で群れをなして生きているが、ライオンに一頭が襲われ食べられると、それ以上は逃げなくなるという。なぜだと思う？」

「なぜ？」

「一頭が食べられると、もう自分は食べられることがなくなって安心するからだよ。」

「あゝあ、そういうこと！」

「動物とは、そういうものだ。そこには悲しみとかはない。生きる伸びる本能だけなんだ。」

さすがに、インテリの父の説教は鋭かった。一男は、黙って尊敬する隆次父さんの話を聞いていた。

狸山キャンプ場

キャンプ場に行く土曜日がやって来た。みんなは、張り切って早くから起きていた。

「一男、予約は何時からだっけ？」

「十時だよ、朝の十時！」

「じゃあまだ早いな。」まだ七時だった。

「早く行っただっていいじゃない。狸山を見物してれば。」

「それもそうだな。じゃあ出掛けるか！」

隆次父さんは、自家用車ではなく、脚の運動を兼ねて、電車と徒歩で行くことにした。

「歩いていれば、十時にはなるな！」

妻の映見は、いつも電動自転車ばかり乗っていた。

「久し振りに歩きは疲れそうだな。」

「おまえ、何言ってるんだよ。俺より若いのに。」

一番張り切っているのは、妹の幸子だった。足取りが、誰よりも軽かった。

「みんな～～遅いわ～～！」

みんなは弥生駅から電車に乗った。狸山駅までは各駅停車で五つ目だった。すぐに着いた。

駅から降りたら、一男は先頭になって歩いていた。「ここから狸山まで歩きだよ。」

「どのくらいかかるんだ？」

「二十分くらいだよ。」「そんなに歩くのか？」「二十分なんて、すぐだよ。運動も兼ねて来たんでしょ？」

「まあな。」「狸山まで二十分って言っても、ふもとまでだよ。」

「あつ、そうか！」狸山は、すぐそこに見えていた。

「ほんとうに、てぶらで大丈夫なのか？」「大丈夫！」

「食材なんかも大丈夫なのか？」

「大丈夫、全部キャンプ場が用意しているんだよ。」

「一男、ふもとから階段もあるんだろう?」

「あるよ。」「何段くらいあるんだ?」

「数えたことないけど、五百段くらいかな?」

父は慌てた表情で道路を見ていた。手を挙げタクシーを止めた。

「みんな、タクシーに乗るぞ!」

みんなは黙ってタクシーに乗った。

「狸山のキャンプ場まで!」「はい!」

あつという間に、狸山のキャンプ場に着いた。まだ、八時半だった。四人は、キャンプ場の中に入って行った。誰もいなかった。

「誰もいないじゃないか!」一男はキャンプ場の駐車場を見ていた。「まだ来ていないんじゃないの?」「そうだな〜。」

管理棟から、管理人らしい人間が出てきた。一男だけが知っていた。

「あつ、神主だ!」

父は頭を下げていた。「神主って?」

「神社の神主さん。ここの管理人。」

「おはようございま〜す。」「あなたたちは?」

「今日、五人用のバンガローを予約している若井です。」

「あ〜、若井さんね!」

「まだ早いとは思ったんですけど、気持ちが早ってやって来ました。」

「予約は何時でしたっけ?」「十時です。」

「いいんですよ、いいんですよ。どうぞ、入って使ってください。」

神主は管理棟に走って戻って行った。すぐに小走りですべて来た。

「これ、バンガローの鍵です。どうぞ、今から使ってください。」

「追加の料金は、ちゃんと払います!」

「いいんですよ、そんなものは。サービスです。」

「どうもありがとうございます!」

四人は、バンガローの中に入って行った。神主もついてきて中に入り、説明が始まった。

その頃、ユミとミクは、夜の仕事の疲れで、すやすやと朝寝坊をしていた。

意外な言葉

神主は一分足らずでバンガロー内の説明を終えた。それは、エアコンの使用説明だけだった。

それから神主は、みんなを外に出し、炊事場と便所を指差し教えた。
「テントはテント小屋にあります。自由に使って下さい。五人用まであります。一晚千円です。」

「何人用でも千円なんですか？」
「五人用が千円で、一人減るごとに百円引きになってます。」

「じゃあ、一人だと、六百円ですね。」
「はい。」
神主は帰って行った。

四人は、バンガローの中に入って行った。妹の幸子がぼやいた。

「な～～～～んだ、ただのおんぼろ小屋じゃない！」
幸子はバンガローは初めてだった。

畳はあったが、後はエアコンと冷蔵庫と、布団のセットが置いてあるだけだった。

父が教えた。「普通はバンガローは、畳もエアコンも冷蔵庫も布団もないんだよ。」

「そうなの～～？」
贅沢に育ってる幸子には理解できなかった。

一男は、バンガローに泊まった経験があった。

「こんなもんなんだよ、幸子。そうがっかりするな！」

「あ～～あ、がっかり！」

隆次父さんは、窓から外を見ていた。

「ここにいてもしょうがないから、外に行ってみよう！」
みんなは外に出た。秋の爽やかな風が吹いていた。

その頃、ユミとミクは、大きなイチヨウの木の下で、草むらに隠し
てあった七輪とフライパンを出して、ハンペンをバターで焼いていた。
「ミクちゃん、これ美味しいのよ～～！」
「そうなの？」

「もすぐ焼けるわ。」

箸で裏返しにすると、醤油をかけた。ジュ〜と音がして、醤油の焼けるいい匂いがしてきた。ミクは鼻に手を当てた。

「わ〜〜あ、美味しそうな、いい匂いだわ〜〜!」

「でしょう!」

「早く食べたいわ〜!」

ユミはフライパンを持ち上げ、近くの石の上に置くと、ちょっと時間を置いて冷ましてから、箸で器用に二つに切って、片方をミクに差し出した。「はい!」

妖精は皆、猫舌だった。ミクは手で取ると、食べ始めた。

「わ〜〜あ、美味しいわ〜〜!」

「でしょ〜う!」

ミクは、ハンペンを食べるのは初めてだった。

「寒くなると、こういう温ったかいものもいいね!」

「そうだね。」

ユミが食べ始めると、神主がやって来た。

「こらっ、何を食べてるんだ?」

ユミは叫んだ。「神主さんには、あげない!」

「そんなもの欲しくはないよ。ハンペンだな?」

二人の妖精は、黙々と食べていた。

「竹輪の次はハンペンか。変なものが好きだな〜。」

二人の妖精は、黙々と食べていた。

「また、寶錢を盗んだな!」

「盗んでなんかいません!」

「まあいい。邪魔はしないから、ゆっくり食べなさい。」

神主は帰って行った。ユミは、神主の意外な言葉に拍子抜けした。

「あれっ!?」

ブリキのユーフォー

隆次父さんは。ブリキのユーフォーの近くで立ち止まった。
「なんだ、これは!？」

幸子は目を丸くして見ていた。

「わくくく、これユーフォーだわくくく!」

一男が説明した。

「これ、ブリキのユーフォー。」

「これ、ブリキでできているのか!？」

「そうみたい。触ったら分かるよ。」

隆次父さんは、近づいて触って、げんこつで叩いた。

「ほんとだ、ブリキだ!」

幸子は、やたらと喜んでいた。

「わくくく、よくできてるわくくく!」

ユーフォーの周りを、ぐるぐる触りながら周り始めた。
母の映見も、珍しそうに触っていた。

「ほんとうにブリキだわ、懐かしいわくくく!」

幸子が母に尋ねて来た。「どうして懐かしいの?」

「昔のオモチャはブリキでできてたのよ。」

「えくく、そうなの!？」

「どうして、こんなところにこんなものがあるんだ?」

一男が答えた。「キャンプ場の宣伝じゃないの?」

幸子は、ところどころに直径三十センチほどの穴から、中を覗いて
いた。

「わくくくあ、ぶどうや梨が入っているわくくく!」

「えっ!？」

「ほら見て、お兄ちゃん!」

一男は、別の穴から覗いた。「ほんとだ!？」

父も母も六つある別の穴から覗いた。

「何なんだ？」「何なんでしょう？」

「神主が入れたんじゃないのか？」

「どうしてこんなもの入れるの？」

「そうだな……？」

幸子が言った。「宇宙人が食べるんじゃないの？」

「おまえ、変なこと言うなよ。宇宙人が食べるわけないだろう。」

「どうして……、宇宙人は果物が好きかも知れないじゃない。」

父は周りを眺めてた。

「よし分かった。誰かが隠すために入れたんだ！」

周りは綺麗な芝生になっていた。

「今夜は、この辺りにテントを張って、ユーフォーを待つか！」

一男はびっくりした。「ほんと、父さん!？」

「ああ、せつかくここまで来たんだからな。」

妻の映見が反対した。「あなた、夜になって来ると冷えるわよ。」

「冷えたって、まだ秋だから大したことはないよ。」

「じゃあ、あなた一人で頑張って！」

「なんだ、付き合いが悪いな……。」「じょうだんじゃないわよ。」

こんなところで、風邪でも引いたらどうするの!？」

「じゃあ、僕付き合っよ！僕の責任だから。」

少し離れた草むらから、ユミとミクが彼らを見ていた。

「いつものあの人だわ。」「あの人の家族かしら？」「そうかも知れないね。」

「きつとキャンプに来たんだわ。」「そういう感じね。」

お昼のバーベキュー

お昼になった。

「あなた、正午だね。どうしましょう？」

隆次父さんは、冷蔵庫を開けた。肉とか野菜が入っていた。コーラやビールや、ペットボトルの緑茶も入っていた。

一男は喜んだ。「あつ、コーラだ！」父も喜んだ。「ビールだ！」

「じゃあ、バーベキューでもするか！」

幸子は大喜びした。「わくくくあ、バーベキューだくくく！」

若井家族は、食材を持ってバーベキュー場に向かった。近くには炊事場があった。木の椅子とテーブルがあった。

「映見、このピーマンとしいたけ、洗ってきてくれ。」「はくくい。」

父は、トウモロコシの皮を向き始めた。幸子は、不器用な父を不安そうに見ていた。

「わたしがやるわ！」

「そうか、悪いなくく。」

「お父さんは、肉でも焼いてて。」「分かった！」

神主が、お櫃を持ってやって来た。

「妻がつくって、おにぎりです。焼いて食べると美味しいですよ。食べてください。」

神主は、テーブルの上に置くと、蓋を開けた。おにぎりが、たくさん入っていた。幸子は喜んだ。

「わくくくたくさん入ってる！」

「これも、料金のうちに入っています。安心してください。」
かくして、バーベキューは始まった。

「ほら、幸子！上カルビだ、おいしいぞ！」

幸子はタレに付けて食べた。「わくくあ、おいしいわくくく！」

おにぎりも焼かれていた。「おにぎり、ちようだい！」

みんなは、わいわいがやがや言いながら食べていた。

幸子は、ペットボトルの緑茶を見ていた。「温ったかい、お茶はなのの？」

母の映見が教えた。

「炊事場の自動販売機にあるわ。粉末の緑茶やコーヒーを五十円で買って、お湯を入れればいいのよ。」

「お湯はあるの？」「ボタンを押せば出てくるわ。」

「お母さん、飲んだの？」

「さつき、試しにレモンティーを飲んだわ。」

一男が父に言った。「お客さん、僕たちだけみたいだね？」

「お昼過ぎから来るんじゃないのか？」

「そうかも知れないね。」

「たぶん、食事を済ませてから来るんだよ。」

「どうして分かるの？」

「今回のことで、そうしたほうがいいって分かったよ。」

面倒臭がり屋の隆次父さんは、しきりに自分一人で頷いていた。

その頃、ユミとミクは、大きなイチヨウの木の下で、トウモロコシに醤油をつけて、七輪で焼いて食べていた。

「わくく、美味しいわくく！」「とっても。美味しいねくく！」

神主の涙

みんなが、わいわい言いながら食べていると、神主がやって来た。右手にスープジャーを持っていた。

「これ、女房が作った味噌汁です。食べてください。」

「えっ!?!」「これは、サービスです。」

「どうもありがとうございます!」

神主は、すぐに帰ろうとした。隆次父さんは、ユーフォーの果物のことを思い出した。

「あつ、ちよつと待つてください。」「何でしょうか?」

「あそこにあるユーフォーの模型の中に、果物が入っているんですけど、何なんでしょうか?」

「果物?」「はい。」

神主は、ブリキのユーフォーに向かって歩きだした。中を覗きこむと直ぐに戻って来た。

「何ありませんよ。」

「えっ!?!」隆次父さんは、走って見に行つた。同じように、すぐに戻って来た。

「ほんとだ!?!」「果物が入ってたんですか?」

「はい、ぶどうとか梨とか...」

「どのくらい?」

「けつこうありました。ぶどうが十房、梨が十個くらいです。」

「それは不思議だな...?」

神主は、さっしがついていた。「また、あいつらだな...」

「あいつらと言うと?」「いや、何でもありません。」

「ひよつとして、宇宙人では?」隆次父さんは、一男を信じていた。だから、宇宙人であつて欲しいと願つた。

「宇宙人?実は里子が二人いましてね...。まだまだ子供で、とき変なことばかりするんですよ。」

「あゝあ、そうなんですか！」

「おそらく後で食べようと、隠しておいたんでしょう。」

「じゃあ、どうしてなくなっただんでしょうかねえ？」

「きつと、移動したんでしょう。」

神主は神社の方向を見ていた。

「わたし、急に用を思い出しました。神社に帰りますので、もし用があつたら、管理棟のインターホンを押してください。」「分かりました。」

ユミとミクは、大きなイチヨウの木の下で、仲良く美味しそうに、お茶を飲んでいた。

「おいしいわねゝゝ！」「おいしいわゝゝ！」

神主がやって来た。「こら、おまえたち、また果物を盗んだな！」

二人は黙っていた。

「黙っているのは、盗んだ証拠だ！そんなことやってたら、俺に迷惑がかかってくるじゃないか！」

二人は黙っていた。

「そんなに、果物が欲しいのか？」

ユミが言った。「わたしたち、盗んでなんかいません！」

「じゃあなんだ、このトウモロコシの食いかすは？」

二人は黙っていた。神主は、二人を急に哀れに思ってきた。急に涙が溢れてきた。

「わたしが悪かった！」神主は、手の甲で涙をぬぐっていた。

二人は、びっくりして、神主の顔を見ていた。

「分かった！これからは、果物も買ってやる！だから盗みなんかするな！」

「えゝゝ、ほんと！？」「ほんとなの、神主さん！？」

「ああ、ほんとだ！神に誓って嘘は言わない！」

「神主さん、ありがとう！」「ありがとうございます！」

「お小遣いも、毎日二百円やる。だから賽銭なんか盗むな！」

「わ~~~~、ほんと!?!」「わ~~~~あ、嬉しいわ~~~~!」
神主は、涙を流しながら帰って行った。二人は、呆然と神主を見ていた。秋の爽やかな優しい風だった。

昼寝

「由紀ちゃんは、ここでユーフォーを見たんだな？」

「そうだよ、ここだよ。」

「何時頃だ？」

「夜の十時。」

「じゃあそれまで起きておくか？」

「そうだね。」

「ところで、由紀チャンは、どの大学を受けるんだ？」

「東京大学か京都大学って言うてたよ。駄目だったら、アメリカ留学って。」

「そうか、さすが由紀ちゃんだな。由紀チャンは、英語も堪能だしな。」

「父さん、どう思う？」

「これからは、国際化の時代だから、日本のガラパゴス大学よりもアメリカや外国の大学のほうが、将来いいかも知れんな。日本の大学出ても、外国じゃあ通用しないからな。英語もろくに話せないし。」

「そうだね。」

「僕も英語が、もっとできたらな〜。」

「そんなに英語は駄目なのか？」

「まあ、ほとんど話せないね。」

「もっと、英語を勉強しろ！」「うん！」

「もし、アメリカに行きたいって言うんだったら、お金は出さぞ。」

「今は、あんまり行きたくない。」

「そうか。これからは、中国語なんかもいいかも知れんぞ。」

「そうだね。」

「中国は漢字を使っているからな、覚えやすいかも知れないな。」
「そうだね。」

「とにかく、他人と同じこととしてたら駄目だぞ！」

「はい！でも、あまり変わったこと言ったり、したりすると、変な目で見られるんだよね〜。」

「そんな目は無視すればいいじゃないか。馬鹿は相手にするな。」

「それが、けっこう難しんだよね〜。」

「じゃあ、一緒のふりだけしてればいいじゃないか。裏でこっそりやってれば。」

「それはいいかも。」

「とにかく馬鹿とは付き合うな。損するぞ！」

「うん、分かってる！」

人生に厳格な隆次父さんであった。母と幸子は黙って二人の話を聞いていた。

後片付けが終わると、みんなはバンガローに戻って行った。

隆次父さんは、積まれてある布団を見ていた。

「なんだか眠くなってきた。野営に備えて、ちよつと寝るぞ。三時になったら起こしてくれ。」

父さんは、布団を敷いて寝転んだ。

「わたしも寝ようつと！」幸子も布団を敷いて寝転んだ。母も一男も、真似するように、布団を敷いて寝転んだ。

木の枝や草花を揺らす風の音と、小鳥のさえずりだけが聞こえていた。

その頃、ユミやミクたちも、自分の巣の中で、すやすやと昼寝をしていた。

超能力者ドン・セバスチャン

妖精たちは、大きな木が好きだった。なぜなら、蛇が巻きつくことができず登れなかったからだ。そして、木と木の間隔が大きい大きな木を好んだ。なぜなら、木の枝と木の枝が離れていて、蛇が枝から枝を渡ることができなくなるからだだった。

ユミやミクは、神社の屋根から、人間を眺めるのが楽しみだった。その次に楽しみなのは、キャンプ場の近くの野原で、花の蜜を吸うことだった。

「ミクちゃん、キャンプ場に行きましょう!」「うん、行こう!」二人は、キャンプ場の周りで花をつむと、ブリキのユーフォーの中に入った。

「ここ、やつぱりいいわね〜。」「おちつくわね〜。」「

花の蜜を仲良く吸っていると、駐車場に三台の自動車がやって来て止った。

「お客さんだわ。」「

「普通の自動車じゃないね?」「

「そうだね〜、何かしら?」「

その人たちは、キャンプ場の中に入って来た。テレビ局の取材クルーだった。

神主が、管理小屋から出てきた。

「いや〜あ、ジャパン・テレビの皆さん。ご苦労さまです!」「

テレビ局の取材責任者らしい人物が、名刺を差し出した。

「朝の六時まで、よろしくおねがいします!」「

「どうぞ、どうぞ。」「

総勢六人のスタッフは、八人用のバンガローに入って行った。

「何なんだろう、あの人たち?」「

「普通の、お客さんではなかったわね。」「

六人のスタッフがバンガローから出てきた。ブリキのユーフォーに

向かっていた。

「ミク、こっちに来るわ!」

「近くの草むらに隠れましょう!」

「ミク、あそこがいいわ!」指差した。

二人は消えて瞬間移動した。

早速、ブリキのユーフォーの前でテレビ撮影が始まった。

「この方が、スペインの超能力者の、ドン・セバスチャンです。今回、ここ狸山で、ユーフォーを呼び寄せに、わざわざスペインからお越しくださいました。どうですか。呼び寄せそうですか?」

通訳が入った。返事はすぐに来た。

「大丈夫だと言ってます。必ず成功するだろうと言ってます。」

「呼び寄せるのは、何時頃がよろしいでしょうか?」

通訳が入った。「夜中の一時頃がいいそうです。」

撮影は生放送ではなく録画だった。撮影は、神主を交えて他の場所に移った。

「ねっ、聞いたミク?ユーフォーを呼び寄せるんだって!」

「おもしろいわね〜!」

テレビスタッフは一通り撮影を終えると、バンガローの中に入って行った。どうやら、夜の撮影のために、寝たみたいだった。

大地震

夕方のバーベキューが終わり、若井家族はテレビスタッフと一緒にキャンプファイヤーをしていた。神主もいた。

零時四十五分になろうとしていた。若井家族は、皆起きていた。アナウンサーらしき人が出てきて、撮影は始まった。

「では、これより、ドン・セバスチャン氏のテレパシーによる、ユーフォー呼び込みを始めます。」

彼は、目を閉じ天に右手をかざし、何かを祈ってる様子だった。声には発していなかった。

みんなに緊張が走った。皆、無言で彼を見ていた。

ユミとミクは、ブリキのユーフォーの中にいた。

「見て、始まったわ、ミク!」「どうなるんだろうね?」

一時を過ぎ、一時半になった。上空に変化はなかった。

彼は、両手を上げた。通訳に言った。

「みなさんも、テレパシーを送ってください。来てください、来てください!と。」

みんなは、上空に向かって、「来てください、来てください!」と、テレパシーを送った。

「ミク、あの人たち、テレパシーを送っているわ。あんなテレパシーじゃ弱すぎるわ。」

「じゃあ、ユミ、わたしたちもテレパシーを送りましょう!」「それがいいわね。」

妖精のテレパシーは、人間の百倍強かった。

ドン・セバスチャン氏によるテレパシー送信は続いていた。

「あの人、超能力者なの?あの人、人のテレパシー弱すぎるわ!」「そのようね。」

ユミとミクは強く強くテレパシーを送った。

『早く来い来い、宇宙人さん、よつといで!』

突然、上空に青白く光る点が現れ、小さな光る玉になった。音はなかった。

みんなは一斉に見上げた。「ユーフォーだ!」

ユミとミクも、ブリキのユーフォーから出て、空を見上げた。

ユーフォーは高速で舞い降りて来た。そして、警告した。

『大地震が来ます!大地震が来ます!逃げてください!』

みんなは、びっくりした。お互い顔を見合わせた。ユミとミクも顔を見合わせた。

まもなく、地面が大きく揺れ、震度六強の地震が発生した。

「わ~~~~地震だ~~~~!」「きゃあ~~~~あ!」

大津波

ユーフォーから浮遊光線が、みんなに発せられた。みんなは、宙に浮いた。

そのとき、ユミとミクは宙を舞っていた。妖精は、三十秒くらいは宙を舞うことができた。

「ミク、大丈夫!?」「だいじょうぶよ～～!」

ユミとミクは時間切れで舞い降りた。

「ミク、まだ揺れてるわ～～!」「怖いよ～～!」「二人は、その場にうずくまった。

「怖いよ～～!」「きゃあ～～、助けて～～!」

揺れは、三分ほどでおさまった。

「ミク、止んだみたい。」「あ～～、怖かった!死ぬかと思ったわ!」

ユーフォーの浮遊光線で浮いていたみんなは、安全な場所に下ろされた。

ユーフォーは『まもなく大津波がやって来ます。ここにいたほうが安全です。』と言って、去って行った。

みんなは、ユーフォーに手を振って感謝した。

「ありがとう～～う!」「ありがとう、宇宙人!」「ありがとう、ユーフォー!」

キャンプ場は、あちこちで地割れしていて危険だった。

「大津波が来るって言ってたな!」

「じゃあ、下は危ないぞ!」

「ここにいましょう。」

みんなは、ソーラー・ランタンや懐中電灯を持って、神社のほうに走った。

階段の前で立ち止まった。遠くに海が見えていた。大津波を警告するサイレンが鳴り響いていた。約一時間が過ぎた。海が盛り上がった。

てきた。

「津波だ～～～！」「津波が来たぞ～～～！」

それは、恐ろしい勢いで、街を飲み込みながら押し寄せて来た。

「狸山まで来るぞ！」「ここまでは来ないわ！」

カラスが、木の上で騒いでいた。

階段は、地震による地割れのために途中で崩壊していた。そこで、多くの人々が右往左往していた。

「これじゃあ、上がってこれないわ！」「あそこまでは、水は来ないよ。大丈夫だよ！」

津波は、山のふもと辺りまで来たが、三十分ほどで引いて行った。あちこちから、助けを呼ぶ声が聞こえていた。

「大変だわ～～、どうしましょう!？」

「これじゃあ、どうしようもできないよ。」

テレビスタッフは、この惨状を撮影していた。超能力者ドン・セバスチャンは、右往左往していた。

神社は瓦が落ちて半壊の状態だった。幸い、神主の妻は、一緒にユ―フォーを見に来ていたので無事だった。

隆次父さんは、家族みんなに告げた。

「ここにも仕方がない。バンガローに戻ろう！」

みんなはキャンプ場に戻って行った。

幸い、二棟のバンガローは、単純な作りのためか、無傷だった。

テレビスタッフも帰って来た。

三人が駐車場に向かった。隆次父さんは質問した。

「あの人たちは？」「道路状況の取材に行きました。」

「大変なことになりましたね。」「そうですね。」

その頃、ユミとミクは、管理小屋の屋根の上にいた。

「大変なことになったわね～～。」「いったい、どうなるのかしら？」

キャンプファイヤーは、まだ燃えていた。風は止み、不気味な雰囲気漂っていた。

ねぐら

電気は地震と同時に止まっていた。隆次父さんは、ソーラーランタンを二個灯した。

「弥生町の自宅、大丈夫かな〜？」

「おそらく駄目だろう。津波でやられているよ。」

一男は、智明に電話していた。

「もしもし…」

「何だつて？」「駄目だ、繋がらない！」

由紀ちゃんにも電話した。

「何だつて？」「駄目だ、繋がらない！」

一男は、携帯電話でワンセグを見ていた。

「どうだ、ニュースやつてるか？」「駄目だ、入ってこない！」

「おそらくテレビ局もやられたんだろう。こんなときラジオがあったらな〜。」

「ラジオも同じじゃないの？」

「緊急時の優先順位は、AMラジオのほうが高いんだよ。その次がテレビやFMになってるんだよ。それに、サブ局も都心から離れたところに置いてあるしな。」

「どうしてAMなの？」

「AMは中波を使ってるから、電波がよく飛ぶんだよ。」

「中波って飛ぶんだ？」

「波長が長いほど飛ぶんだよ。」

母と妹の幸子は、部屋の隅っこで無言で抱き合っていた。

「とにかく、明るくなるのを寝て待とう！今、われわれにできることは、それだけだ。」

みんなは寝た。

「今日から、ここがわれわれの寝座だ！」^{ねぐら}

隣のバンガローに三人のスタッフが帰って来たらしかった。声が聞

こえていた。

「駄目です！地割れと山崩れで通行できなくなってます！」

父さんは、ぼそつと話し出した。

「さつき、ユーフォーを見たんだけど、みんなも見たよな？」

「うん、見たよ。」「見ました。」「見たわ。」「

空中を飛んだんだけど、みんなも飛んだよな？」

「飛んだよ、確かに飛んだ！」

「飛びました。」

「飛んだわ！びっくりしたわ。」「

あのユーフォー、いったい何だったのかな？」

「僕たちに地震を知らせに來たみたいだったね。」

「守護霊みたいなユーフォーでしたね。」「

ユーフォーって、ほんとうにいたのね。」「

とにかく、ユーフォーを見に、ここまで來たから助かったような

ものだ。ユーフォーにテレパシーを送って感謝しよう！」

みんなは、ユーフォーに向かって、感謝のテレパシーを送った。

幸子は何かを頬張っていた。

「幸子、何食べてんだよ？」「フルーツキャンデー。」

「俺にもくれ。」「父さんにも、くれ。」「わたしにも、ちょうだい。」

「

時々余震が來て、不安だらけだったが、キャンデーを頬張りながら、とにかく明日のために寝ることにした。

神主と彼の妻は、キャンプファイヤーの前で、空を見上げていた。

「ひよつとすると、あれはユーフォーなんかじゃなく、稲荷大明神

だったかも知れんな。」

「そうかも知れませんか……」

火の始末をすると、二人は管理小屋に入って行った。神主だけ、すぐに出來た。

神主は、管理小屋の横に、いつも置いてあるリアカーを引いて、神社の方に向かって行った。妻も出來た。「あなた、わたしも

行くわ〜〜!」

二人は、神社に布団と毛布と枕を取りに行ったのだった。
ユミとミクは、自分の寝座ねくらに帰って行った。

瓦礫の風景

朝がやって来た。最悪の日曜日だった。八時だった。神主がやって来た。

「おはようございます。」

みんなは「おはようございます。」と挨拶を返した。

「朝食を表に用意してあります。どうぞ食べに来てください。」

みんなは外に出た。テーブルの上には皿があり、ハムが二枚、たくさんが三切れ乗せてあるだけだった。

神主の奥さんが申し訳なさそうに謝った。「すみませんねえ、こんなものしか出せなくて。目玉焼きでも思っただんですが、地震でみんな割れてしまつて。」

ご飯と味噌汁が配られた。

隆次父さんは頭を下げて礼を言った。

「とんでもない。これだけで十分です。どうもありがとうございます！」

みんなも頭を下げて「ありがとうございます！」と礼を言った。

みんなは「いただきま〜す！」と言つて食べ始めた。

湯呑みと、温ったかいお茶もあった。幸子は、お茶を飲んでから食べるのが癖だった。

「このお茶、おいしいわ〜。」

空気の爽やかな外で飲んで食べっていると、何でも美味しく感じられた。

隆次はぼやいた。「こんなことになりさえしなければ、最高の朝なんだけどな〜。」

テレビ局の人も、隣のテーブルで同じ内容の食事をしていた。

神主と奥さんも、隆次父さんたちのテーブルで食べ始めた。隆次父さんが神主に質問した。

「水はあるんですか？」

「水は、キャンプ場の貯水タンクに貯まっていますから、一週間は大丈夫です。いざとなれば、小川も流れていますから。」

「それは頼もしいですね。」

食事が終わると、みんなは食器洗いをして、神社の方に向かった。テレビスタッフも一緒だった。

階段のあるところからは、下界が見えていた。

風景は瓦礫の展示場と化していた。木造の家は殆んど流され、所々に鉄筋の建物があるだけになっていた。

母の映見は目を両手で覆った。「わ~~~~ひどいわ~~~~！」幸子も泣き出した。「家がなくなってるわ~~~~！」

その惨状は、ひどいものだった。何もかもが流され無くなっていた。カラスだけが、カーカー言いながら飛んでいた。

「これじゃあ、弥生町は完全に駄目だな。」

「あなた、これからどうしましょう!？」

「とうぶん、ここにいろしかないよ。」

幸子は、またも泣き出した。「ずっと、ここにいろの~~~~！」

「東京はどうなったのかな~~~~？」

テレビ局の人が答えた。「東京も震度六強で壊滅的だそうです。」

「そうですか!こりゃあ大変だ~~~~！」

一男は、茫然自失で無言で下界を見ていた。

ユミとミクは、大きなイチヨウの木から下界を見ていた。

「町が無くなっているわ~~~~！」「大変なことになってるわ~~~~！」

妖精の恩返し

あの日は いったいどこに行ったのだろう

仲良く砂浜で 遊んだ日々 いったいどこに行ったんだろう

あの日は帰らない 二度と帰らない 遠い日々 いつしか遊んだ
遠い日々

ここには何もない ただあるのは 思い出の あの日の時

心の中にある あの日の時 いつしか遊んだ遠い日々 どこに
行ったのだろう

「ここにいて、瓦礫の風景ばかり見ても仕方ない。バンガローに
戻ろう！」

テレビスタッフ三人だけが残り、瓦礫の風景を撮影していた。
みんなは、キャンプ場に戻って行った。

キャンプ場に戻ると、神主を中心に会議が始まった。

「皆さん、これから今後のことについて話し合いましょう。」

テレビ局の森本という取材責任者が、神主に尋ねた。

「食料は、現在どのくらいあるんですか？」

「米が、この人数で朝昼晩一膳として約一週間分あります。あとは
食パンが一袋。かまぼこや豆腐や納豆などの細かなオカズ類が少々。
あとは、お菓子類です。」

「じきに救助隊が来ると思いますので、お米が一週間分もあれば大
丈夫だと思いますが。お味噌だけでも、オカズにはなりますから。」

「問題は、肉や魚や卵などのタンパク質です。」

「缶詰などは？」 「ありません。」

「この近くには、肉とか魚を売ってるところはないんですか？」

「残念ながら、狸山にはそういうところはありません。」

「養鶏場なんかも？」

「ありません。あるのは、野菜や果物を栽培している農家だけです。」

「じゃあ、野菜や果物だったら、なんとかなるんですね？」

「はい、なんとか調達できると思います。」

森本は、テレビ局のスタッフに尋ねた。

「道は駄目かね？」「はい、完全に駄目です。ひどいものです。」

「そうか……、駄目か……」

「味噌もタンパク質ですから。」

「そうですね。」

「そのうちに、必ず来ますよ、救助隊が。」

「そうですね、三日もあれば、ヘリが来るでしょう。三日くらいタンパク質を食べなくっても大丈夫ですね。」

会議は終わった。みんなは、バンガローに戻って行った。

神主だけは管理小屋には戻らずに、なぜか神社の方に戻って行った。ユミとミクが、大きなイチヨウの木の上で、下界を見ていると、神主がやって来た。

「君たちに頼みがある。」

ユミが答えた。「何ですか？」

「カラスに乗って、肉を買って来てくれないか？お金は、カラスに謝礼の餌代もやる。」

「分かりました！」

「そうか、ありがとう！」

カラスは五羽しかいなかった。他のカラスは皆出ていた。

ユミとミクは、残りのカラスたちと一緒にカラスに乗って飛び立った。

「ミク、ようやく人間に恩返しするときが来たわ！」「やっと役に立つときが来たのね！」

二人の妖精は、人間の役に立つことが嬉しくて、涙を浮かべていた。ユミとミクを乗せたカラス救助隊は、舞うように飛び立ち、大空に勇ましく駆けて行った。

人間のために 今 妖精たちは飛び立つ ただ人間の危機を救う
ために 人間の幸福のために
魂を失った人間のために その魂を取り戻すために 未知の大空
に飛び立つ

ただひたすらに人間を救うために ただひたすらに人間を救うた
めに 大空に飛び立つ

ステンレスナイト

さあ泥棒の恩返しだ さあ飛べ 未知なる青空に向かって
はいはいはいの はいはいほい

ユミとミクは、瓦礫のない町に向かって飛んでいた。テレパシーで語り合いながら。

「ミク、あそこにスーパ―があるわ。行きましょう！」

「ユミ、人が多過ぎるわ。もっと先の町に行きましょう！」

「駄目よ、これ以上行くと、他のカラスの縄張りになるわ。襲われて殺されるわ。」

スーパ―の前には大勢の人が並んでいた。

「わくわくあ、凄い人だわ！」ちょっと離れたところにコンビニがあった。

「ミク、あそこのコンビニがいいわ。」「そうね。」

二人は、コンビニの裏に舞い下り、大きくなった。二人を乗せていたカラスは、コンビニの屋根の上に止った。

コンビニも大勢の人でいっぱいだった。だが、かろうじて肉はあった。二百グラムのが三パックしかなかったので、全部買った。それからバナナを買った。

「ユミ、このバナナは？」「カラスたちの、お駄賃。」

ユミとミクは、狸山に向かって飛び立った。

神主は、神社の前の階段に座って、ユミとミクを待っていた。

「遅いな、どうしたのかな、事故でもあったのかな？」

五羽のカラスが見えた。「おっ、帰って来たぞ！」

「ただいま、神主さん！」「ただいま！」

着地すると、大きくなってカラスがくわえてた買い物の肉の入った

レジ袋を手渡した。

「はい。」「ありがとう！」別のカラスが加えてたレジ袋に入ってた財布を取り、お釣りを神主に手渡した。

「ただ、これだけかい？」

「これだけしかかったの。」

「そうか、これだけでも有難い、ありがとう！」

豚肉だった。「しょうがない、カレーライスでも作るか。」

「カレーライス！うん！うん！」

妖精はカレーも肉も大嫌いだった。

お昼は朝と同じような料理が出て、夕食の七時になった。遅い七時の夕食にしたのは、後で空腹になるだろうからという配慮からだつた。神主はニコニコしていた。森本が尋ねた。「神主さん、何かいいことでもあったんですか？」

「みなさん、夕食は肉入りのカレーライスです！」

みんなは大喜びし歓声が上がった。幸子が一番喜んでいた。「ええ、ほんと～～～！」

森本が尋ねた。「肉はどうしたんですか？」

「冷凍室に冷凍の肉が入ってたんですよ。」

「そ〜おなんでしょうか！」

みんなは、とってもとっても美味しくカレーライスを食べた。

肉にうるさい隆次父さんが感想を漏らした。「まるで新鮮な肉みたいだな」。山の空気のせいかな？」

神主が答えた。「きっと、そうですよ。山の空気のせいです。」

みんなに笑顔が戻っていた。

ユミとミクは、ブリキのユーフォーの中から、みんなを見ていた。

「よかったね、ミク！」

秋の夜空は、決して朽ちないステンレスのように綺麗に澄んでいた。

悲しみさえ 手探りで拾い集める夜

買出し隊出発！

おやすみなさい。と言う前に、テレビスタッフの責任者の森本が神主に提案した。

「うちの若いスタッフが、下まで買出しに歩いて行ってくると言ってるのですが、下まで歩いて行ける道ってあるんですか？」

「あるにはありますが、通れるかどうかは？」

「狸山の地図とかはないんですか？」

「ありますよ。神社にありますけど、ひどい状態だからなく。じやあ、明日の朝探して持って来ましょう。」

「おねがいます。」

「狸山からは、高台になってるので、そっちの方面に行けば、大丈夫な店もあると思いますけど…」

「そうですね。」

「明日の朝、なるべく早く持ってきますよ。」

「おねがいます。」

次の日の朝がやってきた。朝の七時だった。早速、神主は地図を持ってやって来た。

「ありました、ありました！」

神主はバンガローの中に入って行った。折り畳んで置いてあった布団の上に広げた。

「この道と、この道です。」

「どっちの道が歩きやすいんですか？」「こっちの道です。」スタッフの若い三人は熱心に見ていた。

「じゅあ、早速行つて来ます！この地図、お借りします。」

「朝食を済ませてからにしてください。今家内が作っていますからお腹が空くと途中で倒れますよ。」

テレビスタッフの責任者が命じた。「食事をしてからにしましょう！」

朝食は、小麦粉に砂糖と塩を加え牛乳と水で溶かしたものをフライパンで焼いたものと、梨と巨峰とコーヒーだった。

変な取合せだったが、みんなは喜んで食べた。特に、スペイン人のドン・セバスチャンは喜んでいた。

朝食が終ると、休みもせずにテレビスタッフの若い三人の買出し隊は出発した。

その頃、ユミとミクは上空からの町の観察も兼ねて、カラスに乗って空の散歩をしていた。

「はいはいの、はいはいほ〜い」 「はいはいの、はいはいほ〜い」

この歌は、楽しいときにも悲しいときにも、同じだった。

「見てミク、あの人たち、歩いて下って行くわ!」 「ほんとだ!？」

「どこに行くのかしら?」 「きつと、お買い物だわ。」

「案内してあげましょうか?」 「それはいいね。」

「あの人たち、無くなった道を行こうとしてるわ。」 「教えましょう!」

ユミとミクはテレパシーを送った。「そっちじゃない、戻って!左よ!」 「そっちの道は、もう無くなっているわ!」

「おい、今何か言った?」 「いいや、でも聞こえたよ。」 「ああ聞こえた。そっちじゃない、戻って!左よ!」

「俺にも聞こえたよ。そっちの道は、もう無くなっているわ!」

上空を見上げると、けっこう高いところでカラスが二羽飛んでいた。「また、宇宙人かな?」 「そうかも知れないな。」 「きつとそうだよ。三人に同時に聞こえたんだから。」

「あのカラスかも知れないぞ。」 「そうかも知れないな。」

三人はカラスに手を振った。「どうもありがと〜う!宇宙人さ〜ん!」

ユミとミクの指示で、三人は無事に下りることができた。彼らを見

届けると、ユミとミクは神社に戻って行った。

魔界を憂う歌

「ユミとミクが空の散歩から帰って来ると、神主が待ち構えていた。」

「おはよう!」

「おはようございます。」「おはようございます。」「

「空の散歩は楽しかったかね?」

「はい、とっても。」「

「とっても楽しかったです。」「

「いいな〜君たちは、カラスに乗れて。」「

「神主さん、今日は買い物はないんですか?」

「今日はいいや。テレビ局の若い人たちが買出しに行ったから。」「

「その人たち、さつき空から見ました。下に着くまで見ていました。」

「

「あつ、そう。無事に下まで行っただかね?」

「はい、行きました。」「

「それは良かった。」「

「聞こえますか、神主さん?」

「えっ、何が?」

「植物たちの悲しみの声が、そして歌が?」

「いや、ぜんぜん聞こえないよ。」「

「今、植物たちは、瓦礫の町を感じて泣いています。」「

「えっ、そうなのかい?」「はい。」「

「魔界を憂う歌を歌っているんです。」「

「魔界を憂う歌?」

「かすかに聞こえてるはずですが、神主さんにも。」「

神主は、そう言われると、なんだか聞こえているような気がしてきました。

「見てください。風もないのに木の葉が揺れているでしょう。」「

「あつ、ほんとだ!」

神主は、不気味な何かを感じていた。

「植物たちは、強く必死に根を張り、この山を守ろうとしています。」

「そうなのかい？」

「はい！」

「この山は、植物たちを育ててくれる大事な母親なのです。」
そして、ユミとミクも、魔界を憂う歌を歌いだした。

憂うことなかれ 憂うことなかれ 今こそ大地に強く根を張り
たくましく生きよう

われら大地の子 盗み合い助け合い生きる 強き大地の子

積乱雲

「あつ、風が笑っているわ。」

「風が笑ってる？」

「天気がいい日には、風は笑いながら吹くの。」

「そうなの？」

「だから、風に聞けば、その日の天気がわかるの。」

「じゃあ、今日は天気がいいんだね。」

「はい、そうです。」

「じゃあ、雨の日には泣いてるの？」

「怒っています。」

買出しに行った、テレビ局の三人のスタッフは、お昼前に帰って来た。

肉や魚は、腐るので少ししか買って来なかったが、レトルトのカレーや牛丼やパンやジャムや缶詰などを買って来た。

その中には、秋刀魚も十二尾入っていた。

「神主さん、このサンマ、昼食が夕食に使ってください。早く食べないと腐りますから。」

「分かった！早速、お昼に焼きましょう！」

三人が担いで来たので、けっこうの色んな物があつた。

昼食は、ご飯と焼き秋刀魚とたくあん二切れと味噌汁になった。その後、お菓子一個と、キャンデー三つが配られた。

幸子は不服を言った。

「なぐぐんだ、お菓子たった一個？」

龍次父さんが叱った。

「贅沢を言うんじゃない！食べられない人だって、たくさんいるんだから！」「はい！」

一男は、テーブルの椅子に座ったままで、何かを思いつめたように

考えていた。

母が声をかけた。「一男、どうしたの？」

「弥生町の、三人組の子供たち、どうなったのかな……って思ってた。」

「ああ、あの子たちね。どうなったのかしらね……。無事でいることを祈るわ。」

「そうだね……。無事でいて欲しいね。」

テレビ局のスタッフがやって来た。

「歯ブラシと練り歯磨きです。使ってください。」

「これは？」

「今日、買って来たんです。」歯ブラシは四本あった。

「そうですか。ちょうど欲しかったところなんです。どうもありがとうございます。」

テレビスタッフの人たちは、隣のテーブルで美味しそうにコーヒーを飲んでいた。

神主も立って飲んでいた。

「今日は大変でしたね……。」

「農家の人も歩いてました。やっぱり買出しでした。」

「そうですか。歩きしかありませんからね。」

神主がコーヒーを飲みながら、若井家族のテーブルにやって来た。

若井家族も、お茶やコーヒーを飲んでいた。

「お身体の調子の悪い方はいませんか？」

父が答えた。「大丈夫です。今のところ、みんな健康です。」

「薬はありますから、早めに言ってください。」

「はい、ありがとうございます。ところで神主さん。」

「はい、何でしょうか？」

「里子さんが二人いらっしゃるそうですが、どうしてるんですか？」

「あ……あ、近所の農家にあづけているんですよ。家が滅茶苦茶で危ないもので。」

「ああ、そうなんですか。」

「あつ、そうだ。神社に取りにいくものがあるんだ！」
神主は、神社に帰って行った。

ユミとミクは、ハンペンをフライパンでバターで焼いて食べていた。
「おいしいわね〜〜！」「おいしいわ〜〜！」お茶を飲みながら。
神主がやって来た。

「おいしそうだね〜〜。」

ユミは風を見ていた。「風が怒ってるわ！」

「どうしたの？」

「神主さん、これから大嵐が来るわ！」

神主は空を見た。遠くの方に積乱雲が見えていた。

目つけやがって！

若井家族が、いろいろと話し合っていると、神主がやって来た。

「これから、大嵐が来るそうです。気を付けてください。」

父が答えた。「はい。ところで神主さん。」

「はい、何でしょうか？」

「買い物代金を払おうと思っっているのですが、直接隣に行ったらうがいいいでしょうか？」

「あゝそうですね。わたしも払わないといけないので、分担して払いましょう。」

「はい、それでよければ。」

「今、どのくらいかかったか聞いて来ます。」

「よろしくおねがいします。」

神主は、隣のバンガローに行くと、すぐに戻って来た。

「二万四千円かかったそうです。ですから、十二人分で割ると、一人二千円ですから、若井さんのところは、八千円ということになります。よろしいでしょうか？」

「よろしいです。足代などは？」

「こういうときだから、いいそうです。」

「そうですか、では……」龍次父さんは、財布から八千円を出して渡した。

「確かに、お預かりしました。領収書などは？」

「いいです。」

「じゃあ、すぐに隣に持って行きます。」

「よろしくおねがいします。」

すぐに戻って来た。

「ちゃんと、払っておきました。」

「すみません。あのう、天気の情報はどこで？」

「AMラジオです。」

「AMはやってるんですね？」

「地震直後からやってます。」

「あゝそなんですか。」

「大嵐が来るそうですので、くれぐれも。」

「はい。」

神主は出て行った。

「ミク、あなたの家では危ないわ。わたしの家のほうが安全だわ。一緒にいましょう！」

「ありがとう、そうするわ。」

空は暗くなり、風が踊り狂い始め、雨が地面に叩きつけ、大嵐がやって来た。

大嵐がやって来た　こりゃあ大変だ　こりゃあてえへんだ

嵐のときには　決して雲を見てはいけない　なぜなら雷神様が怒るからだ

目つけやがって！と怒るからだ　怒って神鳴りをドカン！と落とすからだ

嵐小僧

大嵐がやって来て 嵐小僧がやって来る こりや大変だ！

嵐小僧がやって来て 一八番の三日月刀で ばったばったとなぎ倒す

何もかも ばったばったとなぎ倒す まるで お祭り騒ぎでなぎ倒す

風が強くなって来た。窓ガラスに雨が叩きつけていた。

「お父さん、こんなオンボロ小屋で大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。小さい家は意外と強いんだよ。」

「ほんとうに大丈夫かしら？」

「大丈夫、大丈夫。周りには木があるから、風や雨を防いでくれるよ。」

一男が幸子を慰めた。

「大丈夫だって幸子！ほら、雨や風にもびくとししないで建ってるじゃないか！」

「ほんとだ！」

幸子は一男の言葉に、少し気持ちが落ち着いてきた。

「見て、ミク！嵐小僧が刀を振り回して飛んでるわ！」

「ほんとだ！」

嵐小僧は、木の葉をばっさばっさと切り落としながら、風の中を泳いでいた。

「ミク、今外に出ると危険だわ。」

「そうだね〜。」

イチヨウの木も、切り落とされていた。

「チチンプイプイ！嵐小僧よ近づくな！」ユミは、イチヨウの木に

魔法をかけた。嵐小僧は、イチヨウの木には来なくなった。

「ミク、管理小屋が危ないわ!」「すぐに助けに行きましょう!」

二人は、管理小屋の中に瞬間移動した。

神主は、びっくりした。「ユミ、ミク!？」

「神主さん、小屋が危ないわ!吹き飛ばされるわ!」

「ほんとか!？」小屋は風雨でガタガタ言っ、揺れていた。

「もう駄目か!」

ユミは魔法の言葉を発した。「チチンプイプイ!嵐小僧よ近づくな!」

風雨は依然として続いていたが、小屋の軋みはおさまった。

「おっ、変な音がおさまったぞ!」小屋は揺れなくなった。

「ミク、バンガローを頼むわ!」「分かったわ!」

ミクは外に出た。小さいミクは、風で飛ばされそうになった。慌てて、雑草にしがみついた。

「わくく怖い!」嵐小僧が容赦なく、全てのものに襲いかかっていた。

ミクは、風に飛ばされなうように草につかまり、用心深くバンガローに近づいた。

「チチンプイプイ!嵐小僧よ近づくな!」

二棟のバンガローは揺れなくなった。

「きや~~~~~!」突然の嵐小僧の一撃で、ミクはバランスを崩して、宙に飛ばされた。

「助けて~~~~~!」

「あつ、ミクの声だわ!どうしたのかしら?」

ユミは神主と一緒に外に出た。ミクの姿はなく、声もなかった。

ユミは、テレパシーや電波で呼んだが、いくら呼んでも返事はなかった。

探索

「神主さん、わたしミクを探しに行ってくるわ!」

「今はよしなさい! 風が止んでからにしなさい!」

「今、行くわ!」

「行くな! って言うのが分からんのか!」

ユミは、仕方なく小屋の中に入った。そして、大きな声で泣き出した。

「わ~~~~ん、ミクちゃ~~~~ん!」

「きつと、どつかに無事でいるよ。そう心配するな。」

「わたしが悪いの! わたしが外に出したから! わたしが行けばよかったわ!」

「仕方ないよ。過ぎ去ったことを、いくら言っても。」

「わたしが悪いの! わ~~~~ん!」

ユミは、しきりに自分を責めていた。

「明日の朝になったら、一緒に探しに行こう!」

「一緒に探してくれるの、神主さん!」

「俺たちは、神社の仲間じゃないか。」

「ありがと~う、神主さん!」

「それに、朝になったら、自分で帰ってくるかも知れないしな。」

「だったらいいんだけど…」

「とにかく今日は寝よう。」

「はい。嵐が治まるまで、ここに居ていいですか?」

「ああ、いいよ。」

神主の奥さんが、寝ながら手招きしていた。

「ユミちゃん、一緒に寝ましょう。」

「はい!」

ユミは、外の風音を気にしながら、一緒に寝た。

朝がやって来た。嵐は治まっていた。まだ六時だった。

ユミは巨峰を食べると、小さくなってカラスに乗り、ミクの探索に飛び立った。他のカラスも一緒に探索に飛びび立った。

神主も、簡単な食事をする、探索を開始した。妻も一緒だった。

ユミは上空から、電波で必死に呼び続けていた。

「ミクちゃ~~~~ん！」

いつこうに返事はなかった。

「ミクちゃ~~~~ん！」

神主夫妻は、二時間近く探したが、発見できなかった。食事の用意もしなければいけなかった。小屋に帰って行った。食事は、九時からだった。

ユミは、依然として探していた。他のカラスたちも探していた。九時になった。みんながバンガローから出て来た。

カラスの異変に気がついたのは、鳥に詳しい一男だった。

「やけにカラスが舞ってるな~~~~？」

「どうした一男？何か変か？」

「カラスが、やけに山を飛んでるよ？」

「そういえば、そうだな~~~~？」

「なんかあったのかな~~~~？」

「そんなことはどうでもいい。さあ食事、食事！」

「うん！」

大嵐の後の爪痕で、なにかもが滅茶苦茶になっていた。炊事場の建物も便所も壊れ、テーブルは倒れ、椅子はひっくり回り、あちこちに飛んでいた。

龍次父さんは、目を疑った。

「こりゃあ、ひどいな~~~~！」

なぜか、管理小屋と、二つのバンガローは無事で無傷だった。このアンバランスに父さんは首をひねった。

「おっかしいな~~~~。どうして三つの小屋だけ無事だったんだ？」

狸山のカラスが、皆飛んでいた。

「それにしても、何なんだ、このカラスは？」

自己完結型トイレ

みんなが、テーブルや椅子を元の位置に置いていけると、神主と奥さんが食事を持って来た。

今日の朝食のメニューは、バタートースト二枚と、みかんと桃、ミルクだった。

コーヒーカップの中に、粉ミルクが入っていた。奥さんが、お湯を注いでいた。

みんなは、「いただきま〜す！」と言って食べ始めた。

神主が言った。「毎朝、果物ばかりで、すみませんね〜。」

龍次父さんが礼を言った。

「毎朝、果物なんて贅沢ですよ。ありがたく思ってます。」

みんなは、その言葉に頷いていた。「そうです、そうです。」と森本が言った。

みんなは、カラスを見ていたが、森本は壊れた便所を見ていた。

「あの便所、早く直さないとまずいですね〜。」

「そうですね。じゃあ、食事が終わったら、みんなで直しましょう！」

龍次父さんが神主に質問した。

「あれって、下水に流してるんですか？」

「ちがいます。だったら使えません。ベイントイレという下水の不要な自己完結型トイレです。」

「ベイントイレ？自己完結型トイレ？」

「ベイントイレは陸上自衛隊が開発し完成させた簡易トイレです。」

「陸上自衛隊が？」

「浄化槽や下水道を使わず、汚水をその場で処理し、その水を洗淨水として利用しています。常に、小川のせせらぎのような水が流れているので、トイレ室に嫌な臭いは全くありません。」

「あ〜〜、だから水が絶えず流れてたんだ〜。」

「だから、保健所などへの設置届、近隣地域への排水同意書が不要なんです。」

「どうやって処理してるんですか？」

「杉チップやオガクズなどと混合攪拌し、微生物により水と二酸化炭素に分解しているそうです。詳しいことは知りませんが、繰り返し千回ほど使えます。杉チップやオガクズなどを取り替えれば、また千回ほど使えます。」

「電気とかは？」

「ソーラーバッテリーから供給される電気だけです。ポンプのモーターを回しています。」

「すばらしいな〜！」

トイレは倒れていた。便器が見えていた。

食事が終わると、神主は歩み寄って行った。みんなもついて来た。

「これは、便器の上に乗せてあるだけだったんですよ。」

森本もいた。「じゃあ、持ち上げて元の位置に戻せば、すぐに使えるんですね？」

「はい。」

「お〜〜い！」森本はテレビ局の若いスタッフを呼んだ。

「これを、便器の上に置いてくれ！」

すぐに設置された。トイレの建物は木製なので重かった。

神主が点検を始めた。

「あとは、このコンセントを繋げば、屋根のソーラーと繋がり、ポンプが回って使えるようになります。」

繋ぐと、モーター音がして、水が便器を流れ出した。神主は、吐息を吐いた。

「お〜、良かった！」

依然として、上空をカラスが舞っていた。

行方不明のミク

夕食は栗ご飯と、豚汁と、きゅうりや大根の漬物だった。

森本が神主の奥さんに質問した。「この豚肉は？」

「これが最後の肉です。」

「あゝあゝあ、そうなんですか！」

みんなは「いただきまゝす！」と言って食べ始めた。

神主はみんなの顔を見ていた。

「各地で道路が寸断され、物流が止まっているそうです。」

「じゃあ早く買い物に行かないと、物がなくなりますね？」

「もう無くなっているでしょう。」

「炊事場の横の温水シャワーは使えるんですか？」

「使えますよ。プロパンですから。」

炊事棟の囲いや屋根は風雨で吹き飛んで壊れていたが、横のシャワーボックスだけは無事だった。

「シャワールームは壊れてませんね？」

「あれは、ボルトでしっかり固定してありますから。」

通訳の女性スタッフが神主に尋ねた。

「じゃあわたし、これから使ってもいいかしら？」「いいですよ、どうぞ。」

幸子が父に言った。

「わたし、お風呂に入りたいわ〜〜！」

神主が答えた。

「お風呂だったら、神社にありますよ。」

森本が尋ねた。

「お風呂、使えるんですか！？」

「はい使えます。離れにあったもので被害を免れました。プロパンだから大丈夫です。」

「それは素晴らしい！」

念力透視探索

次の日の朝がやって来た。

ユミは相変わらず朝早くから、ミクの探索にカラスと一緒に飛び立った。

九時になった。朝食の時間だった。

みんなは、テーブルの席に座って朝食を待っていた。カラスが相変わらず、今日も上空を飛んでいた。

幸子はカラスを見ていた。「今日もカラスがたくさん飛んでるわ!」みんなも、不思議そうにカラスを見ていた。

食事が運ばれて来た。今日の朝食メニューは、バタートースト二枚、ハム二枚、粉ミルク、イチジクだった。

神主が森本に質問した。

「超能力者の方は、どのようなことができるのですか?」

「ユーフォーの呼び込みの他に、行方不明者の探索などもできます。他には定番のスプーン曲げとか。」

「行方不明者の探索もできるんですか?」

「はい。」

「動物なんかも探せますか?」

「さ〜〜あ?今聞いてみますね。」

通訳の女性スタッフが入った。

「やったことはないが、物さえあればできるだろうと言っています。」

「

「物さえあれば?」

「着てた衣服とか、身につけていたネックレスとかです。」

「衣服だったら、あります!」

神主は神社に走って取りに行った。三分くらいで戻って来た。

「これです!」

通訳の女性スタッフが手にした。

「ずいぶん小さい洋服ですねえ？」

「リスに着せていたんです。」

「じゃあ、そのリスを探すんですね？」

「はい、できればおねがいします！」

「今、聞いてみますね。」

通訳して伝えた。

「できるかどうか分からないけど、今やってみるそうです。」

超能力者ドン・セバスチアンの念力による透視探索が始まった。氏は、洋服を強く握った状態で目を閉じていた。

約五分が過ぎた。氏は静かに目を開けた。そして、通訳に告げた。

「分かりました。その小動物は、タヌキの巣穴で気絶して寝てるそうです。」

「え〜〜〜〜！どこで？」

「それは分からないそうです。」

神主は「ちよつと失礼します！」と言って、神社に向かって走り出した。

「ユミ〜〜〜〜！」

神主は大きな声で、神社の前で手を振りユミを呼んでいた。

「ユミ〜〜〜〜！分かったぞ〜〜〜！」

ユミは下りてきた。

「どうしたの、神主さん！？」

「ミクの居所が分かったんだよ。」

「どこ？」

「狸の巣穴で気絶してるそうだよ。」

「どうして分かったの？」

「超能力者ドン・セバスチアンの念力で！」

「ああ、あのテレパシーの弱い超能力者ね。」

「とにかく彼の言葉を信じて探してみよう！」

「分かったわ！今から狸の巣穴を探すわ！」

ユミは、またカラスに乗り、飛び立って行った。ユミは他のカラス

たちに命じた。

「みんな、狸の巣穴を探して……！ミクが見つかったら教えて……！」

わゝ、巨峰だゝゝ！

朝の食事の後、みんなは今後のことについて、話し合いをしていた。

一男はカラスの異変に気付いた。

「あれっ、カラスがいなくなったぞ？」

みんなは空を見た。

「ほんとだ？」「どうしたんだろう？」

一男は山を見ていた。

「山の木々を飛んでる！？」

カラスたちは、山の木と木の間を飛んでいた。というより、ジャンプして移動していた。

「何やってるんだろう？」

龍次父さんも不思議そうに見ていた。

「ここのカラスは変わってるなゝゝ？」

みんなも不思議そうに見ていた。

神主が帰って来た。森本が神主に言った。

「神主さん、ここのカラス変わってますねゝゝ？」

「前々から変わっているんです。気にしないでください。」

みんなは見るのを止めた。一男だけが、依然として不思議そうに見ていた。

ユミに一羽のカラスからテレパシーで連絡が入った。

「なあに？」

「ミクちゃんらしい妖精が入ってる狸の巣穴を発見しました！」

「えゝゝゝ、どこ！？」

「狸岩の近くです。」

「分かった、今行くわ！」

行ってみると、岩の上に、その巣穴は草花に隠れるようにしてあった。

ユミは静かに近づいて行った。ユミを乗せたカラスがユミの背後を用心棒のようにして見守っていた。

「ミクちゃ〜ん！」

注意深く覗くと、ミクの脚が見えてた。

「あつ、ミクだ〜ん！」

狸が出て来た。

「何か用かね？」

「穴の中の妖精、探してたんです。」

「ああ、そうなの？あの妖精の知り合い？」

「はい、そうです。彼女、元気ですか？」

「元気も何も、気絶したままだよ。近くで倒れてたんで、くわえて持ってきたんだよ。あんなところじゃあ危ないと思ってね。」

「ありがとうございます。」

「あ〜、それだったら遠慮なく入ってくれよ。」

ユミは入って行った。呼びかけた。

「ミクちゃん！」

三度ほど呼びかけた。無反応だった。

「ほらね、駄目だろう。」息はあった。

「どうしたんだろう？」

「頭でも強く打ったんじゃないのかな〜？」

ユミは、ポケットからミクの大好きな巨峰を一個取り出した。

「ミクちゃん、あなたの大好きな巨峰よ！」

巨峰をミクの鼻に近づけた。

「わ〜、巨峰だ〜ん！」と言って、ミクは起き上がった。

やもめの狸おじさん

狸の巣穴の奥には、どんぐりがたくさん転がっていた。

「どんぐり、お好きなんですか？」

「あれは非常食だよ。これから寒くなるからね〜。」

「地震で、この巣穴は大丈夫だったんですか？」

「なんとか大丈夫だったよ。奥の方は崩れたけどね。」

「それは大変でしたね〜。」

「この地震で、巣穴をやられた奴がたくさんいたよ。」

「そうでしょうね〜。」

「幸い、この巣穴は入口が岩だったから助かったよ。」

「それは、よかったですね〜。」

狸は、おじさんっぽかった。

「この巣穴で、あなただけで？」

「そうだよ。この歳になるまで、やもめ暮らしでね〜。慣れちゃったね。誇り高き、やもめ暮らしってやつかな？」

「じゃあ、ミクを連れて帰ります。どうもありがとうございました。お礼は後ほど。」

「お礼なんていいよ。山で暮らす者同士、気にしなくていいよ。」

「必ず、お礼に伺います。暇だったら、遊びに来てください。」

「どこ？」

「神社の前の、大きなイチヨウの木に住んでいます。わたしの名前はユミです。この子は、ミク。」

「ユミちゃんに、ミクちゃんね。分かった！ありがとう、遊びに行くよ。おいらの名前は、ポン太。この辺の雄の狸の名前は、皆ポン太だけだね。ははははは！」

「そうです。」

誇り高き、やもめ暮らしの狸のおじさんは、自分の言葉に笑っていた。

「大きなイチヨウの木って、神社の前の木だろう？」

「そうです。」

「それなら、前々から知ってるよ。」

「さあ、帰ろう、ミク！」

ミクは自分で起きれそうになかった。ユミは優しく抱き起こした。巣穴の外に出した。

「さあ、カラスに乗って一緒に帰りましょう。」

狸のポン太が慌てて巣穴から出てきた。

「それじゃあ、カラスに乗せるのは危ないよ。落ちて怪我でもしたら大変なことになるよ。」

カラスは、妖精二人は重くて乗せられなかった。

「じゃあ、どうすれば？」

「僕が背中に乗せていくよ。その大きなイチヨウの木まで。」

「えっ!？」

「大丈夫、大丈夫!こう見えても足腰は強いんだから!」

「じゃあ、おねがいします。何から何まで、ほんとうにすみません!」

「いいよいいよ。山で暮らす者同士、気にしなくていいよ。」

狸のおじさんは、さつきと同じことを言っていた。

「じゃあ、おねがいします。」と言って、ユミは狸のおじさんの背中にミクを抱えて乗せた。妖精は意外と力は強かった。

「ミク、しっかりと狸のおじさんに掴まってるのよ!」

「うん、分かった!」ミクの意識は回復していた。

ユミは、イチヨウの木に辿り着くまで、近くから見守っていた。そして、大きなイチヨウの木に無事に着いた。

「どうもありがとうございました!」

「ここですか、お宅の家は?」

狸のおじさんは、大きなイチヨウの木を見上げていた。

「このイチヨウの木なら、前々から知ってたよ。有名だからね。ここが君の家だったの?」

「はい、そうです。」

「いいところに住んでるね〜。やっぱり妖精は、我々よりも何ラ
ンクも上だな〜。」

「そんなことはありませんよ。」

「いや〜あ、我々よりもブルジョワだよ!」

「なんですかブルジョワって?」

「金持ちってこと!」

「そうなんですかね〜?」

「じゃあね、また来るよ!」

「あつ、待つて下さい!」

ユミは、草むらに隠しておいた。巨峰を渡した。レジ袋に五房入っ
ていた。

「これ、食べてください。」

「何?」

「巨峰です。」

「え〜、そんな高級なもの、頂いちゃっていいの?」

「はい、今日のお礼です!」

やもめの狸のおじさんは、ニコニコして帰って行った。

ユミとミクは、涙を流して抱き合って喜んでいた。

「ミク〜! 無事でよかったね〜!」「わ〜ん、ユミ〜

〜! 怖かったよ〜!」

ユミとミク

「まだ、頭がふらふらするわ。」

ミクは倒れ込んだ。

「ミクちゃん、しっかりして！」

ユミは抱き起こした。

「ミクちゃんの巣箱まで、おぶっていくわ。」

「ありがとう。」

ユミは、ミクの巣箱まで、おぶって行った。

「登れる？」

「ちよつと無理みたい。」

「瞬間移動は使える？」

「とても、無理だわ。」

瞬間移動には体力を要した。いつもミクを乗せてるカラスがやって来た。

「おいらが運びましょう！」

「ありがとう！」

カラスは、ミクを銜えると、巣箱まで運んだ。

「ありがとう！」

「いいえ、どういたしまして。ミクさんは、わたしの、ご主人様ですから。」

カラスは、その桜の木に止まって、二人を見ていた。そして、大きい目で見守っていた。

ミクは、自分で作ったベッドの上に横たわっていた。

「ミクちゃん、お布団はないの？」

「そんなものはないわ。いつも木の葉をかぶっているだけなの。」

「それじゃあ寒いわ。今いいもの持って来るね。待ってて！」

ユミは、いなくなった。二分ほどで戻って来た。

「はい、お布団！木綿のハンカチ。」

ユミは、ハンカチを四つ折りにして、ミクにかぶせた。

「わ〜〜あ、とっても温っかいわ〜〜！」

「でしょう。」

「ユミ、ありがとう。」ミクは涙を流していた。

「ミク、蜜を取って来てあげるわ。何がいい？」

「何でもいいわ。」

「じゃあ、ミクの大好きなコスモスを取ってくるね。」

「ありがとう。」

ユミは、近くに咲いていたコスモスの花をちぎって持って来た。

「はい！」「どうもありがとう。」

ミクは元気がなかった。熱があるようだった。ユミはミクの額に手を当てた。

「わ〜〜あ、凄い熱だわ！」

「ユミ、寒いわ。」

「寒い？」

「とっても寒いわ。」

「熱はあるし寒いし、どうしよう!？」

ユミは、コスモス花びらを重ねて、ミクの額に置いた。

「わ〜〜あ、気持ちいいわ〜〜。」

「ミクちゃん、わたしの家に行く？あっちの方が温っかいわ。」

「そんな元気ないわ。それにここが好きなの。」

「この安っぽいプラスチックの巣箱が？」

「うん。」

「ちょっと待ってね。」

ユミは、ミクと一緒に寝た。そして抱いた。

「温っかくなった？」

「うん。」

「神主、来ないかな〜。もっといい布団が欲しいな〜。」

ユミとミクは、木の葉に当たる風の音を聞きながら、そのまま寝入ってしまった。狸山で二人っきりの妖精は、まるで姉妹のように慕

い合っていた。数羽のカラスが、鋭く眼光を光らせて、ユミとミクを見守っていた。

コンドル

ユミとミクは、神主の声によって起こされた。

「ユミ、ミク。」

二人には、未使用の白い雑巾がかけられていた。

二人は、かけられているものに気付いた。

ユミが神主に尋ねた。「何ですか、これ？」

「未使用の雑巾だよ。どうだい？」

「とってもいいです。温つかいです。」

二人は、満足そうに寝ていた。

「ちょうど、お布団が欲しいな」と思ってたところだったんです。

「

「そうだと思つて、かけてやっただよ。」

「さすがに神に仕える神主さんだわ。」

「そうだろう。」

「ミク、風邪でも引いたみたいなんです。熱があつて寒気があつて

「

「そりゃあいけないな。困ったな、人間の薬は妖精には効かないしな。」

「妖精の薬草なら、わたしが取ってくるので大丈夫です。」

「じゃあ、頼むよ。」

「はい。」

ユミは起き上がった。早速、薬草を取りに行くことにした。

「じゃあ、行つてきます！」

「きをつけてな！」「はい。」

ユミは、一時間ほどで帰つて来た。

「薬草、あつたわ！」

神主は、巣箱の周りを、いろいろと細工して補強していた。

「これで大丈夫だ、雨風にもびくともしないぞ！」

またも未使用の雑巾を巣箱の出入口に、両面テープで貼って、ぶらさげた。

「これで、玄関も雨風が入らずに、大丈夫っと!」

神主は、ユミが手に持つている薬草を見ていた。

「これを煎じればいいんだね?」

「はい、そうです。」

「じゃあ、今煎じて来るよ。」

「どこに行くんですか?」

「管理小屋、あそこに行けば、七輪で、いつでも湯を沸かしているから。」

「どうして、いつも沸かしているんですか?」

「お茶やコーヒーを飲むためだよ。」

「な〜るほど!それはいいことですね。」

ユミは妙に感心していた。神主は、十分ほどで帰って来た。

「冷ましてから持って来たよ。君たちは、超猫舌だからな。」

「はい、その通りです。ありがとうございます!」

「どうやって飲む?」

「そうですね〜、小皿に注いだら、舐めて飲みます。」

「小皿じゃあ、この入口からじゃあ入らないだろう?」

「そうですね〜。」

「割れたコーラの瓶の蓋でいいだろう?」

「はい、けっこうです。」

神主は、半壊している台所に取りに行った。すぐに戻って来た。

コーラの瓶の蓋に、煎じた薬草茶を注意深く入れた。大きくなっているユミに手渡した。

「はい!」

ユミは、注意深く巣箱の中に押し込んだ。

「はい、ミクちゃん!」「ありがとう。」

「神主さん、山で大きな見たこともない鳥がいたんですけど、見たことあります?」

「ああ、コンドルだな。わしも見たよ。」

「あれ、大きくって凄い鳥ですね〜。」

「日本にはいない鳥だよ。南米のアンデス山脈にいる鳥だよ。」

「どうしてこんなところに？」

「さ〜、どうしてだろうな？今度、コンドルに聞いてみてくれ。」

「はい、聞いてみます。」

カラスが大騒ぎしていた。上空を見るとコンドルが悠々と舞っていた。

妖精の仕事歌

「ミクちゃん、大きくなって夕ご飯と一緒に食べに行きましょう。」

「いいわ、食べたくない。」

「じゃあ、神主さんから、蜂蜜をもらってくるわ。」

「それなら食べられるわ。」

「じゃあ、ちよっと待ってて。」

夕方の六時だった。ユミは、管理小屋に瞬間移動した。大きくなった。

神主と奥さんは、夕食の準備をしていた。

「神主さん、蜂蜜ありますか？」

「ああ、あるよ。待ってて。」

奥さんは、手を休めずに言った。

「ミクちゃんが見つかった良かったわね。」

「はい。」

「早く元気になるといいのにね。」

「はい、ありがとうございます。何を作っているんですか？」

「キノコのポン酢和え。」

「おいしそうですね。」

妖精は、キノコが好きだった。シイタケとエノキと貝割れ菜と大根おろしが入っていた。

「どう、一口食べてみる？」

「いいんですか？」

「いいわよ。」

奥さんは、小皿によそって、箸をわたした。

「はい。」「いただきます！」

「どう、味は？」「わ、とっても美味しいわ！」

「良かったわ。」「おわんによそってやった。」

「これ食べなさい。おわんだと運びやすいでしょう。」

「いいんですか？」

「もちろんいいわよ。」

「ありがとうございます……す！」

「はい、蜂蜜！」ミニの醤油入れに入れてあった。

ユミは礼を言くと、大きいまま、管理小屋の裏口から、みんなに見つからないように出ていった。

小さくなって瞬間移動では、物は運べなかった。

「はいミクちゃん、蜂蜜よ。」

ユミも小さくなって、巣箱の中に入って行った。

ミクは、蜂蜜を舐めていた。「甘くて、おいしいわ……！」

「良かった！」

「ありがとう！」

「早く元気になってね、ミクちゃん。また、盗みに行きましょう。」
「うん！」

ユミとミクは、まだ時々、盗みに出掛けていた。それは、妖精たちの習性であり、習慣であった。

ユミは妖精の仕事歌を歌いだした。

はいはいはいの　はいはいはいの

妖精は　盗み合って助け合う　仲良く盗み合って助け合う

こりゃあ　とってもいいことだ　はいはいはいの　はいはいほ

い

地球をみんなで守りましょう　みんなで仲良く取り合えば　平

和な世界を築けます

はいはいはいの　はいはいはいの

一生懸命に働けば地球の空気が汚れます　他の生物殺します

だから盗み合って助け合う

こりゃあ　とってもいいことだ　はいはいはいの　はいはいほ

い

欲張って働くと地球の空気が汚れます　地球の自然を壊します

♪ だから盗み合って助け合う♪
こりゃあゝとってもいいことだ♪
い
♪
ほいほいほいの
ほいほいほ

妖精の秘密

その後、ユミは奥さんから頂いた料理を食べると、また小さくなつて、ミクの看病についていた。

まだ熱っぽかったので、ティッシュペーパーを濡らして、ミクの額に乗せてやった。

「どう、気持ちいい？」

「とっても気持ちいいわ……。ユミ、もう大丈夫だから帰ってもいいわ。」

「今日は、ずっとここにいますよ。安心して。」

小雨模様だった。

「なんだか、雨になりそうだね？」

「そうなの？」

「ミクに出会って、もう五年になるわね？」

「そうね。」

「ミクは、ここに生まれる前はどこにいたの？」

「富士山のふもとよ。」

「覚えているの？」「半分くらいね。」

「富士山のどこにいたの？」

「近くの大きな湖の、その近くの小さな神社の屋根裏に棲んでいたわ。道草神社という名前だったわ。」

「道草神社……屋根裏にいたの？」

「そう。屋根裏はとっても寂しかったけど、神主の娘でアユという女の子がいて、いつも二人で遊んでいたわ。楽しかったわ……。」

「アユ……、その他にどんなこと覚えてる？」

「明治時代の終わり頃で、日露戦争があつて、富士山に日本で最初のスキー場ができて。明治天皇が死んだわ。」

「ふ……ん。そんなことがあつたの。わたし、屋久島にいたから、そんなこと知らなかったわ。」

「やくしま？」

「大きな杉の木がある大きな島よ。南にある島よ。」

「そんなに大きかったの、杉の木？」

「もうすぐく大きく古い杉の木だったわ。雨ばかり降ってたわ。台風は怖かったわ。ときどきウミガメが卵を産みにやってくるの。」

「ウミガメ？」

「人が乗れるくらいの大きな海の亀よ。」

「そんなに大きな。」

「とっても大きかったわ。」

「ユミは、ここで生まれて何年になるの？」

「十年よ。」

「そんなに。」

「あつという間に十年経ってしまったわ。」

「じゃあ、あと二十年の命ねえ。」

「そうだね。悲しいね。」

「またどこかで逢えるといいね。」

「そうだね……」

二人は悲しくなった。妖精は、三十年生きて死に、約八十年後、どこかで生まれ変わるのだった。記憶は半分ほど残り、半分ほど忘れ去られるのだった。

「どこかで逢えるといいね。」

「どこかで逢いたいわ！」

二人は、限りなく悲しい顔になっていた。

雨が降って来た。それは、まるで二人の悲しい涙のように降っていた。

風雨は、多少強くなって来たが、即席に神主がこしらえた雑巾のドアが、二人を守るように風雨から防いでいた。

木の葉に当たる雨の音だけが聞こえていた。数羽のカラスが、木の上から二人を見守っていた。

団結

次の日、朝食の後、ドン・セバスチャンと通訳は、山を徒歩で下ると言って、自分の場所に帰って行った。

テレビ局のスタッフ四人と、若井家族が山に残った。

森本は多少イライラしていた。

「道路は、まゝだ通れないの？」

「まだ駄目です。」

「まったく、何やってるのかな〜？」

龍次父さんが尋ねた。

「会社は大丈夫なんですか？」

「駄目です。戻っても何もありません。」

一男が、駆けて来た。

「父さん、電話が繋がったよ！」

「おっ、そうか！」

龍次父さんは、自分の携帯電話をポケットから取り出した。早速、会社に電話した。繋がらなかった。

「やっぱり、うちの会社もやられたか…」

同僚の携帯電話にかけた。繋がったが、会社も地震でやられた、という返事だった。

「やっぱり、やられていたか。」

父さんは、がっかりした様子だった。

テレビ局のスタッフも携帯電話を取り出して、電話をしていた。みんな、がっかりした様子だった。

東京都は全域、やられてるみたいだった。千葉県、埼玉県、そして神奈川県も。

森本は、頭をかかえて困っていた。

「会社は無いし、家は地震で潰れてしまったし、どうしようかな〜」

神主が尋ねた。

「家族の皆さんは？」

「九州の親戚の家に行きました。」

「それは、よかったですね。」

テレビスタッフの中には、家族が避難所生活の者もいた。

森本は決意した。

「仕方ない、会社から命令が来るまで、ここで待つしかないな！」

龍次父さんも決意した。

「会社も家も無くなったし、俺たちもここにいるしかないな！」

神主の顔を見た。

「神主さん、今後もよろしくおねがいします！」

森本も同じように挨拶した。神主は、みんなに告げた。

「みなさん、これから一緒に頑張りましょう！」

一人一人の心は沈んでいたが、団結することで少し楽になっていた。爽やかな秋空を、コンドルが大きな翼を広げて飛んでいた。一男は見ていた。

「あのコンドル、狸山に住み着いちゃたみたいだね？」

「そうみたいだな〜。」

森本も見えていた。

「あのコンドル、どこから来たんでしょうかね〜？」

神主は希望の言葉をのべた。

「あのコンドルも、狸山の名物になるといいんですがね〜。」

幸子だけが、無邪気に蝶々を追って走っていた。大地震や大津波の後でも、蝶々はいつものように舞っていた。

アンダルシア

お昼だった。ユミが、ハンペンをフライパンで焼いていると、そのバターと醤油の匂いに誘われて、コンドルが舞い下りて来た。

「美味しそうだね〜。」

ユミは驚いたが、冷静だった。

「あ〜ら、コンドルのお兄さん、こんにちわ。」

「おいら、お兄さんじゃないよ。もうお兄さん!」

「じゃあ、おじさん、はじめまして。」

「はい、はじめまして!」

「これは、ハンペンというものです。」

「ハンペン?」

「どう、食べてみます?」

「いいのかい? あんたが食べるんじゃないのかい?」

「いいんですよ。あなたにあげます。」

「じゃあ、遠慮なく!」

コンドルは、お腹が空いていたのか、一口で食べてしまった。

「あ〜、美味しかった!」

「早いわね〜!」

「お腹が空いてたもんで。」

「いつも何を食べてるの?」

「川で泳いでる鯉を食べてるよ。ときには、近くの養鶏場や養豚場に行って、餌を横取りしてるんだよ。」

「盗み合って助け合ってるのね?」

「そういうことだね。今のところ、盗みだけだね。」

「いいことだわ。盗まれる物がないんだったら仕方ないわ。」

「そういうことだ。黙って迷惑をかけずに盗むのはいいが、無理に盗むのは良くないな。」

「そういうことです。」

「おじさんは、いったいどこから来たの？日本の鳥じゃないみたいだけど？」

「アンデス山脈から来たんだよ。」

「どうやって来たの？」

「船に乗って来たんだよ。」

「どんな船に？」

「そんなことは知らない。目が覚めたら、日本のどこかにいたんだよ。」

「どこか？」

「この近くだけど、今は分からない。忘れちゃった。嫌なことは忘れるようにしているんだよ。」

「嫌な場所だったのね？」

「そういうことだ。だから、逃げて来たんだよ。」

「どうやって逃げたの？」

「病気のふりをしてね。籠から出してもらってね。」

「頭いいわね。」

「生きるためだったら、盗みだつてするし、嘘だつてつくさ。」

「そういうことです。」

「あんた、話が合うね！～！気に入った！」

「ありがとう。お友達になりましたう！」

「ああ、いいとも！」

「よろしくね！わたしの名前は、ユミ。」

「おいらは、アンダルシア！よろしく！おいら、これから、鯉を取りに行くんで、バイバイ！」

「バイバイ！」

アンダルシアは、力強く助走すると、空高く舞い上がって行った。ユミには、大いなる魂胆があった。

マイズルソウ

次の日の朝になった。ユミは依然として。ミクの看病についていた。ミクは、まだ熱があった。

「おかしいわね……、もう下がってもいいころなのに……」

六時だった。神主がやって来た。指でドアの雑巾を開き、中を覗いた。

「ユミ、ミクの熱は下がったかね？」

「それが、なかなか下がらないんです。」

「それはおかしいな……？」

「この薬草じゃあ、駄目かも知れません。」

「熱を冷ます薬草はないのかね？」

「屋久島のような高い山ならあります。」

「屋久島？って言うと、九州の南の島の？」

「そうです。」

「あんなところまではな……。」

「同じように高い山ならあると思います。」

「じゃあ、富士山だな……。何という薬草なんだい？」

「マイズルソウという草です。草を煎じるか、小さな赤い実を食べると熱は下がります。」

「だけどな……。富士山まではな……。カラスなんかじゃ、とても無理だしな……。」

「いい考えがあります。」

「どんな？」

「コンドルに乗って行けば。」

「コンドル？コンドルなら大丈夫かも知れないけど……」

「わたし、そのコンドルのおじさんと、昨日友達になったんです。」

「早いな……。」「

「頼んだら、きっと富士山まで乗せてくれると思います。」

「でも、ただじゃあ無理だろう。」

「大丈夫です。ハンペンを二枚用意してありますから。」

「そのコンドルは、ハンペンが好きなの？」

「はい、とつても！」

「焼けば、その匂いで直ぐにやって来ます。」

「じゃあ、すぐに焼こう！」

ユミは大きなイチヨウの木の下で、七輪でハンペンを焼き始めた。バターと醤油の焦げる匂いに誘われて、コンドルのアンダルシアがやって来た。

「おはよ～～～う、今日は早いね～～。」

「これ、アンダルシアのおじさんにあげようと思って焼いてたの。今日は二枚あるわ。」

「お～～～、そうだったのかい!？」

「どうぞ、お召し上がりください。」

神主は、神社の建物に隠れて見ていた。

「待てよ、何か魂胆があるな？」

「はい、あります！」

「言ってみろ！」

由美は指差した。

「あそこに大きな山が見えるでしょう？」

「あれは、有名な富士山だよ。そのくらいは知ってるよ。」

「あそこまで、わたしを乗せて連れてって欲しいの？」

「何しに行くんだい？」

「友達が重病で高熱を出してるの。彼女を助けるために、マイルズソウという薬草がいるの。それは高い山にしかないの。おねがいします！」

ユミは必死に頼んでいた。目には涙が溢れていた。

「分かった！その涙を信じて、乗せて行ってやろう！」

「ありがとう！」

「でも、その大きな身体じゃ、とてもとても乗せられないよ。」

ユミは十センチの大きさになった。

「これなら、どう？」「それなら大丈夫だ！じゃあ、いまずぐ出発だ〜〜！」

アンダルシアはハンペンを食べると、ユミを乗せ大空に舞い上がって行った。ユミは、神主に手を振っていた。

激突！

コンドルは、体重約十キログラムで、クチバシから尾の先までがおよそ一メートル二十センチ、両翼の端から端の長さがおよそ三メートルあった。

コンドルは飛ぶスピードは、そんなに早くなく、時速五十キロ程度だった。それでも、地面をはうようにして走る自動車よりは、遥かに早かった。

ユミは、必死でコンドルの羽に掴まっていた。

「うわ~~~~、高いわ~~~~！」

下には、地震で壊れた家や、地割れで寸断され、自動車の走っていない道路が見えていた。

「どこもここも地震で壊れているわ。」

「これから、上昇気流に乗りますんで、羽の裏に隠れておくんなせい！」

「はい！」

ユミは、羽の裏に潜り込んだ。

富士山には、お昼前に着いた。意外と早かった。

「はい、富士山です。」

六合目あたりだった。人のいない場所だった。ミクはコンドルから降りると、大きくなって、早速に薬草を探し始めた。

アンダルシアも探していた。

「これじゃあ、ないんですかい？」

「どれ、どれ？」

「これでしょう。」

「これだわ！よく知ってるわね~~~~。」

「アンデスでも、これで熱を冷ますんですよ。」

「そうなんだ。」

ユミは、ポケットからレジ袋を取り出した。それに、実のついてる

ものを根から二本引き抜いて、中に入れた。

「これ、首から下げてくれない？」

「いいですよ。」

ユミは、アンダルシアの首に、レジ袋を巻きつけて、しっかりと結んだ。

「これで大丈夫だわ！」

「これでいいんですかい？」

「いいわ、さあ帰りましょう！」

アンダルシアは、ユミを乗せて飛び立った。

「お腹空いたな〜！」

「ちよつと待ってて。コンビニで何か買ってくるわ。」

「コンビニ？」

「何でも売ってる便利のところよ。行ったことないの？」

「そんなとこ知りませんよ。」

「あ〜、そうなの？何が欲しい？」

「そうだな〜、生肉かな？」

「豚がいい、それとも牛肉？」

「牛肉がいいな。」

「分かったわ、あそこのコンビニの近くで降ろして。」

「どこ？」

「あの赤い看板の。」

「オーケー。」

アンダルシアは、人のいない空き地に舞い降りた。

「ちよつと待ってて！」

ユミは、すぐに戻って来た。

「ここじゃあ人に見つかるから、どこか高いところに行つて食べましょう！これ銜えて！」

アンダルシアは、食べ物の入ったレジ袋をくわえると、小さくなつたユミを乗せて飛び立った。

近くの人気のない高台に舞い降りた。

「はい、牛肉！」ラップを外して彼の目の前に置いた。二百グラム三パックの牛肉を、ぺろっと三口で食べた。

「あ~~~~、おいしかった！」

「早いわね~~~~！」

アンダルシアは、もつと食べたそうな顔をしていた。

「お小遣いの千円しかなかったの、ごめんなさい。」

「いいよいいよ、気にしなくて。」

ユミは、何も買えなかった。

「さあ、帰りましょう！」

アンダルシアは、ユミを乗せ、狸山に向けて飛び立った。

日本三鳴鳥のひとつ、渡り鳥のオオルリが子供を連れて南の国に向かって、かなりの上空を編隊を組んで飛んでいた。

ユミは、彼らに向かって叫んだ。「みんな、頑張れよ~~~~！」

「ユミ、今から上に登るから、しつかり掴まってるよ~~~~！」

「分かったわ~~~~！」

アンダルシアは、上昇気流に乗って、渡り鳥の飛んでる高さくらいまで上昇した。

「わ~~~~あ、高いわ~~~~！」

その時、小型セスナ機が雲の中から急に現れた。

アンダルシアは驚いた。

「わ~~~~あ！」

セスナ機の左翼にぶつかって、アンダルシアはバランスを失い、真つ逆さまになって落ちて行った。

「わ~~~~あ！」「きゃ~~~~あ！」

道草神社とアユ

アンダルシアは、大きな木の枝にぶつかり、草の上に落ちた。

「いててててて~~~~！」

「大丈夫、アンダルシア!?」

「飛行機にぶつかったところが痛いけど、大丈夫みたいだ。」

「そう、それなら良かったわ。歩ける?」

アンダルシアは起き上がった。

「どうやら大丈夫みたいだ。」

翼を広げてみた。「あ、痛い!」

「どっちの翼?」

「右の翼。」

「あまり動かさないほうがいいわ。」

「そうするよ。休めば治るかも?」

「そうね。」

近くに小さな神社があった。大きな湖が見えていた。ユミは大きくなった。

「あそこに行きましょう。神に仕える神主さんなら、きっと助けてくれるわ。」

「そうだな。」

「行きましょう。」

神社には、道草神社と書いてあった。小さい神社のためか、人は誰も来ていなかった。

「道草神社……」

「どうかしたの?」

「ミクが言ってた神社だわ!」

「ミクって?」

「病気の友達の名前。生まれる前は、道草神社にいたって言ったの。」

「妖精つてのは、生まれる前のことを覚えているんだってね〜。」
「半分だけね。」

「じゃあ、ここがその神社つてことかい？」

「たぶんそうだね。富士山の近くで、湖の近くって言っていたから。」

「神社の前に、木の長椅子があつた。ユミはそこに座つた。アンダルシアは、地面に座つた。」

老婆が、とぼとぼと歩いてやってきた。

「こんなところに、子供一人で、いったいどうしたんだい。」

ユミは、とつさの嘘をついた。

「お父さんを待ってるんです。」

「ああ、そうなの？」

「神主さんはいますか？」

「今はいないよ。自動車で出掛けてるよ。」

「ちょっと、休ませてください。」

「ああ、いいよ。」

「どうして、変な鳥がいるんだい？大きい鳥だね〜〜。」

「コンドルという鳥です。」

老婆は、ちつとも不思議がらずにコンドルを見ていた。

「コンドルがここにいるなんて、不思議じゃないですか？」

「昔は、不思議なことが沢山あつたからね〜。慣れちゃってるよ。」

「そうなんですか？」

「あんた、ひよつとして、妖精じゃないかな？」

ユミは、神社の雰囲気と老婆の雰囲気、正直に告白した。

「そうです。」

「やっぱり！」

「どうして分かつたんですか？」

「昔ね、いたんだよ。あんたのような妖精が。」

「ここにいたんですか？」

「神社の屋根裏に棲んでいたよ。」

「神社の屋根裏に！ひょっとして、あなたの名前は、アユさんではないですか？」

「そうだよ。どうして分かったの！？」

老婆は、不思議そうにユミを見ていた。

前世の名はマユ

ユミは、老婆にミクのことを話した。

「じゃあ、そのミクって言う妖精は、マユの生まれ変わりって言うんだね。」

「マユって言う名前だったんですか？」

「そうだよ。」

「マユの生まれ変わり…」

「そうです。絶対にそうです。」

老婆は泣き出した。

「マユちゃ……ん！」

しばらく泣くと、老婆は神社の裏に案内した。石を積んだだけの墓があった。

「これが、マユの墓だよ。この下にマユは眠っているんだよ。」

「この下に…」

「マユ、無事に生まれ変わって良かったね…。」

よっぽど、仲良しだったんだろう。老婆は、またも泣き出した。

ユミは、お墓に手を合わせた。

「マユさん、マユさんは無事に生まれ変わりました。安心してください。」

「どうもありがとう、来てくれて。」

「いいえ、偶然なんです。」

「偶然？」

「はい、飛行機とぶつかって、ここに落ちて来たんです。」

「そうだったのかい。」

「はい。休ませてもらおうと思って。」

「休んでいきなさい、休んでいきなさい！」

「はい。」

「マユ…じゃなくって、そのミクって言う妖精の話しも聞きたいし。」

「はい。」

ユミとアンダルシアは、家の中に通された。

ユミは家の中に入って行つた。アンダルシアは、土間で佇んでいた。老婆はアンダルシアを見ていた。

「あんたも入りなさい。」

「足が汚れてますんで。ここで結構です。」

老婆は、雑巾を持って来た。そして、アンダルシアの足を拭いてやった。

「はい、これでいいだろう?」

「じゃあ、お言葉に甘えて。」アンダルシアは、人間の家に入るのは生まれて初めてだった。

妙に感激していた。

「わゝゝあ、人間の匂いだらけだゝゝ。」

きよろきよろして、周りを見ていた。老婆はユミに聞いた。

「何か飲むかい?」

「お茶をください。」

「そこのあんたは?」

「甘い水があれば。」

「甘い水? ジュースならあるよ。」

「それで結構です。」

老婆は、お茶とグレープジュースを持って来た。

「美味しいわゝゝ。」

「わゝゝ、おいしい!」

アンダルシアは、ブレイプジュースを飲むのは初めてだった。

老婆は、おはぎを持って来た。

「お彼岸だからね。マユが好きだったんだよ、おはぎが。」

「ミクも好きです。」

「そうかい、そうかい!」

ユミは食べた。「とっても美味しいです。これは手作りですか?」

とっても大きかった。

「そうだよ。わたしが作ったんだよ。昔のままのやり方だね。」

「田舎の味がします。」

「あんたも、ぼやっとしてないで食べなよ。」

「はい。」

アンダルシアは、一口で食べた。

「うわゝゝゝあ、甘ゝゝゝい！」

「甘いのは嫌いかい？」

「いいえ。」

「それは良かった。何が好きなんだい、あんたは？」

「生肉です。」

「生肉？どんな？」

「何でもいいです。」

「分かった！ユミちゃんは、何がいいの？」

「キノコとか、肉以外は。」

「じゃあ、魚は食べるんだね？」

「はい、少しなら。」

「野菜は好きなんだろう？」

「はい。」

「やっぱり、マユと同じだわゝゝ。」

神主が帰って来た。老婆が事情を説明すると、神主は安易に理解した。さすがに神主だった。

「その翼じゃあ無理だから、治るまでここにいなさい。今日は泊まって行きなさい。」

ユミは、ミクのこと心配だったが、どうしようもできないので、泊まることにした。アンダルシアは、黙って珍しそうに、二人の間を見ていた。

一人ぼっちのミク

その日の夕方だった。

「六時かゝゝ、暗くなつて来たなゝゝ、もう無理だな。」

狸山神社の神主は、神社の階段に座つて、富士山を見ていた。

「何かあつたのかなゝゝ？もう帰つてもいいころなのになゝゝ？」
奥さんもやつて来た。

「あなた、まだ帰つて来ないんですか？」

「ああ、まだ帰つて来ないよ。」

「どうしたんでしょうね？」

「何事もないといいんだけどなゝゝ。」

「今日は暗くなつたから、どこかで休んでいるんじゃないですか？」

「それだといいいんだけど。」

「ミクちゃんの電波では連絡できないんですか？」

「妖精の電波は、せいぜい三キロだよ。遠くには飛ばないんだよ。」

「そうなんですか。」

「それに、ミクに余計な心配をかけることになるしな。」

「そうですね。」

完全に暗くなつたので二人は、懐中電灯を持って神社に戻つて行つた。ミクの巣箱を照らした。

「ミク、大丈夫か？」

「大丈夫。」

「元気ないなゝゝ。」

「まだ熱があるみたいなの。」

神主はミクの額に手を当ててみたいが、とても相手が小さくつて無理だった。

「蜂蜜でもどうだ？」

「いらない。」

「そうか…」

奥さんは、神主の後ろにいた。

「何か欲しいものある、ミクちゃん？」

「ない。」

神主は奥さんに命じた。

「ここは俺に任せなさい。おまえは、夕食のこしらえがあるから、管理小屋に戻りなさい。」

「はい。」

奥さんは、キャンプ場に戻って行った。

「ユミちゃんは帰って来たの？」

「それが、まだなんだよ。」

「どうしたのかしら？」

「たぶん、暗くなつたから、どつかで休んでいるんだよ。」

「それならいいんだけど。心配だな〜。」

「必ず、明日になれば帰って来るよ。心配するな。」

「そうだといいんだけど。」

「大丈夫だよ。きっと戻って来るよ！」

ミクの次の言葉が返ってくるまで、多少の間があつた。

「神主さん。」

「何だい？」

「わたし、一人で大丈夫だから、もう行ってもいいわ。」

「ミクの大好きなコスモスの花を入れておくよ。」

「ありがとう。わたし、一人は慣れてるから。屋根裏にいたときから。」

「屋根裏って？」

「ここに生まれる前は屋根裏に一人でいたの。」

「そうなんだ？」

「だから一人で大丈夫よ。」

「じゃあな。ときどき見に来るよ。」

神主は去って行った。ミクは、小さな声で、ユミと一緒に歌っていた、妖精の仕事歌を歌いだした。数羽のカラスたちが、ミクを木の

上から見守っていた。

はいはいはいの はいはいはいの
妖精は〜盗み合って助け合う〜 仲良く盗み合って助け合う
こりゃあ〜とってもいいことだ はいはいはいの はいはいほ
い

地球をみんなで守りましょう みんなで仲良く取り合えば 平
和な世界を築けます

はいはいはいの はいはいはいの
一生懸命に働けば地球の空気が汚れます 他の生物殺します
だから盗み合って助け合う

こりゃあ〜とってもいいことだ はいはいはいの はいはいほ
い

欲張って働くと地球の空気が汚れます 地球の自然を壊します
だから盗み合って助け合う
こりゃあ〜とってもいいことだ はいはいはいの はいはいほ
い

アンデスの祭

夕食は盛り上がっていた。

「いやゝゝゝ、今日は実にいい日だ！飲みたまえ飲みたまえ、アンダルシア君！」

アンダルシアは、大皿についてある酒を嘴で器用に飲んでいた。

「ここは実に素晴らしいですなゝゝ。山はあるし湖はあるし、空気はうまいし。まるでアンデスみたいだ！」

「いいこと言うねゝゝ。その通り、その通り！で、アンデスもこういう感じだったの？」

テレパシーと口との対話だった。人間は口で話していたが、コンドルはそれをテレパシーとして聞くことができた。

「そうです。こういう感じでした。」

「アンデスって言うと、何が名物なんだい？わたしの知ってる限りでは、インカ文明くらいなんだけど。」

「インカ文明は、名物なんかではありません。」

「これはこれは、失礼しました！」

「先ずは、マテ・デ・コカ」と呼ばれているコカ茶です。」

「他には？」

「パンとインカコーラですね。」

「インカコーラは知ってる。日本でも売られているからね。パンは名物なの？」

「はい、美味しいと有名です。」

「知らなかったゝゝ。」

「あとは、アルパカという動物と、わたくしコンドルです。」

「アンデスコンドルのアンダルシア君と、こうして酒を酌み交わすなんて、実に愉快だ！はゝははは！」

神主は、とつてもとつても上機嫌だった。

「光栄でございます。」

「あ~~~~あ、愉快、愉快！」

ユミは、お茶を飲みながら、冷たい豆腐を胡麻塩を振りかけて食べていた。

「この豆腐、固くて美味しいわ~~~~。」豆腐は、箸が立つくらいに硬かった。

「固豆腐という田舎豆腐よ。普通の豆腐よりも固くてチーズみたい、こくがあるのよ。」

「こんな豆腐、初めて食べたわ。」

「アユも好きだったね~~~~、その豆腐。」

「そうなんですか。」

神主は、今度はユミに目を向けた。

「で、生まれ変わったマユこと、ミクちゃんは、今どこにいるの？」

「狸山というところにいます。産まれて五年になります。」

「やっぱり神社なの？」

「はい。このことと同じように、とってもいい神主さんがいます。」

「そうかいそうかい。それは良かった！」

「じゃあ、その神主さんに、お礼をしよう！後で住所・氏名を教えてください。」

「はい。」

「今日は実にいい日だ！コンドルのアンダルシア君と、妖精のユミちゃんと友達になれて！」

「光荣でございます！」

アンダルシアは、けっこう酔っていた。ユミは終始ニコニコしていた。

「また遊びに来てもいいですか？」

「いいよいいよ、大歓迎だよ。こんな田舎の神社で良かったら。」

「おばさん、アユさんは神社の屋根裏にいたんですか？」

「ああ、この時期になるとコスモスの花の蜜を、いつも舐めてたよ。」

「ミクと同じだわ~~~~。」

アンダルシアは、アンデスを思い出していた。涙が目に溢れていた。
そして、アンデスの祭りという歌を歌いだした。

太鼓を鳴らし ケーナを吹いて 行列が行く 緑の谷へ
真っ赤な仮面 きれいなポンチョ 大きな帽子 ゆらゆらゆれる
ほらほら踊れ 今日祭り アンデスの春
ほらほら踊れ 今日祭り アンデスの春
ララララ ラーラ ラーラ ラーラ ララララ ラー
ラ

コンドルは飛んで行く

アンダルシアは、アンデスの山々を悠々と翼を広げて飛んでいる夢を見た。

朝、目覚めると涙で畳が濡れていた。

アンダルシアは、また夢を思い出し、しくしくと泣き出した。

ユミは、彼の鳴き声で目が覚めた。

「どうしたの、アンダルシア？」

「アンデスにいる、妻や子供のことを、美しい草原や美しい青空や緑の谷のことを思い出したんだよ。」

「奥さんは、どんな鳥だったの？」

「気が優しくってね。気が利くいい女房だったよ。今頃、どうしてるのかな。」

アンダルシアは大声で泣き出した。

「わーーーーん！」

神主が驚いて二人の寝ていた部屋に入ってきた。

「どうしたんだい、アンダルシア？」

「彼、ホームシックみたい。アンデスを思いだして泣いてるの。」

「そうなのかい、可哀想にな。」

神主も悲しくなってきた。

「ユミちゃんは、前世はどこにいたんだい？」

「屋久島という南の大きな島にいました。」

「屋久島か、知ってるよ！」

「知ってるんですか？」

「親戚が屋久島に住んでいるんだよ。」

「そうなんですか！」

「近いうちに遊びに行こうと思っているんだよ。ユミちゃんも一緒に行くかい？」

「はい、是非行きたいです！」

「じゃあ、決まったら狸山の神主に連絡するよ。」

「待ってます！」

「どうだね、アンダルシア君、翼の調子は？」

「良くなつたみたいです。もう痛くも何ともありません。」

「それは良かった！」

「朝早く出掛けると昼前には着くよ。はやく、その薬草を届けてやりなさい！」

「はい。」

「彼女が元気になったら、ここに遊びに来るように言ってくれ。」

「はい。言っておきます。」

ユミとアンダルシアは表に出た。アンダルシアは、試しに大きく翼を広げて、数回はばたいた。足が宙に浮いた。

「よし、大丈夫だ！」

神主は見送りに出て来た。

「じゃあ、気を付けてな！」

「はい！」

「神主さん、お酒おいしかったよ〜！」

「大丈夫か？」

「大丈夫です。二日酔いなどはしていません。」

「彼女を乗せて、ちゃんと飛べよ！」

「まかしといってください！」

別れ際、老婆は涙を浮かべていた。

「マユちゃんに、よろしくね。」

「はい。」

「元気になったら、ここに遊びにいらつしゃいと伝えておいてね。わたしが元気なうちに会ってみたいから。」

老婆は、目に涙を浮かべ、遠いところを見ていた。

「はい、ちゃんと伝えておきます。」

「じゃあ、さようなら。」

「さようなら。」

道草神社は、人の来ない淋しい神社だった。でも、それ以上の賑やかな優しさが、人の心に漂っていた。

アンダルシアは、ユミを乗せると、力強く大地を蹴って、大空に舞い上がって行った。

ただいま～～！

お昼過ぎだった。神主の奥さんが、蜂蜜を醤油のミニ容器に入れてやって来た。

「ミクちゃん、レンゲの蜂蜜よ。」

「ありがとう。ユミは、まだ帰って来ないの？」

「もうすぐ帰って来るよ。」

「どうしたのかな～～？」

「心配しなくても、大丈夫だよ。もうじき帰って来るよ。」

ミクは悲しい声で「うん。」と言った。

奥さんは、ミクの悲しい声を聞いて、神社の前の階段まで行ってみた。

「早く帰って来ないかな～～。」

遠くから、大きなと鳥が飛んで来るのが見えた。

「コンドルだわ！ユミだわ！帰って来たわ！」

ユミだった。ユミはアンダルシアの羽につかまって、大きく手を振っていた。

「ただいま～～～！」アンダルシアは、神社の前に着地した。

「ただいま～～、今帰りました。遅くなって、ごめんなさい！」

「どうしたの？」

「暗くなっただんで、途中で休んでいたんです。」

「そうだったの。心配したわ～～。」

「ごめんなさい！」

「ミクが待ってるわ。」

「そうだ、薬草、薬草！」

ユミは大きくなって、アンダルシアの首に巻いていたレジ袋を取った。

「これです奥さん！これを煎じてください！」

二本のうち一本を手渡した。

「分かったわ。今すぐ煎じてくるからね！」

奥さんは、管理小屋に向かって走って行った。

「アンダルシア、どうもありがとう！」

「また何かあったら、手助けしまっせ！遠慮するなよ！」

アンダルシアは飛んで行った。

「ミク~~~~~！」

ユミは、ミクの巣箱に直行した。

「ミクちゃ~~~~ん、大丈夫？」

「ユミ~~~~！」

「今帰って来たよ。薬草持って来たよ！」

「どうもありがとう！」

ユミは、マイズルソウの実を二つ摘み取ると、巣箱の中に入れ、自分も小さくなつて巣箱の中に入って行った。

「これを食べれば、熱が下がるわ。」

「マイズルソウの実ね？」

「そうよ。」

ミクは食べ始めた。

「どこまで行ったの？」

「富士山。」

「富士山まで行ったの？」

「そうよ。」

「凄いわね~~~~。どうやって行ったの？」

「コンドルという大きな鳥と友達になって、彼にに乗って行ったの。」

「

「コンドル？」

「アンデスにいる、とっても大きな鳥よ。今、狸山にいるの。」

「見てみたいわ~~~~。」

「元気になったら、紹介するわ。」

「早く元気になりたいな~~~~。」

「ミクの前世の神社にも行って来たわ。」

「ほんと!？」

「道草神社っていう神社でしょう?」

「そうよ。」

「大きな湖があるところでしょう?」

「そうよ。」

「ミクの前世の名前は、マユ!そうでしょう?」

「そうよ。」

「アユっていう、おばあさんもいたわ。」

「え~~~~ほんと~~~~!？」「ほんとよ、九十七歳だったけど元気だったわ。」

「アユちゃん、まだ生きていたんだ!」

ミクは、前世の自分と仲良しだったアユのことを思い出し、しくしくと泣き始めた。

「アユちゃん~~~~ん、逢いたいよ~~~~!」

「元気になったら、遊びに来てねって、言ってたわ。」

「早く元気になって、行ってみたいわ~~~~。」

ミクは懐かしそうに宙を見てた。

「アユちゃんのこと、思い出したの?」

「うん。」

「どんなこと?」

「石蹴りや鬼ごっこや隠れんぼをしたり、おはじきやあやとりをしたり、松ぼっくりを投げ合ったり、山ぶどうを取りに行ったり、とっても楽しかったわ~~~~!」

ユミはミクの思いにふける顔を見ていた。

「アユちゃんがいなかったら、わたし死ぬまで、きっと一人っきりだったわ。」

「早く元気になって、アユちゃんに逢いに行こうよ。」

「うん!今度は、ユミの前世のこと話して。」

「屋久島のこと?」

「そう。」

ユミの長い長い屋久島の話しが始まった。

炭焼きキノコ

神主の奥さんが持って来た煎じたマイズルソウの葉を飲んだ後、ミクは寝入ってしまった。

「きつと、ユミちゃんが帰って来たので安心したのね。」

ユミは、ミクの隣に寝ていた。

「ユミも疲れたでしょう。」

「はい。」

「ゆっくり寝なさい。」

「はい。」

「おやすみ。」

奥さんは帰って行った。

「ミク、ゆっくり休みなさい。寝たら良くなるわ。」

五歳年上のユミは、まるで母親のように、ミクを見ていた。

ユミも、帰って来て安心したのか、寝入ってしまった。

目が覚めると、夕方になっていた。隣を見ると、ミクがいなくなっていた。

ユミは慌てて起き、巣箱の玄関から首を出して外を見た。

「ミク~~~~~！」

ミクは、半壊している神社の渡り廊下の中で、大きくなって美味しそうに、巨峰を食べていた。

「ユミちゃん、薬草のおかげで、熱は無くなったわ。もう大丈夫よ。」

「

「わ~~~~、良かった~~~~！」

ミクは、嘘のように、すっかり元気になっていた。

「ミクちゃん、ハンペンのバター醤油焼き、食べる？」

「うん、食べる！」

ユミは、早速、イチヨウの木の下で、七輪を出して、隠しておいたハンペンを三枚焼き始めた。

ミクは横で見ている。

「椎茸を神主さんにもらったの。椎茸も焼けば美味しいわ、食べる？」

「うん、食べるわ！」ミクは食欲があつた。

「どうして、三枚焼いてるの？」

「一枚は、アンダルシアの分。」

「アンダルシアって？」

「コンドルのアンダルシア。」

タイミングよく、アンダルシアが舞い降りて来た。

「やあ、こんばんわ。またハンペンを焼いているのかい？」

「そうよ。一枚は、あなたの分よ。」

「これはこれは、ありがとさん！」

「この鳥が、コンドルのアンダルシア？」

「そうで〜す。おいらが、コンドルのアンダルシアでえす！」

アンダルシアは、いたって陽気だった。

「わたしはミク、あなたが運んでくれた薬草のおかげで、こんなに元気になったわ。とってもありがとう！」

「どういた〜しまして！元気になって、おいらも嬉しいよ！」

「焼けたわ！」バターと醤油の焦げた匂いが漂っていた。

「わ〜〜、美味しそうな匂いだな〜〜！」

少し冷ましてから、ミクとアンダルシアに箸で渡した。

アンダルシアは、ぺろっと一口で食べた。ミクは、手でつかみ美味しそうに上品に食べていた。

椎茸も焼いていた。

「七輪の炭で焼いた椎茸は、とっても美味しいのよ。」

アンダルシアは、「そんなの知らない！」と言って、飛んで行った。

「じゃあ、はい、ミク！」

醤油も何もつけずに箸で渡した。

「わ〜〜あ、美味しいわ〜〜！」

「キノコはやっぱり、こうやって何もつけずに焼いて食べるのが一

「番ねっ！」

「その通りです！」

妖精たちは、キノコを焼いて食べるのが大変好きだった。

「道草神社にいたときも、アユとこっやって、よく食べてたわっ！」

妖精たちは、外で風と語らって楽しく食べるのが大好きだった。

採用決定！

森本は、夕食を食べながら、しきりにぼやいていた。

「どこかに、検索の上手い人間はいませんかね〜」。

龍次父さんが尋ねた。

「どうしたんですか？」

「いやね、うちの会社の連中ときたら、インターネットの検索が下手なんですよ。それを思い出しまして。」

「そうなんですか。」

「これからは、検索が的確で早くないとね〜、駄目ですね。仕事になりません。」

「うちの一男、超早いですよ、検索。」

「そうなんですか？あれて、将棋のように、先を読む力が必要なんです。」

「うちの一男、将棋は強いです。なあ、一男！」

「まあね。」

「じゃあ、会社が復活したら、うちの会社に来てくれないかな〜」。

龍次父さんは、多少うろたえた。「えっ、そうですか！？」

「はい、本気です。困ってるんですよ。即戦力だったら、即採用です。」

「なっ、一男、おまえ検索、得意だよな？」

「うん、得意だよ。学校じゃあ、検索の鬼と言われているよ。」

森本は、手をポン！と叩いた。

「じゃあ、即採用ですね！」

「えっ？」

「足腰は強いですか？走るのなんかは？」

「運動は得意です。百メートルだったら、十二秒台で走ります。」

「そいつは凄いや！即採用ですね！」

龍次父さんが尋ねた。

「テレビ局と、百メートルと、どう関係があるんですか？」

「カメラマンをやってもらおうと思ひまして。」

「カメラマンを？でも、そういうテクニカルなことは、一男はできませんよ。」

「できなくっていいんです。若い人だったら、カメラの操作なんてすぐにできるようになります。問題なのは体力なんです。走る体力がないとテレビカメラマンは勤まらないんですよ。カメラマンの学校を出ても、体力がないと駄目なんです。」

「なるほど、そういうことですか。だったら、一男は適任だな～～。」

森本は、一男に頼んだ。

「今、高校何年生？」

「三年です。」

「検索は上手いし、足は早いし、是非うちの会社に来てくれませんかね～～？」

「専門学校に行こうと思ってたんです。」

「何の？」

「インターネットの。」

「そんなの駄目だよ。出ても役に立たないよ。」

「そうなんですか？」

「ああ、プロが言うんだから、間違いないよ。」

龍次父さんは喜んでいた。

「一男、いい話じゃないか。専門学校は止めにしろ！」

一男は少し考えた。

「そうだね、専門学校は止めにするよ。」

森本は、またも手をポン！と叩いた。

「決まった！じゃあ来年、会社で待つてるよ！」

「あつ、はい。」

「正式な連絡は、決まったら電話で知らせます。わたしが、採用の

責任者ですから安心して待っててください。」

「はい。よろしくおねがいします！」

「良かったな〜、一男！」

「うん！」

黙って聞いていた母と妹の幸子は、目を丸して手を叩いて喜んで
いた。

買い物

次の日の正午過ぎだった。

ユミとミクが、椎茸を七輪の炭で焼いて食べていると、神主がやって来た。

「おいしそうだね〜。」

「はい、とっても美味しいです。」

「ほっぺが落ちるくらい、美味しいです。」

神主は、レジ袋に何かを持っていた。

「トウモロコシが余ったので、あげるよ。」

トウモロコシは切って三センチほどのものだった。

「わ〜〜、美味しそうだわ〜。」

「どうもありがとう。神主さん！」

二人は、風と語らい、お茶を飲みながら焼いた椎茸を食べていた。

早速、トウモロコシを焼き始めた。

神主は、真面目な顔になっていた。

「ユミ、頼みがあるんだけど。」

「何ですか？」

「食料が無くなってきてね〜、近くには売ってないんだよ。コン

ドルに乗って買い物に行ってくれないか？」

「はい。何を買に行けばいいんですか？」

「肉か魚を頼むよ。」

「分かりました。」

神主は、五千円手渡した。

「お釣りは、ちゃんと持って来てね。」

「はい。」

「あつ、それから、コンドル君にキャンプ場に来て、みんなに挨拶していただくと、説明するのに助かるんだけど。」

「分かりました。アンダルシアに伝えておきます。」

ユミは、アングルシアにテレパシーを送った。彼は、すぐにやって来た。

「買い物には行くけど、キャンプ場の人たちに、挨拶？」

「あなたを、友達にしないと、説明できないんじゃない？」

「そういうことか。分かった、挨拶に行つて来るよ。」

「ここに戻つて来てね。」

アングルシアは、キャンプ場に飛んで行つた。

キャンプ場で、みんなが食事をしていると、コンドルが飛んで来て、みんなの前に舞い降りて来た。

みんなは驚いた。

「なんだ、なんだ！？」「なに～～～！？」

アングルシアは挨拶した。

「はじめまして。」テレパシーでの挨拶だった。みんなは聞こえていた。

「おいら、アングルシア。あなたたちの買い物に行つて来ます。」
そう言うと、飛び去つて行つた。

森本は驚いていた。

「なんだい、あれは？夢でも見たかな？」

みんなは、「夢じゃない！夢じゃない！」と叫んでいた。
神主が説明に入つた。

「実は、わたしの神通力で、彼に頼んだんですよ。」

「神通力で？」

「はい。」

みんなは、半信半疑だったが、実際に見て聞いたので、信じた。
「世の中には、不思議なことがあるな～～。」

みんなも、しきりに首を傾げていた。

アングルシアは戻つて来た。

「挨拶して来たよ。」

「ごころうさま！じゃあ、早速行きましょうか？」

「オーケー！」

「お礼は後でも、いい？」

「いいよ。」

アンダルシアは、ユミを乗せ、大空に舞い上がって行った。

「ユミちゃん、いってらっしゃい！」ミクが大空に向かって叫んでいた。晴れていた。

花の首飾り

日曜日がやって来た。朝の十時だった。大地震と大津波から、一週間が経っていた。空は、からつところつと、ビンセント・ファン・ゴッホの絵のように晴れ渡っていた。

森本は地平線沿いの空を見ていた。「救援隊のへり、来ないな」。

「狸山に通じる道は寸断されたままだった。龍次父さんも、空を見ていた。」

「こんな小さなところまでは、手が回らないんじゃないでしょうか？」

「きっと、そうなんでしょうね。」

森本は、何だかいらいらしているようだった。

「いったい何やってるんだ、会社の連中は！？」

「うちもそうです。まったく音沙汰がありません。」

「もう、一週間ですよ。まったく腹が立つな」。

大地震と大津波で、人間たちは戦意を失っていた。いつこうに復興ははかどっていないかった。

森本は思わず悪態を付いた。「このままじゃあ、日本は終わりだな。」

「森本は、下界を見に神社の階段のところに向かった。」

神社の奥の方に、七歳か八歳くらいの小さな少女が二人、花摘みをしているのが見えた。

「近所の農家の子供だな。」

森本は近寄って、声をかけた。

「何をしているの？」

ユミが答えた。

「花をつんでいるんです。」

「花の首飾りでも作ってるの？」

「花の首飾り？」

「白鳥にならないようにね。」

「えっ？」

どうやら違うようだった。森本は、家に持ち帰って飾るんだろうと思った。

「こんなときに、やっぱり子供だな〜。」

二人は、一生懸命に花を選んでいた。

「蛇に気をつけるんだよ。」

「は〜〜い！」

森本は階段に向かった。

「まったく可愛いな〜。」

誰もいなかった。下界を見た。
依然として瓦礫の町だった。

「ちつとも、進んでないな〜。」

なんだか侘しくなってきたので、キャンプ場に帰ることにした。

その時、ヘリが飛んで来るのが見えた。

「あつ、ヘリだ！」

上空を通り過ぎて行った。

「なんだ、NHKのヘリか。やっぱり、NHKは組織網が強いな〜。」

キャンプ場に向かった。

向かう途中、森本は、一世を風靡し少女たちを熱狂させていた、タイガースの超有名な曲、花の首飾りを思い出した。森本は歌いだした。

花咲く娘たちは 花咲く野辺で

ひな菊の花の首飾り やさしく編んでいた

おお 愛のしるし 花の首飾り

花つむ娘たちは 日暮れの森の

湖に浮かぶ白鳥に 姿をかえていた

おお 愛のしるし 花の首飾り

純愛

森本は歌いながら帰って来た。

龍次父さんは、その歌を聞いていた。

「おつ、ジュリーの歌だ!」

「はい、そうです!」

「若いのに、よく知ってますね〜?」

「ポップスの原点であり教典ですから。」

「ああ、そうなんですか?」

「はい、これを知らないと、日本のポップスは語れません。」

「なるほど〜。僕は、どちらかというと、ショーケンだったな〜」。

「埼玉のストーンズ、テンプターズですね!」

「まあ、そうかな?」

龍次父さんは、テンプターズの有名な曲・純愛を歌いだした。

腕に傷をつけて 腕と腕を重ね

若い愛の血潮 わかち合った恋は

誰も 誰も こわせはしない〜♪

尻切れとんぼで終わった。

「なかなか、お上手ですね〜!」

「この部分だけね。ほんとに音痴なの。長く歌うとボロが出るの。」

「ははは、そうなんですか?」

「歌はセンスですね。難しいです。」

「歌は、テクニクなんかじゃなくって、気持ちで歌うんですよ。」

「気持ちですか?」

「はい、感情を込めて歌えば、誰でも上手に歌えます。」

「な〜るほど。今、ヘリが飛んで行きましたけど?」

「あれは、NHKのヘリでした。」

「なんだ、がっかり！」

「でも、この場所を知らせてくれたら、救助隊を派遣してくれるかも知れません。」

「そうですね。」

その頃、ユミとミクは、相変わらず花を摘んでいた。

神主がやって来た。

「お風呂が沸いてるよ。入りなさい。」

「は～～い」「は～～い！」

二人は、離れの風呂場に行った。服を脱いで、お風呂に入った。

「気持ちいいわね～～。」「一週間振りだわ～～。」

妖精は、人間よりも身体が綺麗なので、お風呂には、あまり入らなかった。

風呂場の上部は、プラスチックで透明だった。コンドルのアンダルシアが飛んでいた。

「さっきの人、変なこと言ってたわね～～、花の首飾りがどうか？」

「そうだね。」

「何のことかしらね？」

「何のことでしょうね？」

「あつ、アンダルシアだわ！」

「彼って、暇鳥ね～～。」

「いつか、夜に入って、星や月を眺めたいわね～～。」

「それはいいわね～～。」

「ミク、純愛って知ってる？」

「純愛？」

「見返りを求めない愛。」

「純愛……でも、それって難しいわね。」

「そうね。」

ユミは、ミクが好きだった。それは、決して見返りを求めない愛だった。

「ミク、元気になって良かったね！」

「うん！」

ポン太の悔し涙

お昼になった。キャンプ場で、みんなが食事をしていると、ダブル・ローターのヘリが飛んで来た。

森本は叫んだ。「ヘリだ！」

龍次父さんは、ヘリを確認していた。「アメリカ軍の軍用輸送ヘリだ！」

ヘリは、キャンプ場の誰もいない上空で、ホバリングすると、スライドドアを開いた。

軍人が手を振っていた。パラシュートで物が落とされた。五個落とすと、ヘリは去って行った。

「救援物資だ！」

みんなは走った。それに向かって。

物資は、バックルで止めてあった。そのバックルを外して行った。

中から、色んな物が出てきた。お米や小麦粉や粉ミルクや砂糖や塩や、クラッカーや缶詰や乾燥肉や乾燥魚や乾燥野菜乾燥果物、キャベツや食パン、お菓子やキャンデーも入っていた。携帯ラジオや懐中電灯も入っていた。

幸子は、お菓子を見て大喜びしていた。

「わーーーー、お菓子も入ってる！」

みんなは、手分けして整理した。森本の隣には神主がいた。

「これで、一週間は大丈夫ですね！」

「そうですね。」

みんなの表情に笑顔が戻っていた。

ユミとミクは、昼食の後、仲良く二人で、お茶を飲んでいたら、やもめ狸のポン太がやって来た。

「やあ、こんにちわ。」

「こんにちわ。」「こんにちわ。」

ポン太は、元気なミクを見るのは初めてだった。

「元気そうだねえ、ミクちゃん。」

「ポン太さんがいなかったら、わたしきつと死んでました。ほんとうに、ありがとう!」

「元気になって、良かった!」

「ポン太さん、お茶飲みません?」

「お茶? あゝ、よく人間が飲んでるやつね。」

「そうです。飲みます?」

お椀があつたので、それに注いだ。

「はい、どうぞ!」

ポン太は舐めて飲んだ。

「うゝゝゝん、なんちゅうか、変な味!」

ポン太は、お気に召さないようだった。

ユミは、草むらからレジ袋を取って、中から柿を取り出した。

「これなら、どう?」

「おっ、柿だ! 渋柿じゃないよね?」

「甘柿です。」

「こいつはいいや! 今食べてもいいかい?」

「どうぞ、お召し上がりください。」

ポン太は、おいしそうに食べ始めた。

「山の散歩なら、いつでも背中に乗せてつてあげるよ。」

「ありがとう。」

「昔は、この山のふもとも林があつたんだがねゝゝ、すっかり人間どもの家だらけになっちまって。」

「そうですねゝゝ。」

「人間なんて、みんな死んじまえばいいんだ!」

ポン太は、急に泣き出した。

「友達も、人間の自動車に敷かれて死んじまったよゝゝ!」

ユミとミクには、言葉が無かった。

「やつら、人間に役に立たない動物は死んでもいいと思ってる。役

に立つかどうかを人間が勝手に決めてもいいのかい？神様が決めるんじゃないのかい？」

ポン太は、悔し涙を流しながら帰って行った。

ホイホイ星人

夕方近くだった。日が沈もうとしていた。

ユミは、大きなイチヨウの木の上で、何かを一心に祈っていた。

「何を祈ってるの、ユミ？」

「神様に頼nderの。人間を救ってください。新しい勇気と希望を与えてください。って。」

「じゃあ、わたしも祈ろう！」

二人は、下界の瓦礫を見ながら、大空を見ながら祈っていた。

突然、見ていた空にユーフォーが現れて、こちらにやって来た。そして、神社の前に着陸した。

ユミとミクは驚いて、下に降りていった。

ユーフォーは円盤で、ちよつと大きな炊飯器くらいの大きさだった。不思議なドアが開き、中から小さな人間が二人出てきた。

「宇宙人だわ！」「わ~~~~~！」

「わたしたちと同じくらいの大きさだわ！」

ミクはびつくりして、宇宙人を凝視していた。信じられず、しきりに目をこすっていた。

宇宙人は、妖精よりも少し低く、ハセンチくらいの大きさだった。

先頭の宇宙人が、テレパシーで交信して来た。

「われわれは、アンドロメダ星雲のホイホイ星からきた者である。

わたしの名は、ゾルビ。はじめまして。」

ユミは、ホイホイ星という言葉に親近感を覚えた。

「わたしは、地球の妖精でユミ。この子は、同じく妖精でミク。はじめまして。」

「なんだ、妖精だったのか。」

「妖精じゃあ、ご不満ですか？」

「これはこれは失礼！ちつとも不満じゃないです。」

「で、ここへは何しに？」

「君たちのテレパシーが聞こえたんだよ。人間を救ってくれというテレパシーがね。」

「ああ、それは神様に送ってたんです。」

「神様なんて、どこにもいないよ。わたしは見たことないってことだけだね。」

「神様は目には見えないんですよ。でも、ちゃんとしています。」

「さすが、われわれとは生まれが違う、大地の子だね。」

「神様の悪口を言つと、撥が当たりますよ。」

「分かった分かった、もう神様のことは言わないよ。」

「じゃあ、ホイホイ星人さん。同じ人間の仲間として、地球人を助けてくれませんか？」

「実は、地球人はわれわれが造つたんだよ。」

「えーーーーー！？」

「とんだ失敗作になつちまつたようだな。欲ばかり強くて、プライドばかり高くて。」

「えーーーー、そうなんですか！？」

「助けようたつて、こうなつたらどうしようもないよ。地球人の裁量次第だな。」

「なーーーーんだ、がっかり！」

「君たちは面白い妖精だね。また遊びに来るよ。何か困ったことがあつたら、テレパシーで呼んでね。」

「もう帰るんですか？」

「じゃあね！」ホイホイ星人は去つて行つた。

「ミク、ほっぺをつまんでくれない？」

「ユミ、わたしのもつまんでくれない？」

ユミとミクは、何度もほっぺをつまみ合っていた。

ソーラーランタン

夕方遅くだった。神主は、ソーラーランタンを持って、ミクの巣箱にやって来た。それを、巣箱の上の枝にぶら下げた。

ユミも巣箱に一緒だった。

「わくわく明るいわくわく！」雑巾のドアから、顔を出した。神主を見た。

「なあにこれ、神主さん？」

「ソーラーランタンっていうもの。電池のちようちんだよ。」

「これ電池で光ってるんですか？」

「そうだよ、暗くなると自分で点くんだよ。太陽の光で電気を貯めてね。」

「凄いわくわく。誰が作ったの？」

「知らないけど、人間が作ったんだよ。」

「人間って凄いのねくわく。けっして失敗作なんかじゃないわ。」

「失敗作？」

「さつき、宇宙人がやってきて、人間は自分たちが作った失敗作って言っただんです。」

「宇宙人が来たの？」

「はい、その宇宙人、わたしたちよりも小さかったの。」

「ほんとうかい？」

「ほんとうよ、神主さん。」

「どうして宇宙人が来たんだい？」

「神様を呼んでたら、宇宙人がやって来たの。」

「じゃあ、間違えて来たのかなくわく？」

「そうみたい。」

「宇宙人が来たとは驚いたなくわく。」

神主は言葉ほど驚いてはいなかった。

「ここにいたら、そういうこともあるよ。」

最近は、そう感じていた。

「ミクは、すっかり元気になったみたいだね？」

ミクの声だった。

「はい、もうすっかり元気になりました。」

「良かった、良かった！」

「神主さん。」

「何だい？」

「今度、富士山の近くの道草神社に遊びに行ってもいいですか？」

「何だい、そこは？」

「わたしがここに生まれる前に生きてたところです。」

「つまり、前世の場所ってことかね？」

「そうです。」

「行ってもいいよ。でも、絶対に帰っておいでよ。わたしが寂しくなるから。」

「絶対に帰って来ます。」

「じゃあ行ってもいいよ。」

「わくわく嬉しいわ！アユちゃんに逢えるわくわく！」

「アユちゃん、って？」

「前世の仲良しの友達。」

「それは楽しみだね。」

「はい。」

ユミが神主に言った。

「じゃあ、明日出発してもいいですか？」

「明日？気が早いわくわく、ユミもいなくなるのかな？」

「はい、一緒に行きます。ミクだけじゃあ、場所が分からないんです。」

「そうか、そういうことじゃあ仕方ないな。」

「じゃあ、わたしも行ってもいいんですね？」

「仕方ないよ。行ったらっしやい。」

「おみやげ持って来ます。」

「そんなのはいいよ。帰って来てくれれば、それでいい。で、明日の何時に行くの？」

「それは、アングルシア次第です。」

「そうか、そういうことか。」

二人は喜んでいた。明日が楽しみで仕方なかった。神主は、寂しかったが堪えていた。

ぶら下げたばかりのソーラーランタンが、明るく巢箱を照らしていた。

カラスが鳴いていた

次の日の朝がやってきた。朝六時だった。

「これ、持って行きなさい。」

「五千円も!?」

「いいんだよ。」

「お金あるんですか?」

「このくらいの金は、いつでもあるさ。」

「ありがとうございます。」

ユミとミクを乗せたアンダルシアは飛び立った。

神主と奥さんは見送っていた。

「気をつけてね〜〜!」

「必ず帰ってこいよ〜!」

アンダルシアの首には五千円の入った財布がレジ袋に入れられ、首に巻かれていた。

ユミとミクは、アンダルシアの首の羽に掴まっていた。

「ミク、大丈夫?」

「大丈夫よ!」

「神主、五千円もくれちゃったよ。」

「五千円もあれば安心ね。」

「そうだね。どうせ、アンダルシアの餌代になるけど。」

アンダルシアは、上昇気流に乗って、どんどん上昇して行った。

「うわ〜〜、高いわ〜〜!」

「ミク、しっかり掴まってなよ!」

「分かったわ〜〜!」

「アンダルシア、飛行機には気をつけてね!」

「もう、へまはしないよ!」

道草神社に着いたのは、お昼前だった。ちょうど、神主が落ち葉を竹箒で掃いていた。

近くに舞い降りた。神主は驚いた。

「お~~~~!!?」

アンダルシアはテレパシーで挨拶した。

「こんにちわ~~、また来ました。」

「アンダルシア!」

ユミとミクは大きくなつて現れた。

「こんにちわ、神主さん!」

「お~~、ユミちゃん!」

「はじめまして、神主さん!」

「この子は?」

「アユちゃんの生まれ変わりの、ミクです。」

「あ~~、この子がミクちゃんね。ちょっと待ってね。」

神主は神社の裏の自宅に駆けて行った。

「お婆ちゃ~~ん!」

老婆が、とぼとぼとやって来た。

ミクを見て足を早めた。

「マユ~~~~!!」抱きついて来た。涙を流していた。

年取ったアユを見て、ミクは戸惑った。

「アユちゃんなの?」

「そうよ、アユよ!マユちゃ~~ん、ちゃんと生まれ変わって良かったね~~!」

ミクは、そっくりというより、そのままマユだった。妖精は、姿形は同じに生まれ変わるのだった。

「うわ~~、ほんとうにマユだわ~~!わたしのこと覚えてる?」

「ええ、ちゃんと覚えています。」

「よく石蹴りして遊んだよね~~。」

「はい。」

「よく椎茸を焼いて食べたよね~~!」

「はい。」

ミクは、年取つて皺だらけになっているアユを見て、涙ぐんでいた。

神主は促した。

「積もる話もあるう。家に入って話そう。さあ、お入り、お入り！」

みんなは家に向かった。

神社の屋根でカラスたちが鳴いていた。アングルシアが、「ホエッ！」と鳴くと逃げて行った。

「カラスは、どこにでもいるんだな〜？」

鬼妖精

ミクは、玄関の前で立ち止まった。

「ちよっと待ってください。マユちゃんの、お墓参りをしてからでいいですか？」

神主は、うつかりしていた。

「ああ、いいよ、いいよ。」

みんなで、マユの墓に向かった。

老婆のアユが指し示した。

「ここよ、マユの墓は。」

それは、石が積んであるだけの粗末な墓だった。

「マユはね、お墓なんていらな。って言っただけだね。」

ミクは、お礼を老婆に言った。

「どうもありがとうございます。とっても喜んで思います。って、わたしですけど。」

みんなは、少し笑った。

「ここに埋めたんですか？」

「そうよ。ここに埋葬したのよ。」

「でも、ここにはもう何もありません。」

「どうして？」

「妖精は、一週間くらいで、土になるんです。」

「ああ、そうだったの。」

みんなは、手を合わせた。

「なんだか、自分に手を合わせるって、変だね。」

みんなは、少し笑った。

アンダルシアは、しみじみと景色を見ていた。

「いや〜、ここは実にいいところですね〜。緑の山々、藍色

の湖。空気は旨いし、まるでアンデスみたいだ！」

ミクは、玄関の前で、またしても立ち止まった。

「神主さん、昔遊んでいた場所を先に見てみたいんですけど、いいですか？」

「あつ、いいいいいよ。」

ミクは神社の周りを、懐かしそうに見ながら歩き始めた。ユミが質問した。

「ミクちゃん、屋根裏って、どこの屋根裏にいたの？」

「あそこよ。」

そこは、神社の本殿の屋根裏だった。

「あそこか〜。」

「何もかも、昔と同じだわ。」

ミクの目は、涙で潤んでいた。

「ここから眺める景色も、ほとんど昔と同じだわ。」

神社の屋根に、カラスたちが止まっていた。

「カラスも、昔と同じだわ。」

老婆が促した。

「マユちゃん、この続きは、また明日にでもしましょう。」

ミクは素直に応じた。

「はい。」

みんなは、家に入って行った。

老婆は、自分とマユが写った写真を持って来た。みんなに見せた。

「これが、マユちゃんよ。」

マユの両耳の近くには、鬼のように角が生えていた。ユミは落ち着いて見ていた。

「鬼妖精だわ！」

「そう、わたし昔は、鬼妖精だったの。」

涙の思い出

鬼妖精は、前世に悪いことをすると、罰としてなるのだった。

妖精が覚えているのは、前世までで、その前はまったく覚えていなかった。

「わたし、前々世のことは、まったく覚えていないの。だからどんな悪いことをしたか分からないの。」
老婆のアユは知っていた。

「あなた、時々話していたわ。お爺さんや、お婆さんを騙して盗んでいたとか、力の弱い女子供から、無理やり盗んでいた、とか。」

「そうなんですか？まったく覚えていません。」

「父が、よく話してたよ。あなたは、村の子供に、鬼だ鬼だといじめられて、泣いて帰ってきて、それで昼間でも屋根裏に隠れるようになったって。」

「はい、それは覚えています。神主さんが、いつも助けてくれて、村の子供たちを叱ってくれてました。」

現在の神主が、祖父の写真を見せた。

「わたしの祖父です。50歳くらいのときの写真です。」

「あのときの神主さんだわ！」

「祖父は二十年前に、百歳で亡くなりました。」

ミクは泣き出した。

「神主さ～～～ん！」

「祖父は、マユさんが、善行を重ね、後世では角がなくなるのを祈ってました。」

「神主さ～～～ん！」

ミクは、まだ泣いていた。

「神主さん、もう角はありません。神主さんの厳しい教えのおかげです。」

ミクは、前世での出来事を思い出していた。

「復讐してやる！と叫んだときも、神主さんは、そんなことをしてはいけない。と諭してくれました。そんなことをしたら、今度は地獄に行くよ、と。」

老婆のアユは、マユが十三歳のときに、五人兄弟の一番下の女の子として生まれたのだった。

アユには、三歳年上の女の子がいたが、その子はマユとは遊ばなかった。

老婆のアユだけが、物心がついたところから遊ぶようになった。

ミクは、老婆のアユに礼を言った。

「アユちゃん、村の子供たちから、わたしをいつも助けてくれて、どうもありがとう。」

「マユちゃん、それはいつも遊んでくれてた御礼よ。」

「アユちゃんの御陰で、わたし昼間の暗い屋根裏から出られるようになったわ。とっても嬉しかったわ。」

「マユちゃん！〜ん！」

老婆は、あの日のことを思い出して泣き出した。

「アユちゃんは、大きな男の子にも負けずに、石を投げつけて追いつめたわ。どうもありがとう。」

「マユちゃん！〜ん！」

神主が入った。

「アユ婆ちゃん、話しは食べながらにしよう。」

「そうだね。マユちゃんじゃなくって、ミクちゃんは、何が欲しい？」

「堅い田舎豆腐と、焼き椎茸が欲しいです。」

「昔の、マユと同じだわ〜。」

アユ婆ちゃんは、みんなの注文を聞くと、台所に向かった。神主は言った。

「簡単な料理しかできませんけどね〜。でも、まだまだ元気なんですよ。」

料理の前に、お茶が運ばれて来た。

ミクは、お茶が好きだった。

「うわゝゝゝ、この味だわゝゝ。昔を思い出すわゝゝ。」

壁に、神主と女の人の写真があった。ユミが尋ねた。

「あの方は？」

「亡くなった妻です。去年、交通事故で他界しました。」

アンダルシアは、お茶を一口飲んだだけだった。

「お茶は苦手ですか、アンダルシア君？」

「いや、ちよっと、アンデスの味とは……」

「夕食が終わったら、また飲みましょう！」

「光栄です！」

昼間の食事は終わった。ユミとミクは、アンダルシアに乗って、湖の上空を散歩に行くことにした。近くに富士山が見えていた。アンダルシアは、二人を乗せ舞い上がった。湖の岸で、百歳になった昔のいじめっ子が、コンドルを見ていた。

リンドウの花

小学校の建物が見えていた。一階建ての校舎で、小さな運動場があり、十人くらいの子供たちが、ドッジボールをしていた。学校の生徒全員でやつてるようだった。先生が笛を吹いていた。

ミクは子供たちを見ようとはしなかった。

ユミは、鬼だ鬼だ！と言って、いじめられてるミクの前世のマユの姿が脳裏によぎった。

「アンダルシア、学校はもういいわ。」

「了解！」

ユミは、なぜミクが、狸山で小学生がやって来ると逃げるのかが分かった。

可哀想な、ミク。涙が出てきた。

「どうしたの、ユミ？涙が出てるよ。」

「なんでもないわ。この景色に感激してるだけ。」

「きつと、屋久島を思い出したのね。」

「そうなの。」

湖沿いには、二車線の舗装された道路があり、ときどき自動車が走っていた。

「アンダルシア、もっと低く飛んで！」

「あいよ！」

ユミは花を見ていた。

「あつ、りんどうの花だわ！アンダルシア、あそこで降りて！」

そこは、草原だった。秋の七草の一つ、ピンクという色の語源の撫子（なでしこ）が、可憐に咲き、秋の代表花である、りんどうが、釣り鐘型のきれいな紫色の花を咲かせていた。

アンダルシアは舞い降りた。

「珍しいわ、りんどうだわ！」

「この花の蜜、おいしそうだね？」

「舐めてみる？」

「うん！」

ミクは小さくなって、花に乗り舐めた。

「わくわく、美味しいわくわく！」

「どれどれ…」

ユミも小さくなって舐めた。

「ほんとだ、爽やかな味だわ！」

リンドウは、群生せずに、一本一本離れて咲いていた。

「リンドウは、背の低い草原でないと咲かないのよ。」

「そうなんだ？」

「ミク、リンドウの花言葉、知ってる？」

「そんなの、知らない。」

「悲しんでいるあなたを愛する！よ。」

「素敵な言葉だわくわく！」

「屋久島には、屋久島にしか咲かない、屋久島りんどうという花が咲いていたわ。」

「同じような花？」

「そう、同じような花よ。夏になると、高い山の岩場の隙間で青紫色の花を咲かせるの。とっても綺麗だったわ。」

周りには、りんどうの花が、たくさん生えていた。

「りんどうの花、初めて見るの？」

「うん。」

「昔は、この辺りまで遊びに来なかったの？」

「こんなところまでは来ないわ。遊んでいたのは、神社の周りだけ。」

「どうして？」

「だって、こんなところまで来たら、みんなにいじめられるもん。」

「ごめんね、ミク。嫌なこと思い出させちゃって。」

「ううん。気にしてないわ。」

ミクは、昔を思い出し、ブルーの悲しそうな目になっていた。妖精

の目は、悲しくなるとブルーになるのだった。

アンダルシアは二人を、父親のような目で見ていた。

大きな湖には遊覧船が走っていて、船着場があった。近くにスーパーがあった。

「アンダルシア、あの店の近くに降りて。」

「あいよ！」

ユミは、ミクを残してスーパーに入った。買い物をして帰ってくる
と、アンダルシアの首にレジ袋の持ち手の輪を通した。

「今日の夕食分よ。」

アンダルシアは、道草神社に向け、飛び立った。湖は大きく、周囲
は約10キロあった。

駄洒落

湖を一周して帰って来ると、アユ婆さんが、何かを作っていた。ミクが尋ねた。

「それ、何ですか？」

「これはね、アンダルシアの首につける、買い物袋だよ。」

それは、チャックのついたビニール袋だった。それに、バンドのよ
うな物を通して、決して解けて取れないように、しっかりと縫って
いた。

「これね、わたしの洋服のバンドだったの。これなら、決して外れ
ないわ。外すのも楽でしょう。」

アンダルシアも家の中に入って来た。

「ちょうど良かったわ。アンダルシア、ここに座って。」

アンダルシアは「はい。」と言って座った。

アンダルシアの胸に、ビニールの袋をあて、バンドで首に巻きつけ
た。

「わ〜〜、ちょうどいいわ。良かった！」

「これ、何ですか？」

「買い物袋よ。」

「あ〜〜、これいいな〜〜。」

「いつまでもレジ袋じゃ、頼りないもんね。」

「はい、そう思っていました。さすが、年の功！」

アンダルシアは、けっこう難しい言葉も知っていた。

「どこまで行って来たの？」

答えたのは、ミクだった。

「湖を一周して来ました。」

「どうだった？」

「とっても、いい景色でした。富士山が綺麗でした。草原があつた
ので、降りてリンドウの花の蜜を吸って帰って来ました。」

「あそこは、リンドウ草原って言うんだよ。そうかい、あそこまで行ったのかい。」

「この袋があつたら、リンドウの花を摘んでもって来れたのにな〜」

「じゃあ、今度持つて行きなさい。」

「はい。」

ミクは、周りを見ていた。

「昔の神主さんの御仏壇は、どこにあるんですか？」

「あ〜、わたしの部屋にあるよ。ついておいで。」

ミクはついて行った。ユミも一緒だった。アンダルシアだけが残った。彼は、仏壇の意味が分かっていた。

アユの部屋に入ると、大きな仏壇が置いてあった。

位牌の後ろに、刀を持った神主の写真が飾ってあった。

「お線香をあげてもいいですか？」

「ああいいよ。マユの生まれ変わりと知ったら、きっと喜ぶよ。」

ミクは、線香をあげると、手を合わせた。

ユミも尋ねた。

「わたしも、いいですか？」

「いいですよいいですよ。父も、きっと喜んでいます。」

ユミも線香をあげ、手を合わせた。

ミクは、いつまでも、写真を見ていた。

「この刀だわ…」

「どうしたの、マユ？」

「この刀で、わたしの角を切り落としてください。って頼んだことがあるんです。」

「そんなことがあったの？」

「アユちゃんが生まれる前のことです。」

「で、どうなったの？」

「こっぴどく怒られました。角を切ったら、血が出て死ぬぞ！って。」

鬼妖精にとって、角は急所だった。決して切り落としてはならないものだった。

「いろんなことがあつたんだね〜。」

居間から、アングルシアの大笑いが聞こえて来た。居間に行ってみると、テレビを見ていた。

「あ〜おかしい！アングスは、どこにあんですか〜？だって！」
アングルシアは、くだらない駄洒落に大笑いしていた。

ユミは、駄洒落が得意だった。が、くだらないので、最近はいかえていた。

「このくらの駄洒落だったら、今すぐ出来るわ。」

「どんなの？」

「この谷は、コンドルで混んどる！」

アングルシアは、腹をかかえて笑い出した。

「あつはははは、超おつかしい〜〜〜！」

歓迎夕食会

歓迎夕食会

神主がやって来た。

「今から、夕食の食材を買いに行くけど、椎茸と豆腐と肉だけでいいのかな？」

ユミが、大きなレジ袋を見せた。手渡した。

「さつき、観光船の船着場の近くのスーパーで、買って来ました。これを使ってください。」

レジ袋の中には、中国の大きな椎茸が二袋と、田舎豆腐と、豚肉一キロとメンチカツが十枚入っていた。

「アンダルシア君、これだけで大丈夫かな？」

「大丈夫です。来る途中で川で鯉を食べて来ましたから。」

「でも、何か買ってくるよ。わたしが欲しい物もあるし。」

神主は、自動車で出掛けて行った。

神主は、夕方の五時に帰って来て、六時に歓迎夕食会が始まった。

「アンダルシア君のために、ニワトリ一羽買ってきたよ。」

一羽といっても、羽や頭などはなく、ローストチキン用の生の肉だった。

アンダルシアは喜んだ。

「これ、いただけるんですか？」

「ああ、全部君の分だよ。」

「わくわくあ、ありがとうございます！」

テーブルの横には、電気の遠赤外線ハロゲンヒーター火鉢というものが置かれていた。そこに網をのせ、アユ婆ちゃんが、中国の大きな椎茸を焼いていた。

「この椎茸、大きいわね。さすが中国産だわ！」

「マユが好きだったという、オレンジジュースも買ってきたよ。っ

てことは、君たちも好きでしょう?」

「はい!」「はい!」

「オレンジジュースっていうと、あの日初めてアユちゃんと飲んだ日のことを思い出すわ。」

老婆が答えた。「そうだね〜。当時はオレンジジュースしかなかったからね〜。」

神主が、ニワトリを切って持って来た。

「いくら何でも、あれをそのまま食べるってわけにはいかないよね。」

「

「いいえ、食べようと思ったなら食べられますよ。」

「こいつは驚いた!」

みんなは大笑いした。

神主は、大皿に酒を注いだ。

「じゃあ、みんなの再会を祝って、乾杯〜〜!」

『かんぱ〜〜い!』

神主は、酒を一口飲み、アングルシアは、大皿に嘴を入れて飲んでいた。

ユミとミクは、オレンジジュースを飲みながら、焼き椎茸を食べ始めた。

「わ〜、この椎茸、ボリウムがあって、とっても美味しいわ〜。」

「ほんと、とっても美味しいわ〜。」

二人は満足そうに食べていた。

ミクは、火鉢の横で、アユ婆ちゃんの近くで食べていた。

「これ、電気なんですか?」

神主が答えた。

「そうだよ。遠赤外線ヒーターって言って、炭火と同じように、焼けるんだよ。」

「便利ですわ〜。」

神主は、タコとワカメとキュウリの酢の物を食べていた。ユミに、

大地震と大津波のことを訪ねてきた。

ユミは、今までのことや、ユーフォーや宇宙人のこと、アンダルシアのことを話した。

「こうやって、コンドルのアンダルシア君も来てることだから、きっと宇宙人もいるんだろうね。」

夕食会は、いろんな話して盛り上がっていた。

アンダルシアが、得意のアンデスの祭りという歌を歌いだした。

太鼓を鳴らし ケーナを吹いて 行列が行く 緑の谷へ

真っ赤な仮面 きれいなポンチョ 大きな帽子 ゆらゆらゆれる

ほらほら踊れ 今日は祭り アンデスの春

ほらほら踊れ 今日は祭り アンデスの春

ララララ ラーラ ラーラ ラーラ ララララ ラーラ

ポールシフト

「あなた、今頃ユミとミクは何してるんでしょうね？」

「何してるんだろぅな〜。」

「きつと、美味しいものを食べているんでしょうね〜。」

「そうだな…」

「向こうの人、きつといい人なんでしょうね〜。」

「ユミが、いい人って言ってたよ。」

「どんな方なんでしょうね〜。」

「一度、会ってみたいな。」

「そうですね。」

二人は、夕食の後、神社に来て、本殿の階段に座って、懐中電灯を持ちながら月を見ていた。

「昨日の夕方、ここで宇宙人を見たって言ってたよ。」

「ここですか？」

「ああ、ここで。ユミやミクよりも小さい宇宙人だって言ってたよ。」

「ほんとですか？」

「ほんとなんだろぅ。僕は信じてるよ。」

「最近、不思議なことが多いですね〜。」

「大地震の日からね。」

「何かの前ぶれでしょうかね〜？」

「そうかも知れんな？」

「地軸移動とか？」

「ちじく移動？何だいそりゃあ？」

「週刊誌で見たんですよ。なんでも、地球の磁界は北が一年に約六十四キロ東へ向かって移動しているんですって。」

「六十四キロも！？」

「大地震は、この磁界移動が原因らしいんですって。地軸が変わっ

て、地球のマグマが移動して大地震が起きるんですって。」

「ほ～～～う、それは初めて聞く説だな。」

「数万年の頻度でN極とS極が反転しているですって。」

「そうなのかよ!？」

科学に詳しい奥さんであった。

「ポールシフトって言うんですって。」

「ポールシフトね～～。」

「もし、日本がN極でブラジルがS極になったら、どうなるんだい?」

「分からないけど、どちらも氷の世界になるんじゃないのかしら?」

「とんでもないことだ～～。」

「そうになったら、軸の中心だから、春夏秋冬、朝昼晩もなくなるわ。」

「

「その前に、気候変動で、人間は死ぬじゃないか?」

「そうだね。」

余震が起きた。震度五くらいだった。

「きゃ～～～～!」

「地震だ!」

二人は、半壊している神社から走って離れた。

ミクの巣箱の上にぶらさげであるソーラーランタンが、揺れながらも巣箱を照らしていた。

巨大地震地軸移動説

「わ～～、地震だ～～！」

「きゃ～～！」

若井家族は、バンガローの外に急いで出た。まだ激しく揺れていた。龍次父さんは命じた。「建物から離れろ！」

隣のバンガローからも、みんな出てきた。龍次父さんだけが、懐中電灯を持っていた。

その他の明かりは、テーブルの上に常に置いてある、ソーラーランタンだけだった。

揺れは一分くらいでおさまった。

「あなた、怖かったわ～～、死ぬかと思ったわ。まだ心臓がドキドキしてるわ。」

幸子は泣き出した。「わ～～ん、怖かったよ～～！」

突然、ユーフォーが光り輝きながら、急接近して来た。

一男は、一番先に気がついた。「わ～～、ユーフォーだ！」

上空で止った。

「われわれはナロン星人です。大丈夫でしたか？」

みんなは手を振った。

「大丈夫だよ～～！」

「それは良かった。助けようと思って来たのですが、その必要はないようですね。」

「大丈夫だよ～～！」

「地球の地軸が激しく動いています。今後も気をつけてください。」ユーフォーは去って行った。

龍次父さんは、一男を見ていた。

「今、地球の地軸が激しく動いてる、とか言ってたな？」

「言ってた、言ってた。」

「そんなことがあるのか？」

森本も尋ねて来た。

「地球の地軸が激しく動いてる、って言ってましたね〜。」

「はい、確かに言っていました。」

バンガローは、何の損傷もなく、毅然として建っていた。

「このバンガロー、強いなあ〜。」森本はバンガローを褒めていた。

「少し様子を見ましょう。」

みんなは、明りのついてるテーブルに向かった。

神主と奥さんが、小走りで行って来た。

「みなさん、大丈夫でしたか〜？」「大丈夫でした〜？」

みんなは口々に「大丈夫です。」「大丈夫です。」と答えた。

奥さんが言った。

「地球の地軸が移動してるんだそうです。それで地球のマグマが移動して大地震が起きてるんだそうです。」

龍次父さんは改めて驚いた。

「そうなんだ〜。今、ユーフォーがやって来て同じことを言っていましたよ。その情報はどこで？」

「週刊誌です。なんでも、地球のN極は、一年に約六十四キロ東へ向かって移動しているんだそうです。」

「約六十四キロ、そんなに！」

神主は、みんなの顔を見ていた。

「みなさん、温かいコーヒー、飲みます？」

みんなは「はい。」と返事した。

神主と奥さんは、管理小屋に駆けて行った。少し肌寒い風が吹いていた。

マグマは地球の太陽

ユミは神主に尋ねた。

「ちよつと、テレビを見てもいいですか？」

「いいよ。」

テレビをつけると、地震のニュースが流れていた。

「あつ、また関東地方で地震だわ！」

「マグニチュード六、震度五強かゝゝ、けつこつ強いなゝゝ。」

尚、地球科学学会によると、最近の各国の大地震の原因は、地球の地軸移動が関係している可能性があるという見解が発表されました。

「地球の地軸移動？そんなことがあるのか？」

ミクが神主に尋ねた。

「地球の地軸移動つて、何ですか？」

「つまり、地球にはN極とS極つてあるでしょう。南がSで北がN。」

「磁石のことですか？」

「そうそう、磁石のこと。それが移動するんだよ。」

「移動したら、地震になるんですか？」

「移動するとね、地球にはマグマという溶けた岩石があつて、それが移動すると大地を揺さぶるんだよ。」

「それは怖いですねゝゝ。」

「そういうことだろう、つてことで、まだ分かつてはいないんだよ。」

「マグマつて、溶岩のことですか？」

「まあそうだけど、地球の中のマグマは、それよりも、ずっとずっと熱くて溶けているんだよ。」

「どのくらい熱いんですか？」

「約六千度って、学校で習ったな〜。マグマは地球の太陽って言うてね、太陽の温度と同じなんだよ。」

「うわ〜、それは大変だわ！みんな溶けて消えちゃうわ！」

科学には、チンプンカンのミクであつた。

ユミは心配そうな顔つきで、ニュースを見ていた。

「狸山、大丈夫かしら？」

「あの巨大地震でも大丈夫だったんだろう？」

「はい。」

「じゃあ、大丈夫だよ。」

ユミは決めた。

「明日までいようと思ってたんですが、明日帰ります。」

「…それがいいかも知れないね。」

「近いうちに。また遊びに来ます。」

「必ずね。」

「はい、必ず。」

「そのときは、電話してね。」

「はい、電話します。」

アユ婆ちゃんとミクは懐かしそうに、あやとりを始めた。アンダルシアは、酒に酔って、もう寝ていた。神主が毛布をかけてやった。次の日の朝がやって来た。六時だった。

ミクは、恨めしそうに神社の本殿の床下を見ていた。ユミが尋ねた。

「どうしたの、ミク？」

「いじめっ子がいなくなるときに、大きくなって、花を取りに行くの。そして、ここの床下持って来て、小さくなって花の蜜を必死で吸うの。毎日、生きるのに必死だったわ。床下は、知らない動物たちがやって来て、とっても怖かったわ。」

それを聞いて、ユミは胸が切なくなった。それ以上の言葉が出なくなった。

アンダルシアは、狸山に向かって飛び立って行った。いつまでも、

神主とアコ婆ちゃんが手を振っていた。

御土産

神主と奥さんは、神社の前の階段に座り、ユミとミクを待っていた。
「今日は、いい天気だな〜。」

「そうですね〜。」

「ユミたち遅いな〜？」

奥さんが指差した。

「あつ、あれ！アンダルシアです！」

アンダルシアだった。彼は、いつものように、神社の前に上手に着地した。

ユミとミクは、飛び降りると、大きくなった。

「ただいま〜！」「ただいま〜！」

ユミは神主に、ミクは奥さんに抱きついた。アンダルシアは近くの木に抱きついた。

「アンダルシア、どうして木なんかに抱きついてるんだい？」

「いや、ちよつと寂しかったもんで。」

「君に何かをあげようと思っていたんだが、何もないんだよ。ごめん！」

「いいんですよ、いいですよ。」

ユミは、アンダルシアの首に巻かれている、アユ婆ちゃんが作ったビニール袋のバッグを取ると、中からメンチカツを三枚取り出した。

「はい、アンダルシア。昨日の残りよ。」

アンダルシアは三口で食べた。

「あ〜〜〜、おいしかった！」

昨夜の地震で、神社の傾きがひどくなっていた。

「おいらの巣が心配になつてきたんで、帰るね。バイバイ！」

飛び去った。

ユミが尋ねた。

「昨夜の地震、大丈夫でした？」

「ああ、大丈夫だったよ。宇宙人がやって来てね。確か、ナロン星人とか言ってたな。」

「ナロン星人？」

「無事だと分かると、去って行つたよ。」

「わたしたちが見た宇宙人は、ホイホイ星人と言っていました。」

「じゃあ、違う宇宙人だったんだな。向こうは、どうだった？」

「みなさん、とっても元気でした。」

「それは良かった。」

「神主さんと奥さんに、田舎豆腐を買って来ました。これ、堅くて、とっても美味しいんですよ。」

「田舎豆腐？」

「とにかく食べてみてください。」

二丁手渡した。

「お金が足りなかったもので、これだけしか。」

「いいよ、いいよ。ありがとう！」

神主は、豆腐を睨んでいた。

「これ、どうやったら、一番おいしいんだい？」

「そのままでも、湯豆腐でも美味しいです。」

「ユミちゃんが、せっかく買ってきてくれた御土産だ。早速、管理小屋に戻って食べるか！」

「はい。」

二人は、管理小屋に戻って行つた。

ミクは、遠くの富士山を見ていた。

「どうしたの、ミクちゃん？」

「うつん、何でもない。」

「中国産の椎茸、おいしかったわね。」。

「とっても、美味しかったわ！」

「後で、アンダルシアと、どこかに買いに行きましょうか？」

「行きましょう、行きましょう！」

空は晴れていた。カラスたちが二人を迎え、カーカーと鳴いて

いた。

こんばんわ

キャンプ場の夕食は、中国産の椎茸と、アメリカ軍からいただいた大きなハムだった。

バーベキューコンロで、椎茸やハムを焼きながら、ご飯を食べていた。味噌汁がついていた。

森本が神主に尋ねた。

「この椎茸、どうしたんですか？」

「アンダルシア君に頼んだんですよ。」

「でも、彼は直接に人と接することはできないのでは？」

「遠くの町にいる友人に携帯電話で頼んでいるんです。買い物したら、アンダルシアの買い物袋に入れてくれて。」

「な〜々〜るほど。それにしても、あのコンドルは大したもんだな〜。」

「でも、友人の町でも、物が不足してるとか言っていました。」

「そうなんですか。このままじゃあ、まずいですね〜、まったく政府は何をしているのかな〜？」

携帯電話は、かかるところもあったが、まだかからないところが多かった。

七時を過ぎていた。日は既に落ちて暗かった。キャンファイヤーの火がみんなを守るように燃えていた。

東京の国会議事堂は崩壊し、既に行政府は京都に移っていた。

森本は、うまそうに椎茸を食べていた。

「こんなに椎茸が旨いなんて、今まで知らなかった。」

龍次父さんも、同じように旨そうに食べていた。

「国会議事堂あたりが、一番揺れが大きかったんですってねえ？」

「そうらしいですね〜。」

「震度七とか？」

「そうらしいです。」

「これは、自然界のテロですね。」
「自然界のテロ。なるほど、なるほど！」

その頃、ユミとミクは神社の横の大きな桜の木の下で、仲良く座りながら星空を見ていた。月も見えていた。

大きなイチヨウの木近くの常夜灯には電気はなく、ミクの巣箱のソーラーランタンの明かりのだけが光っていた。

大きな桜の木の下で、二人は椎茸を食べた後だった。

「椎茸も美味しかったけど、田舎豆腐もよかったね〜。」

「久しぶりに食べたけど、美味しかったわ〜。」

「また行きましょう。」

「また行きましょう。」

「寒くなってきたから、小さくなって寝ましょう。」

「うん。」

二人は小さくなって、ミクの巣箱で寝た。

「やっぱり、この巣箱、落ちつくわ〜。」

「そうね。」

「アユちゃん、あんなに年寄りになっちゃって…」

「びつくりした？」

「うん。でも、もう死んでると思ってたから、嬉しかった。」

「逢えて良かったね〜。」

「うん。」

「ときどき、屋根裏の夢を見るの。」

「屋根裏は怖くなかったの？」

「屋根裏のネズミさんとは、友達だったので、ちっとも怖くなかったわ。」

「いいネズミさんだったんだ。」

「うん。穴熊さんもいて、蛇が入って来たら鋭い爪で追い払ってくれるの。」

「それは良かったね。」

「穴熊さんは、寒くなったら、いつも温めてくれたわ。」

「カラスは？」

「神社のカラスは、わたしをいつも守ってくれたわ。」

カラスが警戒の鳴き声で騒いでいた。

「何かしら？」「何だろうね？」

外から声がした。

「こんばんわ。」

二人は、びっくりした。ユミが雑巾のドアを持ち上げて開いた。この前のホイホイ星人が、宙に浮いて立っていた。

瓦礫場泥棒

「もう、お休みですか？まだ七時ですが？」

「この前の、ホイホイ星人さん！確か、名前は…そうだ思い出した、ゾルビさん！」

「そうです、ゾルビです。覚えていてくれまして、光栄のいたりです。」

「何か、御用ですか？」

「うちの隊長が地球の風邪を引きまして、高熱を出して困っているんです。何か、いい」薬を持っていませんか？」

「宇宙人さんは、薬はないの？」

「ホイホイ星の薬では、地球のウイルスには効かならしくって困っているんです。」

「妖精の薬ならありますよ。でも妖精にしか効かないかも？」

「何でもいいです。ひよつとすると効くかも知れません。それありますか？」

「ありますよ、ちよつと待ってね。」

ユミは、巣箱の隅にあつた、マイズルソウを取って渡した。

「この実を食べるか、葉を煎じて飲んでください。」

「せんじて？」

「そのくらい、辞書で調べてよ。」

「はい。これ全部、いいんですか？」

「いいわ。」

「どうもありがとうございます！この恩返しは必ずします！」

「そんなものは、いりません。」

ゾルビは去って行った。

下界から、サイレンの音が聞こえてきた。

「何だろっ、ミク？」

「見に行きましょうか？」

「うん！」

二人は、イチヨウの木に、瞬間移動した。神社の前には、ホイホイ星人の円盤が着陸していた。

下界では、パトカーと逃走車が物凄いスピードで走っていた。

最近、瓦礫の町は、道路上の瓦礫だけは撤去され、自動車は走れるようになっていた。その代わり、その道を利用して、瓦礫の町から貴重な財産を盗む者がでてきた。瓦礫場泥棒である。

「また、泥棒だわ！」

「人の災難につけこむなんて、ひどい泥棒だわ！」

「泥棒のルールに反する行為だわ！」

「盗み合って助け合うの精神に反する行為だわ！」

ミクは、鬼妖精になることを恐れていた。だから、盗み合って助け合わない泥棒は決してしなかった。

ゾルビが、円盤から出てきた。

「ほらね、人間って、こういう動物なんです。油断すると、平気で悪いことをする。」

ユミが反論した。

「だって、あなたたちが人間を造ったんでしょう？あなたたちにも責任があるわ。」

「まあ、そうだけどね。」

「じゃあ、何とかしてよ。」

「何を？」

「人間の根性をなおしてよ！」

「それは無理だよ。こんなに多くては、どうしようもないよ。」

「無責任ね〜。」

「半分は神様の責任なんだよ。」

「どうして？」

「地球にいた猿を改造したのが間違だったんだよ。」

「人間は、もともとは猿ってこと？」

「そうなんだ。だから、猿の性質が残っているんだよ。」

「そうだったんだ…」

二人は、あちこちで走り回る、パトカーと逃走車を、いつまでも見ていた。

「面白いわね……。」

「面白いね……。」

「頑張れ、パトカー……！」「頑張れ、泥棒……！」

ゾルビは二人を見ていた。

「君たちは、実に面白い！もう帰る。どうもありがとう！」

「もう帰るんですか？」

「もう帰ります。」

ゾルビは、円盤に向かった。

ユミとミクは、円盤を近くで見たくなって、近くに瞬間移動した。

ゾルビはドアを開け、入ろうとしていた。

「飛び立ちます。危ないから離れてください。」

ユミは頼んだ。「ちよつとだけ触らせて。」

「じゃあ、ちよつとだけですよ。」

「いい感触だわ。」

二人は、いつまでも触っていた。

「これ何でできてるんですか？」

「ホイホイ星の特殊合金です。」

ユミが太鼓のように手で叩きだした。

「いい音だわ……、ミクもやってみて。」

「ほんとだ……！」

ポンポコポンポコと叩きだした。

「はい、そこまで！」

いつまでも叩いていた。

「そこまでって、言ってるのが分からないの！」

ゾルビは怒っていた。

「危ないから、どいて、どいて！」

二人は、ゾルビの剣幕に驚いて遠退いた。

「な~~~~に、あの人！」

「急に怒っちゃって！」

円盤は、飛び去って行った。「ケチ！」「ケチんぼ！」

二人は、怒りん坊のホイホイ星人の歌を歌いだした。

怒りん坊の ホイホイ星人 怒りん坊の ホイホイ星人♪

そんなに怒って何をする そんなに怒って何とする♪

ほいほいほ~~~~いの ホイホイ星人 ♪ あんたは宇宙一の怒りん坊

満月

ユミとミクは、大きな桜の木の下に座って、星空を見ていた。

「ミクが生まれる前は、わたし、独りぼっちで、とっても寂しかったわ。」

「そうだったの。」

「小雨の日は、とっても寂しくなって、一人で傘をさして、神社の周りを歩き回るの。」

「どうして？」

「雨の中を歩いていると、屋久島を思い出すの。」

「そうなんだ……」

「寂しいときには、いつも、ほいほいほいのよいよい、の歌を歌うの。」

「どんな歌？」

ほいほいほいのよいよい……い♪

ひとりぼっちのユリの花♪ ゆらゆらゆらゆら 風に揺れてる

ユリの花♪

ぽつかぽかの～お日様だけが～ ユリの友達 ユリの花♪

気持ちよく～ 風に揺れてる ユリの花♪

綺麗に咲いてるユリの花♪ 野原を綺麗に見せるため～ 今

日も元気に咲きましょう♪

ミクは手を叩いて喜んだ。

「とってもいい歌だわ～。誰が作ったの？」

「わたしが作ったの。」

「ユミちゃんは、作詞家の才能があるわ。」

「そうかな……？」

空を見ると、満月だった。

「見て、ミク。満月だわ。」

「ほんとだ。綺麗ね〜。」

「屋久島にいるときも、よく神社の屋根から、こうやって満月を見ていたわ。」

「わたしも見ていたわ。やっぱり神社の屋根から。」

「同じね。」

「同じだわ。」

「満月の日には、いつも神主さんが、ぼた餅を持ってきてくれるの。とってもおいしかったわ。」

「わたしも同じ。」

神主の奥さんがやって来た。

「こんなところにいたの。」

「はい、満月を見ていました。」

「綺麗な、お月様ですね〜。」

「おはぎを作ったわ、食べて。一個づつしかないんだ。ごめんね。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

その頃、若井家族は、キャンプファイヤーの前で、立膝で座って星空を見ていた。

「あなた、満月だわ。」

「中秋の名月ちゅうしゅうめいづってやつだな。」

神主がやって来た。

「みなさん、家内が作ったおはぎです。食べてください。」

幸子は喜んだ。

「わ〜い、おはぎだ〜！」

それは、小さな美味しさだったが、大きな喜びを与えていた。

伝言板

夕食前だった。ユミとミクは大きなイチヨウの木の上で、瓦礫の街を疾走する、パトカーと泥棒の逃走車を見ていた。

「頑張れ～～パトカー～～！」「頑張れ～～泥棒～～！」

ホイホイ星人の円盤がやって来て、神社の前に着陸した。中から、ゾルビが出て来た。

「やあ君たち、こんにちわ。」

二人は、簡単に挨拶した。「こんにちわ！」「こんにちわ！」

「この前は、どうもありがとう。おかげさまで、隊長の熱も下がり、すっかり元気になりました。」

「それは良かったですね～～。」「良かったですね～～。」「

あの薬草、凄いですね～～。どこにあるんですか？」

ユミが答えた。

「高い山だったら、どこにでもありますよ。」

「富士山とかですか？」

「はい、そうです。」

「今日は、お礼に来ました。あなたたちを、是非、晩餐会にお誘いしろという命令で。」

「ばんさんかいつて？」

「まあ、ちよつと豪華な夕食って感じのものです。」

「え～～え、じゃあ夕食をこちそうしてくれるんですか？」

「はい。」

「じゃあ、行きます、行きます！ねっ、ミク？」

「どこへでも、行きますわ～～！」

「じゃあ、一緒に行きましょう。この円盤に乗って。」

「え～～、その円盤に乗れるの～～！？」

「はい。」

二人は、木から降りた。円盤の前に行った。

「これに乗せてもらえるの？」

「どこまで行くんですか？」

「アンデスです。アンデスの秘密基地です。」

「え〜〜〜〜！？」

「遠いんですか？」

「地理的には遠いですが、この円盤だと、三分くらいで着きます。」

「え〜〜〜〜、三分で！？」

「そんなに早いんですか？まるでインスタントラーメンみたいだね。」

「

「さあ、乗ってください。」

「じゃあ、終わったら、すぐに帰ってこれるんですね？」

「はい、すぐに帰ってこれます。ご心配なく！」

「ちよつと待って、伝言してくるから。」

ユミは、ミクの巣箱の横に掛けてある伝言板に向かった。

伝言板は、磁石付きのホワイトボードでペンが磁石でくっついていた。

ほいほいせいじんのばんさんかいにいつてきます。「これで、よし！つと。」

ユミは急いで戻って行った。

「じゃあ乗るわ、行こう、ミク！」

「うん！」

二人は乗り込んだ。円盤は外からは窓などとは無かったが、中に入ると窓だらけだった。

「わ〜〜〜、よく見えるわ、この窓！」

二人は、円盤の中を、きよろきよろ見ていた。前の座席には、運転しているホイホイ星人が二人いた。

左側の窓際に二人がけの椅子があった。

「どうぞ、お座りください。」

二人は黙って座った。

ゾルビは、二人にアンデスの乙女という黄色い花をプレゼントした。

「これ、アンデスの花です。」

「わくく可愛い、お花！」

「いい匂いだわくく！」

間もなく、円盤は音も無く離陸した。

円盤は、成層圈に入ると急加速し、アンデス山脈上空で減速すると、対流圏に入って行った。

「もうすぐです。」

オアシス

アンデス山脈はベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、アルゼンチン、チリの七カ国にまたがっている山脈で、最高峰はアコンカグア六千九百六十メートルで、六千を超える山が二十以上聳え立っていた。

新生代第三紀末から現在までの太平洋プレート、ナスカプレートと南米大陸のぶつかり合いで隆起してできたと考えられている。

円盤は、ナスカの地上絵の上空を飛んでいた。それは、ペルーのナスカ川とインヘニオ川に囲まれた乾燥した盆地状の高原にあった。ナスカの地上絵が立地する場所は、ペルー南海岸地方の北から南へ走る丘陵と東方のアンデス山脈の麓との間にあるパンパ^{II}コロラダ、パンパ^{II}インヘニオと呼ばれる細長い盆地であった。

それは、首都リマの南四百キロ、太平洋岸から五十キロ、海拔五百メートルの乾燥した大平原にの不毛の約四百五十平方メートルにわたる広範囲にあった。

ユミとミクは、左側の大きな窓から、地上を見ていた。

「わくく、何あれ!？」

「大きな絵だわ!？」

「誰が描いたのかしら？」

「きつと、大きな巨人が描いたんだわ!」

ゾルビがやって来た。

「あれは、ナスカの地上絵と言って、われわれの先祖が原住民に食料と交換に描かせたものです。」

「凄い大きさだわ!」

「どうやって描いたんだろうね?」

「われわれの先祖が、レーザー光線で導いて描かせたものです。」

「大したもんだわくく!」

「何のために描いたんですか?」

「われわれを、大きな宇宙から導くためです。」

「つてことは、ここに何かがあるってことですか？」

「はい、この近くに、われわれの秘密基地があります。」

円盤は、ナスカの地上絵を通り過ぎると、砂漠地帯に入った。

「この砂漠を抜けると大きな山があります。そこに基地はあります。」

「わたしたちに教えてもいいんですか？」

「あなたたちは、人間ではなくって妖精ですから。」

ゾルビは、妖精を信じてるみたいだった。

「じゃあ、念の為に、窓を消します。」

「え〜〜、窓を消しちゃうの〜〜！？」

「見えなくなっちゃうの〜〜！？」

ゾルビは隊員に命じた。

「ゾルビ円盤長、故障です！」

「何！？」

円盤は、砂漠に落ちて行った。

「きゃあ〜〜〜！」「きゃ〜〜〜あー！」

幸い、安全ベルトをしていたので、二人は天井に激突しないで無事だった。

二人は、本気で死ぬことを思った。

ゾルビは微笑みながら、二人に「大丈夫、大丈夫！」と言っていた。危うく、地上すれすれで安全装置が働き、不時着できた。

そこは、小さな野球場くらいのオアシスだった。

二人の隊員は、装置を点検していた。

「どこが悪いんだ？」

「ちょっと待ってください。」

二人は必死で点検していた。

「どのくらいかかる？」

「分かりません。」

「一時間はかかると思います。」

ゾルビは、円盤のドアを開けた。風は無かった。

「君たちも、外に出る？」

「はい。」「はい。」

「また故障か、いやになっちゃうな〜。」

「よくあるんですか？」

「はい、よくあります。いつもこうやって不時着するんです。」

「もし、海の上だったら？」

「大丈夫です。これ浮きますから。」

三人は出て行った。

「オアシスだ！」

オアシスとは、砂漠やステップといった乾燥地域において、淡水が存在する場所であった。

水が湧き出て、椰子の木や乾燥に強い木々が生い茂っていた。

ゾルビは、憂鬱な目をしていたが、ユミとミクは喜んでいた。

「わ〜〜、素敵なところだわ〜！」

「わ〜〜、綺麗なところだわ〜！」

アンデスおろしの冷たい風

オアシスの真ん中には池があった。中心から水が湧き出ていた。

「ミク、大きくなって、あそこまで駆けっこしよう!」

「うん!」

二人は大きくなった。

ゾルビは、びつくりして後退った。

「危ないな〜、踏み潰さないでよ!」

「ごめん、ごめん!」

「ごめんなさい!」

ゾルビは、円盤の中に入って行っ

た。ドアから二人を見ていた。

池の水は浅かった。深い中心でも五十センチ程度だった。水は澄んでいて綺麗だった。

「ミク、この水、美味しいわ〜!」

「ほんとだ、美味しいね〜!」

「どこから来てるのかしら?」

山が見えていた。

「きつと、あの山だわ。」

「そうだね。」

近くに、石と木で造られた家があった。誰も住んでいない感じだった。

「ミク、あの家に行ってみよう!」

「うん!」

家は砂だらけだった。

「これじゃあ、人は住めないわね。」

「そうだね...」

ミクは、なぜか寂しい目をしていた。

「どうしたの、ミク?」

「うっん、昔は人が住んでいたんだろうな〜って思うと、なんだか悲しくなってる。」

「ミクって、おセンチねえ。」

色んな生活用品が、砂に埋まっていた。ユミは砂を取った。砂は、さらさらしていた。

「やっぱり、砂漠の砂は、海辺の砂とは違うわね〜。」

ミクも取った。「ほんとだ。ぜんぜん違うわ。」

ゾルビからテレパシーが聞こえてきた。

「そういうところには、サソリや毒蛇が出るから、気をつけろよ！」
二人は、びっくりした。

「え〜、サソリ〜！」

「毒蛇〜！」

二人は、円盤に向かって駆け出した。円盤の前まで行くと、小さくなつて円盤の中に入つて行つた。

「早く、ドアを閉めないで、サソリや蛇がやって来るわ！」

「大丈夫だよ、光線銃があるから。」

「そんなんじゃないや駄目よ、早く閉めて閉めて！」

ゾルビは、ドアを閉めた。

「あ〜、これで安心だわ！」

「怖かつたわ〜！」

「君たち、臆病なんだね〜。」

「誰だつて怖いわよ！」

「あなただつて同じよ！」

「まあ、そうだけどね。」

「いつになったら直るの？」

「今日中には直るって言ってるけど、分からないな〜。」

窓から見えている砂漠とオアシスの対比的風景は、とても綺麗だった。

「幻想的だわ〜。」

「不思議な景色だわ〜。」

「でも、外は暑かったわ!」

「何度くらいあるんですか?」

「今日は、あまり暑くなくって、四十二度です。普段だと、五十度近くになります。」

「わゝゝ、焼け死んじゃうわ!」

「大変なところだわゝゝ!」

「逆に、夜はアンデスおろしの冷たい風が吹いて、マイナスの温度になります。」

「わゝゝゝあ、それは大変だわ!」

「この円盤、エアコン大丈夫ですか?」

「エアコンは、なんとか動くそうです。」

「良かったゝゝ!」

「エアコンがないと死にますね!」
夜になった。

「まだ直らないんですか?」「まだなんですか?」

「このぶんだと、明日になりそうだな…」

二人の隊員は、一所懸命に頑張っていた。

「代わりの円盤を呼べないんですか?」

「それがね、通信機器も駄目なんだって。」

「それは困りましたねゝゝ。」

ユミとミクは、窓辺に座り、窓から星空を見ていた。

「綺麗な星空だわゝゝ。」

「きらきらと、まるで宝石みたいだわ。」

すっかりロマンチックな気分になっていた。

風が強くなってきた。円盤が揺れた。

「大丈夫ですか、この円盤?」「きゃゝゝ!」

「大丈夫です。木にしっかりと繋いでありますから。」

ときどき炊飯器ほどの小さな円盤は風に揺れていた。

ゾルビは劣等生

「なんだか、この円盤、風で倒れそうだわ。大丈夫かしら？」

ゾルビは、右の窓際の席に座っていた。

「大丈夫です。二カ所に繋いでありますから。」

「なんだか怖いわ。」

「用心のために、安全ベルトはしててください。」

「はい。」「はい。」

「われわれの大きさだと、たとえ横転しても、さほどの衝撃はありません。体重が少ないですから。」

それを聞いて、ユミとミクは安心した。

ユミはゾルビを見ていた。

「早く、風が止むといいですね。」

「そうですね。」

「わたし、眠くなって来たわ。」

ゾルビは、椅子の安全ベルトを外して起き上がった。やって来た。

「このレバーを引くと、ベッドになるんです。」

足元まであった椅子は、倒れてベッドになった。

「わ~~~~、気持ちいいわ~~~~！」

「ミクさんも、ベッドにします？」

「はい、お願いします。」

ミクの椅子もベッドになった。

「わ~~~~、楽ちんだわ~~~~。」

ゾルビは戻って行った。

二人は、アンデスの乙女という花の蜜を吸ったばかりだった。

「アンデスの乙女、さっぱりしていて美味しかったわ~~~~。」

「とっても爽やかで、美味しかったわ。」

「じゃあ、もう少し持ってくれば良かったな~~~~。」

「池の近くに小さな青い花があったんですけど？」

「あゝ、あれはアスリージョの花です。」

「アスリージョ？」

「青い花という意味です。青い花というのは珍しいでしょう。」

「はい、とつても。」

ゾルビは、寝ながら星空を見ていた。

「あつ、仲間の円盤だ！」

上空をホイホイ星人の円盤が通過して行った。

「いい円盤だなゝゝ、早く、ああいう円盤に乗りたいなゝゝ。」

ユミは聞いていた。

「どういう意味ですか？」

「いやね、僕は劣等生だから、最低の円盤しか与えてもらえないんですよ。」

「こういう故障する円盤ですか？」

「はい、そうです。」

「なゝゝんだ、そういうことだったんですか。」

「はい。」

「じゃあ、もう少し頑張らないといけませんね。」

「はい。でも、僕はコンドルと一緒にアンデスの山々を飛び回ってるほうが好きなんです。」

「コンドルと一緒に？」

「はい、一緒に飛んでると、彼らテレパシーで話しかけてくるんですよ。どうだい今日の奥さんの機嫌は、とか。」

「それは、おもしろそうですね。」

「今はいなくなっちゃったけど、アンデスの祭りという歌の上手いコンドルがいますね。死んじゃったのかなゝゝ？」

ゾルビは、懐かしそうにアンデスの祭りという歌を歌いだした。

太鼓を鳴らし ケーナを吹いて 行列が行く 緑の谷へ

真っ赤な仮面 きれいなポンチョ 大きな帽子 ゆらゆらゆれる
ほらほら踊れ 今日は祭り アンデスの春

ほらほら踊れ 今日祭り アンデスの春

ララララ ラーラ ラーラ ラーラ ララララ ラ ラー

ユミは、びっくりした。

「その歌、知ってます!」

「えっ?」

「アンダルシアの十八番の歌です。」

「君、アンダルシアを知ってるの!?」

「はい!」

「彼、今どこにいるの?」

「日本の狸山にいます。」

「えっ、そうなの!?」

ゾルビは非常に驚いていたが、彼の目は喜んでいた。

「今度、狸山に行ったら、どこにいるか教えてくれない?」

「分かりました!」

修羅場

狸山では、神主と奥さんが、ユミとミクの帰りを神社の前の階段に座って待っていた。

「あなた、もう十時ですよ。冷えて来たし、もう戻りましょう?。」

「もう少し待ってみるよ……」

「わたし、もう帰りますよ。」

「ああ、いいよ。お休み。」

「小屋で、温かい飲み物を用意して待ってます。」

「コーヒーでいいよ。」

「はい。」

奥さんは管理小屋に戻って行った。

「ほいほいせいじんのばんさんかいにいつてきます、か……」

神主は、伝言板に書かれてあった文字を、幾度となく口ずさんでいた。

「どこに行つたのかな……?」

神主は、日本のどこかと思っていた。

下界を見ると、パトカーと泥棒の鬼ごっこが続いていた。

「人の弱みにつけこんで、まったくひどい泥棒だ……。日本も終わりだな……」

暇なので、しばらく見ていた。

奥さんが帰って来た。

「あなた、コーヒー持って来たわ。」

奥さんは、ポットとレジ袋を持っていた。

「ありがとう!」

レジ袋には、コーヒークップが入っていて、それに注いだ。

「ちよつと甘かったかしら?」

神主は、一口飲んだ。

「いや、ちようどいいよ。」

奥さんは、再び神主の隣に座った。レジ袋から、もう一つコーヒークップを取り出した。

「わたしも、いただくわ。」

仲良く飲み始めた。

森本が懐中電灯を持ってやって来た。

「こんばんわ。」

「やゝ森本さん。どうしたんですか、こんな時間に？」

「ちよつと眠れなくて。」

「コーヒーでも飲みませんか？」

「あるんですか？あるんだったら、是非。」

「あつ、そうか。コーヒークップが無かったなゝ。」

「神社の台所に、まだあるはずです。わたし取って来ます。」

「うん、じゃあ頼む。」

奥さんは、懐中電灯を持って、小走りで神社の裏に向かった。裏からのほうが早かった。

「わたしも行きます！」森本は駆け出した。

二人は、ゆつくりと歩きながら戻って来た。森本は手に紙コップを持っていた。

「ありました、ありました！」

「それは良かった！」

「大きな木の巣箱の上に、ソーラーランタンがぶらさがっているんですけど、あれ何なんですか？」

「あゝゝゝ、あれは常夜灯の代わりです。」

「あゝゝゝ、なるほど。あれでけっこう明るいですね。」

「あるとないとは、ぜんぜん違いますよ。」

「それは、実感しています。」

「せめて、電気だけでも回復すればいいんですけどねゝ。」

三人は、暇なので、温かいコーヒーを飲みながら下界の鬼ごっこを見ていた。森本だけが立って見ていた。

「いつになったら、この馬鹿騒ぎは終わるんですかねゝ？」

「さ〜あ、わたしには分かりません。」

「とうぶん続くんじゃないんですか。」

「いやな世界になったもんですね〜。」

「その後、会社からは？」

「この前、待機して待ての連絡があつたきりで、何の連絡もありません。いったいどうなるんでしょうかね〜？」

「どこもこれも、修羅場つてやつですね。」

「修羅場か〜。ところで、修羅場つて、どういう意味なんですか？」

「インドの神話で、阿修羅と帝釈天との争いが行われたとされる場所、転じて、激しい闘争の行われている場所のことを言うようになったと言われています。阿修羅とは、昔からインドにいた魔神アスラのことで、帝釈天とは、バラモン教・ヒンドゥー教・ゾロアスター教の武神です。お坊さんではないので、それ以上のことは知りません。」

森本は、感心して聞いていた。

「さすがに、神主さんだ。仏教のことも、よく御存知で。」

「大したことありません。」

修羅場の上は、風が少し強くなって来たが、三人の話しは続いていた。落ち葉が一枚、森本の顔に当たって落ちた。

チチカカ湖

早朝だった。風は治まり、砂漠の彼方に真つ赤な太陽が顔を出していた。

最初に目覚めたのは、ユミだった。

「わーーーーあ、綺麗な太陽だわーーーー！」

その声でミクも起きた。

「わーーーー、凄く美しい景色だわーーーー、こんなの初めて見たわ！生きてて良かったわーーーー。」

ゾルビもは、まだ寝ていた。二人の隊員は、まだ作業をしていた。

ユミは声をかけた。

「徹夜ですか？ご苦労さまです！」

一人の隊員が返事した。

「直りました！」

「えーーーー、ほんとに直ったの！？」

「はい、もう大丈夫です。」

ユミはゾルビに声をかけた。

「ゾルビさん、ゾルビさん。」

ゾルビは目を開けた。

「何ですか？」

「円盤、直ったんですって！」

「えっ、ほんと！？」

安全ベルトを外し、起き上がった。

「よし、じゃあ早速に出発しよう！」

円盤は、ロープを外すと飛び立った。

二人は、ベッドを椅子に戻してもらい、窓から景色を眺めていた。

「わーーーー、綺麗な景色！」

「日本にはない景色だわーーーー！」

秘密基地は、チチカカ湖の近くの山にあった。

チチカカ湖は、アンデス山中のペルー南部とボリビア西部にまたがる淡水湖で、湖の中央は、南緯約十六度、西経約六十九度で、標高は三千八百メートルほどあった。湖面の六十パーセントがペルー領で四十パーセントがボリビア領となっていた。

数少ない古代湖の一つとしても知られ、複数の河川が湖に注ぎ込んでいた。湖から流れ出すのは大きな河川ではデサグワデーロ川があった。

湖中には、チチカカ島やルーナ島、タキーレ島、アマンタニ島、太陽の島、月の島、スリキ島など41の大小の島々があった。

チチカカ湖の島々やその周辺には、ケチュア族やアイマラ族、ウル族といった、先住民系の民族が居住しており、農耕や漁業、観光などに携わって生計をたてて暮らしていた。

ペルー側プーノ市街の沖合いにはウル族と呼ばれる人々の住む浮島が多数点在していて、浮島を集めたウロス島に約七百人ほどが、観光客を相手に生計を立てている。

浮島はトトラと呼ばれる葦を三メートルの厚さに束ねたもので出来ており、かつては小舟もトトラで作っていた。

また、この湖にはチリとの戦争で海を失い、内陸国となったボリビアの海軍基地があった。

湖の面積はおよそ八千五百六十二キロ平方メートルで、約九割の大きい湖と、残りの小さい湖があった。

大きい湖は、深さ最大で二百八十五メートルあり、だいたい百五十メートル以上の深さであるが、小さい湖は、最大でも深さ四十メートルほどしかなく、ほとんどが十メートルほどの深さしかなかった。チチカカ湖盆地は、標高が高いにもかかわらず湖の影響で、比較的暖かく安定した気候を保っていた。

秘密基地は、ペルー側の山奥の深い峡谷にあった。

「もうすぐです！隊長が、あなたたちを待っています。」
その言葉に、ユミとミクは、少々緊張した。

「あの薬草のおかげで、隊長は元気になり、大変に喜んでいます。盛大なおもてなしを用意して待っています。」

ユミが質問した。

「隊長って、どんな方ですか？」

「とってもいいナイスな、ホイホイ星人かたぎの方です。」

「ホイホイ星人かたぎ？」

「逢えば分かりますよ。」

ユミの目は、寄り目になっていた。妖精は、未知の経験で不安なときには寄り目になるのだった。

意味も無く 心は揺れる 意味も無く 心は踊る ほいほいほい
のほのほい

知らんぷりの見知らぬ心よ なぜにそんなに怯えるの わたしの
心よ ほいほいほい のほのほい

秘密基地

山に囲まれた小さな盆地があった。盆地は全体が森で草地などは、まったく無かった。

円盤は、森に突入して行った。

ユミは森を見ていた。「きゅー、木にぶつかるわ！」ミクも森を見ていた。「何してるのー!?」
木にはぶつからなかった。

「あれっ!?」「どうしたの?」

ゾルビは微笑んでいた。「あれは、森の立体映像です。カモフラージュの森です。」

着陸場所は、背の低い草地で、所々に低木が生えていた。所々に、おしゃれな家が建っていた。

「わー、まるで、おとぎの国の世界だわー。」

ミクは無言で、目を丸くして見ていた。

「これが、ほんとうの景色です。」

ユミは、すぐに納得したが、ミクは不思議な顔をしていた。

「つまり、偽物の森ってことですか?」

「はい、その通りです。」

「じゃあ、この景色も偽物かも知れませんねえ?」

「これは本物です。」

ミクは、首を傾げながら景色を見ていた。

「本物ですって!触れば分かりますよ。」

ミクは、近くの低木を触ってみた。

「ほんとだ!」

ミクはゾルビを見て微笑んだ。

「ミクちゃん、かわゆーい!」

ゾルビの変貌ぶりに、ミクは驚いて後ずさった。

「ゾルビさんって、ロリコンなの?」

「はい。」

「気持ち悪くくい！」

ミクは、ゾルビを軽蔑した。ユミは後ろで笑いながら、家々を見ていた。

「でも、変ですな〜？」

「何が変なんですか？」

「家が、やけに大きい…」

「実は私たちの本当の大きさは、人間と同じくらいなんです。」

「えっ、嘘〜！？」「ほんと〜う！？」

「はい、妖精の皆さんみたいに、自力では大きくなった小さくなったりは出来ませんが、科学の力で小さくなっているだけなんです。本当の大きさは地球人と同じくらいなんです。」

ゾルビは、地下の通路に入って行った。

「この通路は？」

「大きい我々に間違つて踏み潰されなかったための通路です。小さくしたり、元に戻す機械のある家の部屋に向かってます。」

その家の部屋に着いた。

「ここです。ここで、大きくなって待つててください。」

ユミとミクは大きくなった。そして、機械の中に入ったゾルビを待っていた。

ゾルビは、一メートル五十センチくらいになって出てきた。

「地球人より、少し小さいですが、我々の身長は、だいたいこれくらいです。」

ユミとミクは驚いた。

「うわ〜、こんなに大きかったの！？」

ミクは「わ〜〜！〜！」と、言うだけだった。奥の方から、少し太ったホイホイ星人が出てきた。

ゾルビは、いきなり畏まった。

「隊長、只今帰りました！」

「ごくろっ、ごくろっ！途中、オアシスに不時着したんだって？」

「はい、申し訳ありません！」

「君の責任じゃないよ。あの円盤、もう駄目みたいだね？」

「はい。」

「考えとくよ。」

「ありがとうございます！」

「この子たちね、妖精のユミちゃんとミクちゃんって言うのは？」

「はい、そうであります！」

「ようこそ、ユミちゃん、そしてミクちゃん！」

隊長は、握手を求めて手を伸ばして来た。二人は、微笑みながら小さな手で握手をした。

隊長の手は、とても温かかった。「ありがとうございます、あの薬草、よく効いたよ。」

基地内見学

隊長はゾルビに命じた。

「晩餐会までには時間がある。ゾルビ、お二人に基地内を案内してくれ！」

ゾルビは敬礼した。

「かしこまりました！」

隊長は笑みをもらして、二人に優しく言った。

「じゃあ、また夕刻、お会いしましょう。」去って行った。

「じゃあ、基地内を案内いたします。ついてきてください。」

「はい。」「はい。」

三人は、仲良く出て行った。

「先ず、ここが、基地のメインストリートです。」

幅六メートルほどの青色の舗装された道が、一キロメートルほど走っていた。中央には白い線が引かれていた。

「いい道ですね。」「とっても歩きやすいわ。」

「歩きやすいように、それと水はけがいいように、火山灰を混ぜて作ってあるんです。」

「あつ、ずっと前、これに似た道路をテレビで見たわ。」

「そうですね。地球人にも頭のいい奴がいるんですね。」

「勿論、いますよ。」

「そうですね。」

道の左側には、道に沿って小さな川が流れていた。

「この水は、どこから来てるんですか？」

「各山から来ています。盆地には通り抜けの出来る峡谷が一つあって、そこに流れています。」

「けっこう広いですね。」

「どの方向にも、約一キロありますから。」

「あなたの、お住まいは？」

「山と川の間くらいの高台にあります。もしもの山崩れや水害のためです。」

「なるほど、用心深いんですね。」

「はい。」

ミクは黙って二人の話を聞いていた。

大きなトラックのような自動車が、クラクションを鳴らしながらやって来た。

三人は、道の脇に拠り、通過するのを待った。

「ほんとうは、歩行者は、ここを歩いてはいけません。この道の両側に歩道があります。」

ゾルビは歩道に向かって歩きだした。

「この道が歩道です。」

道は緑色だった。その隣には、灰色の道があった。

「この道は？」

「自転車専用道路です。」

住民が、見たこともない妙な形の自転車に乗って走っていた。妖精の二人を見て、手を振っていた。二人も軽く手を振った。

「基地内での移動は、歩くか自転車なんです。道路を走れるのは、運搬用の自動車だけです。」

「それはいいですね、安全で。」

ミクが珍しく発言した。

「とってもいいことですね。」

また、自転車がやって来た。ユミは軽く頭を下げた。自転車に乗っている住民は妙な顔をして通過して行った。

ゾルビは微笑んだ。

「日本人の習慣を知らないんですよ。」

「あつ、そうか。ここには何人住んでいるんですか？」

「二千十二人です。」「そんなに。」

ゴミを積んだ自動車が走っていた。二人は珍しそうに見ていた。

「ゴミは、分子レベルまで破壊して、土に戻します。」

ユミは納得して聞いていたが、ミクには意味が分からなかった。

そんなことよりも、ミクは目の前の素晴らしい景色を眺めていた。

「まるで、おとぎの国みたいだわ！」

「次は居住区を案内します。」

住民が住んでるところは、少し高台にあった。

「ここからが、居住区です。」

大きな建物があつて、子供たちが集まっていた。

「学校です。もうすぐ祭りがあるので、歌や踊りの練習をしているんですよ。」

太鼓を叩き、笛を吹き、練習が始まった。それは、幾度も聞いた音楽だった。

太鼓を鳴らし ケーナを吹いて 行列が行く 緑の谷へ

真つ赤な仮面 きれいなポンチョ 大きな帽子 ゆらゆらゆれる

ほらほら踊れ 今日は祭り アンデスの春

ほらほら踊れ 今日は祭り アンデスの春

ララララ ラーラ ラーラ ラーラ ララララ ラーラ

出前ロボット

お昼になろうとしていた。三人は公園にいた。ベンチがあったので、
ユミは座り込んだ。

「あ~~~~、疲れたわ!」

ミクも座り込んだ。「わたしも疲れたわ~~~~!」

ゾルビも座った。小鳥たちがさえずっていた。カラスが公園を歩いていた。

「カラスって、どこにでもいるのね。」

「狸山のカラスを思い出すわ。」

「午前中、歩きっぱなしでしたからね~~~~。」

そばに、飲料提供器があった。

「何か飲みます?」

「わたしたち、こちらのコイン持っていないんです。」

「あれは無料なんですよ。」

「え~~~~、そうなの!?」

ユミとミクは、飲料提供器に向かった。

「オレンジジュース、ブレイプジュース、コーヒー、レモンティー、

コカ茶、マテ茶、お湯か……」

ミクがゾルビに質問した。

「お湯って、ただのお湯ですか?」

「はい、そうです。」

「コカ茶って何ですか?」

「コカの葉の茶です。精神的な疲労を回復させる効果があります。」

「マテ茶って?」

「マテの葉の茶です。ビタミンやミネラルの含有量が極めて高く、
飲むサラダとも言われています。香ばしくって、とっても美味しい
ですよ。」

「じゃあ、このマテ茶にするわ。」

「わたしは、オレンジジュースでいいわ。」

紙コップに注がれ、二人に手渡した。ゾルビはコーヒーを持っていた。

「どう、マテ茶の味は？」

「とつても香ばしくつて、美味しいわ。」

「それは良かったわ。」

「もうすぐ昼食の時間です。食堂に行きますか？それとも出前にしますか？」

ユミは喜んだ。

「出前つて、ここに持って来るんですか？」

「はい。飲料提供器にある注文ボタンを押せば、ここに持って来ます。」

二人は、急いで飲料提供器に走った。ゾルビは、のろのろと歩いてやって来た。

「何にします？」

「そうですね、肉や牛乳以外だったら何でも。」

「アンデスのジャガイモとトウモロコシは、とっても美味しいんですよ。」

「じゃあ、その料理でいいわ。ミクは？」

「わたしも、それでいいわ。」

「じゃあ、ジャガイモとトウモロコシのトマト煮とかはどうでしょう？」

「それでいいわ。」

「ゾルビさんは？」

「僕は、その山羊のミルク煮と、ピラニアのフライにします。」

「山羊のミルク煮と、ピラニアのフライ？うえっ！」「想像しただけでも気持ち悪いわ。」

「そうですね？」

ゾルビは、自分の認識番号と暗唱番号を押し、料理のボタンを押して注文した。

十分ほどで、出前ロボットがやって来た。

「お待ちどうぞさまで〜す！」

飲料提供器の前には、木のテーブルと木のベンチがあった。

「ここで食べましょう！」「はい。」「はい。」

昼寝カプセル

食事が終わると、ゾルビは飲料提供器の食事終了ボタンを押した。

「これを押さないと、後で罰金が来るんですよ。」

十分ほどで、出前ロボットがやってきて、食器やフォークなどを持って行った。

ユミは大きな欠伸をした。「なんだか眠たくなって来たわ。」

「いつも昼寝はするんですか？」

「はい。」「わたしもします。」

「アンドスの人々もするんですよ。」

「われわれホイホイ星人もします。あそこに、昼寝カプセルがあります。あそこで一眠りしましょう。」

「昼寝カプセル？」

「行けば分かります。」

二人は、ゾルビの後について行った。それは、公園のほぼ真ん中であつた。

「これが、昼寝カプセルです。」

それは、人が一人寝れるくらいの大きさで、下部はベッドで、上部は開け閉めできる透明のカプセルになっていた。

昼寝カプセルは五つあり、二つは既に使われていて、誰かが寝ていた。

「ちょうど三つ空いてます。」

三人は、それぞれにカプセルの中に入った。

「この蓋を下ろせばいいんですね？」

「そうです。中に会話ボタンがありますの、その番号のボタンを押すと、その番号のカプセルの人と会話できます。」

「ああ、そうですか……」

三人は蓋を下ろして閉めた。蓋は軽かった。

ユミは寝ると、ミクのカプセル番号五の会話ボタンを押した。

「ミクちゃん!」「なあに、ユミちゃん?」「ちょっと、テスト。」
「よく聞こえるわ。」

外のボタンを押すと、外の音が入ってきた。多少湿気を帯びた温かい空気が流れていた。ゾルビから会話が入った。

「空気の温度調整は、右側にあります。」「あつ、ありました。これを回せばいいんですね?」「そうです。分からない点があったら、遠慮なく尋ねてください。」「はい。」

左側に時計が二つ並んであった。

「左側の時計は何ですか?」

「左が現在時刻で、右が目覚まし時刻です。指で回します。」

「なるほど、分かりました。」ユミは、三時きっかりに指で針を回した。

「これで良しつと!」

温度が少し低かったので温度を上げた。

真つ青な透き通った空が見えていた。小さな雲が流れていた。

「綺麗な空だなあ…」

小鳥がさえずっていた。

「こうやってると、小鳥つて、お喋りなのね〜。」

ミクからの音声だった。「ほんと、お喋りね〜。」

ゾルビからの音声だった。「夜になると、虫の音が聞こえるんですよ。」

「夜も使えるんですか?」

「はい、二十四時間使えます。」

「夜、怖くはないんですか?」

「基地内には悪い人間はいません。」

「吸血鬼ドラキュラとか?」

「ははは、そんなものは此の世にはいませんよ。」

「夜、寝たことあるんですか?」

「昔は、よくありました。」

「昔つて?」

「父親と口喧嘩して、よくここで一夜を過ごしたものです。」

「そうなんですか。」

「父親も、ここにいるってことが分かっていてね。そういう便利な場所だったんですよ、ここは。」

「な〜るほどね。」

「今思うと、いい時代だったな〜。結局、親に甘えていたんですね…」

「甘えていた？」

「怒るってことは、甘えなんですよ。親に何かを期待して怒るんですね。」

「な〜るほどね。」

ミクの可愛いイビキが聞こえて来た。

「ミクちゃんって、イビキかくんだ？」

「はい、かきますよ。」

ゾルビの、うるさいイビキも聞こえてきた。

「な〜〜んだ、自分だって、かくじゃん！」

ユミは、ゾルビとミクの音声を切った。ユミは、イビキはかかなかった。

小鳥たちは相変わらず、ああでもないこうでもない、そうである。と、さえずり合っていた。優しい平和な時が流れていた。

雨粒の声

ユミは雨音で目が覚めた。

「あつ、雨だわ！」小雨だった。パラパラと雨粒が透明のカプセルをリズミカルに叩いていた。

ミクから音声が入った。

「ユミ、雨だわ。」

「知ってるよ。」

「今、降ってきたみたいだね。」

「そうみたいだね。」

「なんだか、センチメンタルでロマンチックな雨音だね。」

「そうだね。」

ゾルビから音声が入った。

「なんだか、シヨパンの調べが聞こえて来ますね。」

「あら、ゾルビさん、シヨパンなんて知っているんですか？」

「知ってますよ。なぜか、地球人はホイホイ星人よりも芸術性は優れているんです。ホイホイ星人は感性が貧しくって。どうしてなんでしょうね？」

「そうなんですか？」それは不思議ですね。」

「山の雨は、すぐに止みます。この中で止むのを待ちましょう。」

「はい。」「はい。」

ミクの声だった。

「あゝゝあ、雨音を聞いてると、また眠くなってきたわ。おやすみなさゝゝい！」

ユミはカプセルに当たる雨粒を見ていた。

この雨粒、いったいどこからやって来たんだろう？

野を越え山を越え、いったいどこからやって来たんだろう？

今当たった雨粒は、「こんにちわ！僕、太平洋からやってきまし

た！」と言っていた。

「わざわざ、そんなところから？」

「大したことはありません。風君に運んでもらっただけのことです。」

「ごくろつさまです。」

ゾルビは聞いていた。

「ユミちゃん、誰と話してるの？」

「雨粒です。」

「雨粒？」

ゾルビには、雨粒の声は聞こえていなかった。

「僕は、偏西風に乗って、日本からやって来ました。」

「日本から？」

「はい、とっても遠かったです。でも元気です。」

ユミは、狸山を思い出した。

「狸山って知ってる？」

返事は無かった。もう、さっきの雨粒はいなくなっていた。

「さようなら、雨粒くん！大地に戻ったんだね……」

ユミは悲しくなって、涙が溢れて来た。

「短い生涯だったね……」

優しいアンデスの風が吹いていた。

共産システム

三時を過ぎていた。雨は止んでいた。三人は、昼寝カプセルを出た。「晩餐会の会場は、迎賓広場です。居住区の中央にあります。五時から予約になってます。」

三人は、会場に向かっていった。

歩道では、近くの人がテーブルの上に食べ物を並べて椅子に座り、おばさんが大きな声で売っていた。

「サボテンの実はいかがですか〜、とってもジューシーで美味しいですよ〜！」

「あれは果物ですか？」

「トウーナという果物です。味はキウイに似てます。」

「一つ食べてもいいですか？」

「じゃあ、買いましょう。ミクさんも食べますか？」

「はい。」

ゾルビが、売買カードを手渡し、黄色くなって汚ないのを、二つ注文すると、その場で、売り手のおばさんが、ナイフで皮を剥き小皿にのせて二人に手渡した。

ユミとミクは、手で摘んで食べた。

「なんだか、キウイよりも、あつさりしているわ味だわ。」

「キウイよりも、爽やかな味だわ。」

ユミはゾルビに尋ねた。

「どうして、汚い色のものを選んだんですか？」

「こういうのが、熟して美味しいですよ。」

売買カードがゾルビに返ってきた。

「基地では、お金は無いんです。全てカードなんです。」

赤いカードだった。新しい客がやってきて、バナナを注文していた。黄色いカードだった。

「階級によって、カードの色が違うんです。」

「階級って？」

「十段階あって、収入が多い人ほど上のクラスになっているんです。カードで代金を払うと、いい居住区のいい家に住めます。」

「家は買えないんですか？」

「買えません。基本的に共産システムなので、不動産は買えません。不動産は地域全体の共有財産なんです。」

ミクが発言した。

「一人は皆んなのために、皆んなは一人のために、ってやつですね？」

「そうです。ミクさんは、難しい言葉を知っていますね。」

「へへへ。」

ユミが言った。

「人を雇って売れば、楽だし儲かるんじゃないですか？」

「人を雇うことは、個人では禁止されています。人が人を金銭で使うことは、禁止されているんです。人を雇えるのは、国家だけです。」

「つまり、共産国家なんですね？」

「はい、そうです。」

「でも階級はあるんですね？」

「この階級は、人を差別するものではありません。単に労働の満足感のためのものなんです。」

「階級は、それ以上はないんですか？」

「ありません。年金の額が増えるだけです。」

「それはいいわ。」

ミクは黙って、一生懸命に二人の会話を聞いて勉強していた。

「でも、収入によって階級を決めるなんて、結局は日本と同じですよ。」

「階級は、収入よりも、学問や研究や芸術やスポーツや献身的活動によって決められます。」

「それは、いいですね。」

「さあ、そろそろ行きましょうか、会場に！偉い方々が待っていますから。」

「偉い方々？」

「国家主席や大臣や教授などです。」

その言葉に、二人は緊張した。二人の目は寄り目になっていた。

「わたしたち、そこで何をすればいいんですか？」

「ちよつと前に出て、みんなの前に顔を見せればいいんですよ。」

「それだけでいいんですか？」

「はい。後はみんなと一緒に、楽しく食べながら、お喋りすればいいんです。」

「それなら簡単だわ！」「それなら簡単だわ！」

二人は緊張が解け、いつもの笑顔になっていた。

晩餐会

迎賓広場は、約千人収容できる屋根付きの大きな広場だった。近くには、国家政治会議場があった。

ゾルビとユミとミクが到着したのは、四時だった。

「わ〜〜、綺麗で大きな建物だわ！」

「広くて豪華で素敵な広場だわ〜〜！」

広場は、緑色の人工芝が敷き詰められてあった。

奥の方で、小学生くらいの子供たちが、太鼓を叩き笛を吹いていた。あのアンドスの祭りという曲だった。

「もしかして、さっきの学校の子供たちですか？」

「そうです。あなたたちを歓迎する為に練習してたんです。」

「そうだったんですか！」「わ〜〜、感激だわ〜〜！」

白い身形みなりの男がやって来た。コック長だった。地球人で日本人だった。

「はじめまして、コック長の白井です。」

「日本人の方ですか？」

「はい。」

白井は、二人に尋ねた。

「妖精の方は、どのようなものを召し上がるのですか？食べられないものとかありますか？」

ユミが答えた。

「そうですね〜〜、肉やミルクやカレー以外だったら、何でも。」

ミクが答えた。「その通りです。」

「魚などは？」

「あまり好きではないのですが、少しなら。」「その通りです。」

「カタツムリなどは？」

「そんなのは駄目です。蜂とかも駄目です。」

「日頃、タンパク質は、どのようなものを？」

「大豆や、メダカなどの小魚ですね。貝なら大丈夫です。」

「メダカですか？」

「シラスとかでも大丈夫です。」

「ジャガイモやトウモロコシなどは？」

「大好きです。キノコは大好きです。」

「果物などは？」

「大好きです。何でも食べます。」

「飲み物は？」

「アルコール以外だったら、何でも結構です。普通のジュースや日本茶が好きです。」

「ジュースは、炭酸が入っててもいいんですか？」

「はい、構いません。」

「他には、食べられないものはないんですね？」

「あつ、チーズは駄目です。あまり辛いのは駄目です。」

「バターは大丈夫なんですね？」

「味付けくらいだったら大丈夫です。」

「難しいな……。分かりました！」

去ろうとしたが、立ち止まって振り向いた。

「大地震と大津波、大変でしたね……！」

「はい、関東は、すっかり変わってしまいました。」

「そうですか……」

コック長の白井は、悲しい顔をして去って行った。

五時になった。晩餐会は始まった。

中央に長いテーブルがあり、人々が集まっていた。

料理が運ばれて来た。コック長の白井が、ユミとミクのところにやって来た。

「お二人のために、メダカと貝のセビツチエという料理を作りました。メダカと貝は、そんなには入っていません。メインは野菜です。少量のバターとレモン汁と少量の香辛料で味付けしました。」

「よくメダカがありましたね？」

「メダカは、その小川で、いつも泳いでいます。」

ジャガイモも運ばれて来た。

「これは、塩がかかっているだけのジャガイモです。」

来たときに会った、パトロール隊の隊長と、国家主席が壇上に現れた。

国家主席が、挨拶を始めた。

「みなさん、わざわざ、ご来場ありがとうございます！」

みんなは、少し緊張して聞いていた。

「この度、パトロール隊の隊長バルダ君が、日本の妖精のユミちゃんミクちゃんの薬草によって、原因不明の高熱が出る病氣から救われました。日本の妖精の、ユミちゃんミクちゃん、どうもありがとうございます！それでは、バルダ君が発言します。皆さん、盛大な拍手を！」

拍手が起こり、隊長のバルダが出てきた。

「わたしは、こうやって元気を取り戻しました！見てください、今はとても元気です。」

バルダは、よつぽど病氣が辛かったのか、涙ぐんでいた。

「それでは、わたしを救ってくれた、日本の妖精の恩人、ユミちゃん、ミクちゃんを紹介します！皆さん、盛大な拍手を！」

ユミとミクの隣にいた

ゾルビが、

二人に前に出るように促した。

「さあ、ユミちゃん、ミクちゃん、前に出て！」

ユミは、少し緊張しながらも、仕方なく寄り目で前に出て行った。

ミクは、喜んで壇上に向かった。なぜか、大舞台には強いミクだった。

隊長バルダ

ゾルビも一緒だった。三人は壇上に上がった。パトロール隊の隊長が改めて二人の妖精を皆んなに紹介した。

「え〜〜〜つと、右方の妖精が…」

ゾルビが隊長に近づいて耳打ちした。隊長の話しは続いた。「ユミちゃんです。そして、左方が、ミクちゃんです。」

ユミは、ぎこちなく手を振っていた。ミクは笑いながら手を振っていた。

「皆さん、二人の妖精に、盛大な拍手を！」

大拍手が起きた。二人は、手を振っていた。

「ユミさん、ミクさん、どうもありがとう。もう戻ってもいいです。」

二人は、ゾルビに連れられ、元の位置に戻って行った。

ユミは、ほっとして胸を撫で下ろした。ミクは笑っていた。「面白かったわ〜〜。」

「ミク、あんたって、度胸いいね〜〜。」

「ユミちゃん、こういうのに意外と弱いよね。」

「そうみたい。今、分かったよ。」

テーブルに飲み物が運ばれて来た。二人の前には、オレンジとグレイプの炭酸入りジュースがあった。

給仕が尋ねた。「どちらになさいますか？」

「わたし、グレイプ！」わたし、オレンジ！」給仕は詮を開けた。グラスに注いだ。

壇上の国家主席が、乾杯の音頭を取った。

「それでは皆さん、隊長の病気回復と、二人の恩人の妖精、ユミちゃんとミクちゃんの、はるばる日本からの、ご来賓を祝って…」

国家主席がグラスを上げると、みんなも、グラスを上げた。

「かんぱ〜〜〜〜い！」

みんなの合唱が起きた。『かんぱくくい!』

晩餐会は始まった。みんなは、食事を始めた。

メインディッシュが終ると、みんなは会食を始めた。

ユミとミクのところに、隊長のバルダがやって来た。

「ユミさん、ミクさん、日本は大変でしたね。そちらは大丈夫でしたか？」テレパシーによる会話だった。国家主席もやって来た。ユミは、二人に向かって話した。

「わたしたちの住んでいる狸山も大変でした。道は寸断され、ライフラインはストップ、食料は無くなり。ほんとうに困っています。」国家主席が発言した。

「それは大変だ。後で支援の物資を送りましょう。まずは食料ですね。」

「はい、是非、おねがいします!」

「分かりました!」

他の大臣や、教授たちも、次から次とやって来た。そして、同じように大地震と大津波のことを尋ねてきた。最後に残ったのは、隊長のバルダだった。

「あの薬草、何という薬草なんですか?」

「マイズルソウという薬草です。」

「どこにあるんですか?」

「高い山なら、どこにでもあると思います。」

「だったら、アンデスにもありますね?」

「たぶん。」

「明日、山に行つて教えていただけませんか?」

「明日ですか?」

「明日は駄目ですか?何か御用でも?」

「別に用はありませんけど…」

「待つてる人とか?」

「いえ別に、分かりました!明日、一緒に行きましょう!」

子供たちによる、歌と踊りが始まった。アンデスの祭りという歌だ

った。

みんなも楽しく歌い踊りだした。ユミやミクも踊りだした。歌と踊りが終わると、日本人のコック長の白井がやって来た。

「料理は、いかがでしたか？」

「たいへんに美味しかったです。ありがとうございました。」
ミクも同じように返事をした。

「それは良かった！」

隊長が白井に頼んだ。

「そうだ、白井さん。悪いけど、この人たち、君のところに泊めてくれる。僕のところよりは、同じ日本だから気が合うでしょう？」

「ああ、いいですよ。喜んで。」

ライゴン

国家主席がやって来た。

「君たち、何を相談してるんだね？」

隊長のバルダが答えた。

「お二人の宿泊先のことです。」

「何を言ってるんだね、君たち。宿泊は、迎賓ホテルに決まってるだろう。さっき、手配しておいたよ。」

「これは失礼しました！」

それは、第一級の、国家的待遇だった。

「頼んだよ！」

国家主席は去って行った。

「じゃあ、ゾルビ、お二人を、迎賓ホテルに案内してくれ！」

ゾルビは敬礼で答えた。「かいしこまりました！」

隊長のバルダはユミに尋ねた。

「明日は、何時頃の出発でよろしいですか？」

「そうね〜〜、じゃあ九時でいいわ。」

「分かりました。では、九時きっかりに、そちらに伺います。」

隊長のバルダもコック長の白井も去って行った。

ユミとミクは、なるがなるままにしかないという感じで、ゾルビを見ていた。

「じゃあ、行きましょうか？」

ミクが止めた。「ちょっと待って！」

「何か？」「この残ったジャガイモ、持って行ってもいいかしら？」

「いいですよ。」

ゾルビは給仕を呼んだ。「このジャガイモ、持って行くから、何かに包んでくれ。」「はい！」

迎賓広場は、数十人が残ってるだけになっていた。

「ずいぶんと、淋しくなりましたね。」

「ほんとだ。」

「じゃあ、行きましょう！」

三人は、迎賓ホテルに向かった。日は、すっかり暮れ、八時になっていた。

外に出ると、二人には星空が、やけに美しく見えていた。

「見てミク、星たちが、やけに近くに見えるわ！」

「やっぱり、アンデスの星空だわ〜！」

きらきら光る色とりどりの星たちが、ユミとミクを歓迎してるみたいだった。

「そんなに珍しいですか？」

「はい、とっても！」「はい、とっても！」

迎賓ホテルは、国家政治会議場の裏にあった。近かった。

迎賓ホテルの前には噴水があり、不思議な形の動物像の口から水が出ていた。

ミクは、不思議そうに、その動物像を見ていた。

「あの動物は何ですか？」

「ライゴンという、ホイホイ星の動物です。」

「ライゴン？」

ユミが発言した。「ああいうのって、どこでも、口から水が出るんですね〜。」

ホテルの玄関には、三人の従業員が待ち構えていた。

「お待ちしていました。ようこそ迎賓ホテルへ！」

ホテルの主任らしい男に、三人は案内された。迎賓ホテルは二階建ての古風な建物で、客室は二階にあった。

三人はエレベーターで二階に上がった。

「綺麗なエレベーターだわ。」

「二階でエレベーターなんて、贅沢ですね。」

「そうですか。」

部屋に案内された。「お風呂は、こちらの部屋です。御用のときには、このインターホンを押してください。」

「はい、分かりました。」「はい、分かりました。」

「朝食は何時になさいますか？」

「どうする、ミク？」「八時でいいわ。」「じゃあ、八時で。」

「分かりました。」「去って行った。」

テレビもあった。ユミはゾルビを呼んだ。「ゾルビさん。」「はい、何でしょうか？」

「テレビは使ってもいいんですか？」

「はい。でもホイホイ星の番組ばかりですよ。」

「それは面白そうだわ。」

「わたしに何か用があつたら、従業員に、ゾルビを呼んでください。と言ってください。すぐに来ますから。」

「はい。」

ゾルビは、二人にバスルームの使い方を教えると出て行った。

ミクは、お風呂を眺めていた。「綺麗な、お風呂だわ」。」「

「入れば？」「うん、そうする！」

ミクは、るるん気分で行って行った。ユミは、お風呂よりも、テレビの番組に興味があつた。スイッチを入れた。

「わゝゝゝあ、何これ!？」

あ・い・う・え・お

テレビでは、オレンジ色の空の下で、騎手が八本脚の馬にまたがり、競馬が行われていた。

「うわ~~~~、ムカデが走ってるみたいで気持ち悪いわ!」

ユミは、チャンネルを変えた。風景が映し出された。

オレンジ色の空、青色の草原と山々だった。四本脚の大きな鳥が飛んでいた。たくさんのピンク色のカラスのような鳥が、キーキーと泣きながら飛んでいた。

角が一本生えた紫色の、カンガルーのような動物が、ぴよんぴよん飛んで走っていた。

「うわ~~~~、目が回ってくるわ!」

ユミは、気持ち悪くなってきたので、テレビを切った。

「わ~~~~、気持ち悪い!」

ユミは、冷蔵庫から、オレンジジュースを取り出して飲んだ。

「このオレンジジュース、美味しいわ! アンドエスのオレンジかしら?」

飲んで、長椅子に横たわっていると、ミクがバスルームから出てきた。

「どうだった、お風呂?」

「とっても気持ちよかったわ。ユミちゃんも入ったら?」

「うん、じゃあ入るよ。」

「このジュース、どこにあったの?」

「冷蔵庫。グレープジュースも入っているわ。」

「わ~~~~、嬉しい!」

ユミが、お風呂に入り、バスルームから出てくると、ミクは気分が悪そうにして、長椅子に横たわっていた。

「どうしたの、ミク?」

「テレビを見てたら、目が回ってきて...」

「やっぱり！」

「ユミも？」

「そう、同じよ。このテレビ見ないほうがいいわ。」

「そうね！」

五分ほど寝てると、ミクは起き上がった。

「ひどい目に遭ったわ！」

ユミは、窓辺の椅子に座って、外の景色を見ていた。

「ミク、大丈夫？」

「大丈夫、もう治ったわ。」

「あのテレビは、身体に毒だわ。」

「そうみたいだね。」

「綺麗な景色だね……」

ミクも隣の椅子に座った。「ほんと、素晴らしい景色だわ。」

「今頃、狸山の神主さんと奥さん、心配してるんだろぅな……」

「書置きはしてきたんでしょう？」

「うん、でも、どのくらいとか場所とかは書いてこなかったの。」

「そうだったの。」

ユミは、少し悲しい顔をしていた。

「ユミ、わたしも書いてみたいわ。文字を教えて！」

ミクは、文字を知らなかった。

「いいわよ。」

「あそこに、紙と筆記用具があったから、持ってくるね。」

ミクは持ってきた。

紙には筆記台がついていた。

「じゃあ、ひらがなからね。」

ユミは、ひらがなしか知らなかった。

「あいいうえお、からね……」

「あいいうえお……」

「これが、あ！」書いて見せた。

「ゆっくり書いて……」

ミクは、ゆつくり書いた。

「まだ下手だけど、何回も書いてたら上手くなるよ。」

ユミは、いうえお、まで書いて教えた。

「今日は、ここまで。後は、自分で書いて練習して。」

「はい！」

ユミは、姉のように笑っていた。ミクは、練習を始めた。

「ユミちゃん、明日は何時に行くの？」

「九時よ。」

「わたしも行ってもいいの？」

「勿論よ。一緒に行きましょう！」

「うん！どう、あとという文字、上手くなったかしら？」

「まだまだだね〜。でも、さっきよりかは、ずっと上手くなったわ！」

ミクは、学ぶことの嬉しさに喜んでいた。目は輝いていた。

「今まで、勉強なんかしたことなかったから、なんだかとても嬉しいわ。」

ミクは、涙を浮かべていた。「ユミちゃん、ありがとう。」

ユミは、ミクの前世のことを思い出して、切なくなった。言葉が出なかった。

舞鶴草

朝食は、栗ご飯とキノコとホウレン草の味噌汁、タクアンと味付け海苔だった。

ユミとミクは喜んだ。

「わ〜〜、日本の味だわ〜〜！」

「古里の匂いだわ〜〜！」

感激して完食した。

歯を磨いて待つてると、昨夜のコック長の白井がやって来た。

「おはようございます。いかがでしたか、今朝の朝食は？」

「大変に美味しかったです。」「とっても美味しかったです。」

「それは良かったです！」

白井さんが作ったんですか？」

「そうです。」

「同理で、日本料理が上手いわけた。」

パロール隊の隊長バルダがやって来た。

「おはようございます！」

「おはようございます！」「おはようございます！」

「じゃあ、行きましょうか？」

白井が尋ねた。

「昼食は何時頃に出せばよろしいでしょうか？」

「そうだな〜〜、分からないな〜〜。」

「どちらへ？」

「マイズルソウという薬草を探しに行くんだよ。白井さん、知ってる？」

「舞鶴草なら、知ってますよ。でも、アンデス山中にはないでしょう。」

「えっ、無いの？」

「そうですね〜〜、多分無いと思いますよ。アジアの山中まで行か

ないと。」

「そうなの……?」

「確信はできませんが、多分……」

「とにかく探して見るよ。昼食は、小さくなって行くので、お腹も空かないし、そこらへんの花の蜜でもなめてるからいいです。ね、お二人さん?」

「はい、食べなくても大丈夫です。」「小さくなったら、そのくらい大丈夫です。」

「分かりました!じゃあ、夕食を作って待ってます。」

「わたしの分も?」

「勿論です。」

「悪いね……。」

三人は、出発した。ゾルビが玄関で待っていた。

四人で、小さくなって円盤に乗って、アンデス山中に向かった。

円盤の中から、飛びながら探すので楽だった。

ユミは首を傾げていた。

「だいたい、このくらいの高い山だとあるんだけどね……。?」

「やっぱり、白井さんの言ってたように、アンデスにはないんじゃない?」

「そうかも知れないね。」

隊長は不安な顔になっていた。

「やっぱり、駄目ですか……。」

「富士山なら、確実にありますよ。」

「富士山、マウント・フジですね?」

「円盤だと、三分で行けるんでしょう?」

「はい。」

「じゃあ、そっちの方が早いわ。私たちも、すぐに帰れるし。」

「そうですね、そしましょう!」

円盤は、日本の富士山に向かった。

富士山には、夜の十一時に着いた。風が強かった。

「暗くて見えないし、風も強いから、ふもとで朝を待ちましよう。」
コック長の白井に夕食キャンセルを連絡をして、朝を待った。舞鶴
草を確認すると、円盤は狸山に向かった。そして、ユミとミクを降
ろした。

朝の六時だった。

「どうもありがと〜〜う！」

「さようなら〜〜！」

円盤は帰って行った。木の上のカラスが騒いでいた。

狸山の風音

ユミとミクは、瞬間移動して、管理小屋に飛んだ。管理小屋では、神主と奥さんが、もう起きていて、朝食の用意をしていた。

ユミとミクは、大きくなって挨拶した。

「ただいま〜〜！」「ただいま〜〜！」

「おかえり〜〜〜！どこに行つてたの〜〜〜！？」

「誘拐でもされたと思つてたよ！」

「遅くなつてすみません。アンデスまで行つてたんです。」

「アンデスつて、南アメリカのアンデス？」

「そうです。」

神主は改めて驚いた。

「アンデス！？その、ホイホイ星人の円盤とやらで行つたのかい？」

「はい、三分で行きました。」

「三分で！？？」

「はい。」「はい、その通りです、びっくりしました！」

「いちばん偉い、国家主席という人が、食料をここに届けるつて言つてました。」

「国家主席？」

「はい。いとばん偉い人です。」

「まあいいや、とにかく帰つてきて良かった。詳しいことは後で聞こう。」

「お腹、空いたでしょう？」

「はい。」「はい、とつても。」

「今、大好きな椎茸を焼いてあげるわね。大根の味噌汁もあるわよ。」

「ありがとうございます！」「ありがとうございます！」

焼き椎茸と味噌汁が出されると、二人は美味しそうに食べ始めた。

「ご飯もあるわよ。」

「ご飯は、けっこうです。」「ご飯は、いりません。」

ユミとミクは、ご飯は、あまり好きではなかった。

二人は、完食した。

「神主さんたち、忙しいみたいだから、わたしやち、これで帰ります。ごちそうさまでした。」「ごちそうさまでした。」

「後で行くからな。」

「はい。」「はい。」

二人は、味噌汁のお椀を洗うと、裏ドアから、歩いて帰って行った。上空をアンダルシアが飛んでいた。二人は手を振った。降りて来た。「やゝゝゝ、お二人さん、お久しぶりゝゝゝ。どこに行ってたの?」

「アンデスよ。」「アンデスに行ってたの。」

「アンデス!？」

「そうよ、南アメリカのアンデスよ。」

「アンダルシアが住んでいた、アンデスよ。」

「えゝゝゝゝゝ、まじゝゝゝい!？」

アンダルシアは、びっくりしていた。

「アンダルシアを知っているという、ホイホイ星人のゾルビって人に会ったわ。」

「えゝゝゝゝゝえ、ゾルビに!？」

「知ってるんでしょう?」

「勿論、知ってるよ。よく一緒にアンデス山脈を飛んでいたからね。」

「彼、あなたのことを探していたわ。」

「そうなのゝゝゝ、わゝゝゝゝん!」

アンダルシアは、突然泣き出した。

「逢いたいよゝゝゝ!」

「ここにいて教えておいたから、きっと逢いに来ると思うわ。」

「えゝゝゝゝゝ、ほんとゝゝゝ!？」

アンダルシアは、嬉しくなって、大きな翼を広げて大ジャンプした。

「早く、逢いたいな〜！」

「やって来たら、一番にテレパシーで教えてあげるわ。」

「ありがとうございます！よろしくおねがいます！」

アンダルシアは、のこのことミクの巣箱の近くまでついて来た。

「わたしたち、ちょっと一休みするわ。」

「じゃあ、ゆつくりと、お休みください。さようなら！」

アンダルシアは飛んで行った。

ユミとミクは小さくなって、巣箱に潜り込んだ。

「あ〜〜、やっぱり落ちつくわ〜〜！」

「やっぱり、我が家が一番ね〜〜！」

カラスたちが騒いでいた。小鳥たちが、ああでもないこうでもない、そうであると、さえずり合っていた。

爽やかで優しい秋の風が吹いていた。

「狸山の風音だわ〜。」
「狸山の風だわ〜。」

宇宙貨物船

その日の昼過ぎだった。昼食の後、森本と、隆次父さんは、テーブルを挟んで話し合っていた。

「主要幹線道路が回復すれば、狸山の道も修復されるはずです。」

「自衛隊は動員されているんでしょう？」

「はい、既に十万人動員されています。」

「ここに来るのに、どのくらいかかりそうですかね……？」

「二週間はかかると思います。」

「二週間は長いな……。食料は大丈夫かな……？」

「あと、一週間分が、やっとですね……」

「困りましたね……。そうになると、アンダルシア君だけが頼りか……」

「でも、アンダルシア君じゃあ、お米の運搬は、とても無理ですね。」

「

「そうですね……。少しずつなら運べますけどね……。」

「それしかありませんね。」

「一キロくらいなら、運べるでしょう。」

「と、思いますけど……」

「政府は、大型客船や汽車で、九州疎開計画を出していますが、どうなさいます？」

「行くかも知れませんが、港や線路が使えるようになったら話しましょう？」

「そうです。」

「だったら、これからどうなるか、まだ分かりませんよ。」

他の者は、黙って二人の話を聞いていた。神主と奥さんはいなかった。

一男は空を見ていた、

「ナロン星人とかがやって来て、助けてくれないかな……。」

突然、空に大きな宇宙船が出現した。宇宙貨物船だった。

テレパシーが聞こえて来た。

「着陸します。真下にいると重力波で潰されます。危険ですので、絶対に近づかないください！」

宇宙船は、みんなから離れた場所に着陸した。

大きなドアが開き、中から二人の宇宙人が出てきた。

みんなは、駆け寄って行った。

「われわれは、ホイホイ星人です。食料を届けにまいりました。」

森本は驚いた。

「ホイホイ星人？食料？」

「はい、十人で約一ヶ月分の食料です。差し上げます。重力波で下ろしますので、離れてください。」

みんなは離れた。次から次に、食料は下ろされて行った。一トンはあった。

「では、さようなら！」

宇宙貨物船は、舞い上がると、消えていなくなった。

みんなは、物資に駆け寄った。

神主と奥さんは、ユミとミクのところにいた。

桜の木の下で、大きいユミとミクの、ホイホイ星人の話を聞いていた。

「チチカ力湖か、聞いたことあるな〜。」

「そんなに綺麗なところだったの？」

「うん、とっても！」「素晴らしかったわ〜！」

突然、小さな円盤が、近くに着陸して、ドアが開き、ゾウビが現れた。

「こんにちわ！」

ユミは、明るく返事した。「やあ、ゾルビさん！」

ミクは手を振って答えた。「先日は、どうもありがとうございました！」

神主と奥さんは驚いていた。ゾルビは二人に挨拶した。

「はじめまして。わたくし、ゾルビと申します。」

神主も挨拶した。

「はじめまして。わたくし、神主の高田です。これは、妻の涼子です。」

「これから、お友達になりましょう。」

「はい、こちらこそよろしく。」

「食料を持って来ました。キャンプ場に降りました。」

「えっ！？どうして？」

「薬草の御礼です。」

「薬草の御礼？」

「ユミちゃんとミクちゃんから頂いた、薬草の御礼です。」

「ああ、そうなんですか？」

「後で見に行ってください。」

「じゃあ、今すぐ見に行きます！」

神主と奥さんは、キャンプ場に駆けて行った。

「どうもありがとう、ゾルビさ〜ん！」

「今日は、わたくし的には、彼に逢いに来たんです。」

「彼って？」

「アンダルシア君です。」

「じゃあ、今すぐ呼びますね。」

ユミは、テレパシーでアンダルシア呼んだ。彼は、直ぐにやって来た。

「やあ、アンダルシア！」

「やあ、ゾルビ！」

「こんなところに居たのかよ〜！」

「久し振り〜！」

神主と奥さんが、駆けて戻って来た。

「ゾルビさん、どうもありがとう！」「あんなに沢山、ありがとう
ございます！」

「どういたしまして。さあ、僕と一緒に帰ろう！宇宙貨物船を上で

待たせてあるんだ、それに乗って、アンデスに帰ろう!」

アンダルシアは、何かを考えていた。

「ちよつと待つてください。」

「えっ!?!」

「わたしは帰ると、きつと、この人たちは困ります。もうしばらくここにいます。」

「えっっ!?!」

「女房や子供には、そう伝えておいてください。ここが幸せを取り戻したら、必ず帰ると。」

「それでいいのかい?」

「はい。そのときは、ゾルビさん、よろしくおねがいします!」

「分かった!君は心が優しいんだな。必ず伝えておくよ!」
ゾルビは去って行った。

ユミとミクは、アンダルシアを見て、「ありがとう、アンダルシア!」と言っていた。アンダルシアは優しく微笑んでいた。

神主と奥さんは、いつまでも「どうも、ありがとう!」と言って、空に向かって手を振っていた。

ボン太の犬小屋

「かつこいいこと言っちゃって、ほんとハンペンが食べたかっただけじゃないの？」

「へへへ、ばれちゃいましたか！」

神主と奥さんは、アンダルシアに頭を下げていた。

「アンダルシア君、ほんとうにありがとう。君が、そんなに、わたしたちのことを思っているなんて。」「ほんとうにありがとう。」

「いいんですよ。いずれ帰るんですから。」

「帰るときは言ってよ、急にいなくならないでよ。ちゃんと祝うから。」

「ありがとうございます。光栄です。」

余震だった。震度五はあった。

「きゃ~~~~！」

「地震だ~~~~！」

アンダルシアは「あわわわ！」と叫んで飛び立った。木の上にいたカラスたちも、宙を舞っていた。

ユミとミクは、地面に伏せ、神主と奥さんは、近くの木にしがみついていた。

揺れは、一分ほどで治まった。

「終わったみたいだ……」

「あ~~~~、怖かったわ！」

「管理小屋、大丈夫か見に行こう！」

「そうですね。」

二人は、管理小屋に向かって走って行った。

「ミク、大丈夫？」

「うん、大丈夫。怖かったわ~~~~！」

「小さくなっていたほうが、空を飛べるから安全だね。」

「そうね、そうしましょう！」

二人は、小さくなつてミクの巣箱に潜り込んだ。

「あゝ怖い……」 「怖いわ……」

これ以上の揺れは来なかった。

「もう大丈夫みたいだね。」

「そうみたいだね。」

二人は、雑巾の布団をかぶった。

「なんか、これかぶつてると、安心するわ。」

「ほんと、不思議ね……」

「このまま寝てて、様子を見ましょう。」

「そうしましょう。」

「津波は大丈夫かしら？」

「警報は鳴っていないみたいだね」

その時、津波警報が鳴り始めた。

五メートルの津波が予想されます 海岸付近の方は 至急高台か
三階建て以上の建物に逃げてください！

「また、津波だね。」

「狸山には、津波は来ないわ。」

結局、津波は一メートルほどで、瓦礫の町までは来なかった。

やもめ狸のポン太がやって来た。

「怖いよ……！」

ユミとミクは、雑巾のドアから顔を出した。

「どうしたの、ポン太さん？」 「どうしたの？」

「家が、さっきの地震で、壊れちゃったんだよ……！」

「あなた、無事だったの？」

「もう少しで、生き埋めになるところだったよ！」

「土の巣穴は危ないわ。」

「そんなこと言っただって。狸の巣穴は土の中って、昔から決まっ
ているんだよ。」

「困ったわね〜。」
「なんか、いいとこないかな〜?」
「あつ、そうだ。昔飼ってた犬の犬小屋があつたわ!」
「犬小屋? ああ、人間が作ったやつね。」
「どう?」
「犬の匂いにするから、いやだよ。」
「そんな贅沢、言わないでよ。」
「それ、どういうの?」
「ミミとミクは外に出ると、大きくなった。物置の裏にあつた。
「ほら、まだ綺麗でしょう?」
「ポン太は、中に入った。」
「うん、臭くも無くなってるな〜。」
「いいでしょう?」
「いいけど、人間に見つかったら、大変なことになるよ。」
「そんなことないよ。神主さんだったら、きっと歓迎するよ。」
「そうかな〜?」
「人間はね、こっちが心を開くと、あっちも心を開くの。」
「そうなの?」
「はじめに挨拶をすれば、きっと許してくれるわ。」
「じゃあ、挨拶してみるよ。でも、ここはいやだな。」
「どこがいいの?」
「一目につかないところ。神社の奥の草むらの中がいいな。」
「分かった、今そこに運んであげるわ。」
「ミミとミクは、犬小屋を希望の場所に運んだ。」
「どう?」「どうですか?」ポン太は犬小屋に入った。
「うん、とってもいいよ! ありがとう!」

ユミとミクは宇宙人

宇宙貨物船から運ばれてきた物資は、一トンあった。

米やジャガイモ、とうもろこし粉、大豆、小麦粉、粉ミルク、ココアや紅茶や緑茶、下着や靴下や洋服までも入っていた。その他色々な物が入っていた。

みんなは、目を丸くして喜んでいた。一番喜んでいるのは、神主と奥さんだった。

「これで、一カ月はもつな……」

「そうね。これに肉とか魚があればいいんですけど……」

「乾燥肉なら、ありますよ。」

「乾燥肉ばかりじゃね……」

「それは、アンダルシア君に調達してもらうかしかないな。」

幸子が、お菓子を見つけた。

「わ……い、お菓子だ……！」

一男は、キャンデーを見つけた。

「ほら、キャンデーもあるぞ！」「わ……い、キャンデーだ……」

！

隆次の妻の映見は、着る物ばかり見ていた。

「ジャンパーまであるわ！」

「これからは、寒くなるからな……」

発言したのは、神主の奥さんだった。

「あなた、近所の人にも分けてあげましょう。」

「そうだな。」

テレビ局の若いスタッフが手を挙げた。

「じゃあ、僕たち持って行きます！」

「じゃあ、頼もつかな。」

神主の奥さんは、気分が悪そうだった。

「あなた、わたし今朝から頭が痛くって、風邪引いたみたいなんで

す。」

「風邪薬なかったの？」

「はい。」

「じゃあ、管理小屋で休んでいなさい。」

「はい、そうします。」奥さんは、管理小屋に戻って行った。

「困ったな……。お金も無くなって来たし、ATMはないし、使えないし……」

一男が教えた。

「ATMなら、中央区では使えるそうですよ。銀行も使えるそうです。携帯のニュースでやってました。」

「あつ、そう！じゃあ、アンダルシア君に頼もうかな。」

「でも、アンダルシアでは、ATMは操作できないでしょう？」
神主は告白した。

「実は、うちには小さな宇宙人がいるんですよ。その宇宙人は、大きくなったり小さくなったりできるんです。その子たちに頼めばできます。」

「えっ、宇宙人！その宇宙人って、十センチくらいの、そして大きくなったら、小学校一年生くらいじゃないですか？」

「そうです。どうして知ってるの？」

「そして、一人の名前は、ユミちゃん。」

「どうして名前まで？」

「見たんです。そして話したんです、公園で。」

隆次父さんは喜んだ。

「一男、おまえの話し、ほんとうだったんだな！信じていたよ、父さんは！」

森本も納得顔になっていた。

「同理で、ここに宇宙人が来るわけだ！」

隆次父さんは、神主に質問した。

「宇宙人って、ひょっとしたら、里子さんのことでは？」

「そうです。」神主は、話しがややこしくなるので、ユミとミクを

宇宙人にしたのだった。

一男は心配していた。

「あの大きさでは、ＡＴＭの操作は無理だと思います。背が低くて画面を操作できません。銀行に直接行って、係の人に手伝ってもらったほうがいいです。」

「そうだね。」

ミクの巣箱に、神主がやって来た。

「ユミちゃん、頼みがあるんだ。」

「何ですか？」

「中央区つて、知ってる？」

「はい、あの大きなタワーがあるところでしょう？」

「そう。そこに行つて、銀行に行つて、お金を下ろしてきてほしいんだ。」

「いくら下ろすんですか？」

「十万でいいよ。」

「十万！分かりました。」

十万は、ユミには大金だった。

「銀行のカードと暗証番号と、わたしの電話番号を書いた紙を渡しておくから。」

「カードを入れて、暗証番号を押して、金額を押せばいいんですね？」

「そう。分からなかったら、銀行の人に聞いて。銀行の人が尋ねてきたら、お父さんが病気で頼まれたつて答えるんだよ。念のために、電話番号も書いておいたから。」

「分かりました。」

ユミは、アンダルシアを呼ぶと、飛び立って行つた。神主は、心配そうにアンダルシアを見ていた。

風邪薬

神主の携帯電話が鳴った。銀行からだった。神主は管理小屋にいた。
「ああ、そうですか。分かりました。」

奥さんが尋ねた。「何ですって？」

「現在、取引銀行とはオンラインがストップしてて使えないって。」
「駄目ってことですか？」

「そういうこと。ユミには二万円渡しておいたから、風邪薬だけは買ってくるよ。薬屋があればね。」

「そうですか、仕方ありませんね。」

「ここにある、二万円が最後だな。」

「なんとか頑張りましょう。」

「ああ、そうするしかないな。」

奥さんは、寝てた。森本が、ノックをして入って来た。

「倉庫が、いっぱいになりました。どうしましょう？」

倉庫は、管理小屋の隣にあった、リアカーとか草刈機を置いてあった物を、リアカーなどを取り出して、倉庫にしたものだった。六畳ほどの広さだった。

「しょうがない。テントを使いましょう。」

「テントの中に入れるんですね？」

「はい。雨露は凌げます。それに、テントの入ってた小屋を倉庫としても使えます。一石二鳥です。」

「分かりました。」

森本は出て行った。

ユミとアンダルシアが帰って来ると、ミクが神社の前で、ハンペンをフライパンで焼いていた。バター醤油の匂いが漂っていた。

「ただいま〜！」

「今、アンダルシアのために、ハンペンを焼いてたの。」

「わ〜、じゃあ丁度よかったわ!」

「熱々のハンペン、いい匂い。おいしそうだな〜!」
「どうぞ遠慮なく、お召し上がりください。」

「アンダルシアは、二つあるハンペンを、ぺろりと、二口で食べた。
「あ〜、美味しかった!」

「ユミは、アンダルシアから飛び降りて、大きくなった。首に下げている、アユ婆ちゃんがつってくれたバッグを取った。

「アンダルシア、どうもありがとう!」

「じゃあ、おいらはこれで!」

「アンダルシアは飛び立って行った。

「ユミ、どうしてこんなところで焼いてるの?」

「わたしたち、チャンプ場の人たちに、宇宙人ということになったんだって。」

「わたしとミクが、宇宙人?」

「うん。そのほうが、都合がいらいしいよ。」

「あ〜、そうなの? まあ、どっちでもいいけど。」

「だから、宇宙人ってことで、堂々とここで焼いてるの。」

「そういうことだったのか。」

「どうして、妖精じゃあ駄目なんだろうね。」

「きつと、説明するのが面倒臭いんだよ。」

「そういうことか。」

「ミク、わたし、風邪薬を届けてくるわ。」

「奥さん、風邪引いたんですって?」

「そうらしいわ。今、寝てるらしい。」

「じゃあ、早く届けて。」

「うん!」

「ユミは、管理小屋に向かって走って行った。

「ポン太がやって来た。

「いい匂い。何を焼いてるの?」

「あら、ポン太さん。ハンペンを焼いてたの。」

「ハンペン？ああ、この前頂いたやつね。」

「もう一枚あるから、今焼いてあげるわ。」

「いいのかい？あんたの分じゃないのかい？」

「そうだったんだけど、また買うからいいわ。椎茸も残っているし。」

「

ミクは、ハンペンを焼いてあげた。「はい、どうぞ！」

ポン太は、何度も噛みながら味わって食べ始めた。

「うわ~~~~、美味しいな~~~~！生きてて良かった！」

「オーバーねえ~~~~。」

カラスたちが、木の上で騒いでいた。

一男とユミ

管理小屋に、ユミが裏口から入って来た。

「ただいま〜！」

「おかえり！」「ユミちゃん、大変だったね〜。」

「銀行は駄目でした。風邪薬だけは買って来ました。」

「よく薬屋があつたね〜？」

「アングルシア、物凄く目がいいんですよ。凄い高さから見つけてくれたんです。」

「そ〜う、じゃあ彼に礼を言わなきゃあな〜。」

「はい、そうしてください。はい、風邪薬とカードとメモ書き。」
神主に渡した。「どうもありがとう！」

「ユミちゃん、ほんとうにありがとう！」

「いいえ、どういたしまして。」奥さんは、寝ていた。

「熱は、あるんですか？」「ちよつとね。」

「薬を飲んで寝てれば治るさ。」

「あなた、夕飯は何を？」

「そんなことは心配しなくていいよ。俺がやる！」

「はい。」

一男が入って来た。「温かい御茶を一杯ください。」

「急須があるから、自分でやって。」「はい。」

お湯は常に、七輪に沸いていた。

一男は、ユミを見た。「ユミちゃん！」「一男さん、お久しぶり。」

「久しぶり〜！やっぱり、ここにいたんだね！」

「はい。」「やっぱり宇宙人だったんだね〜？」「はい、そうです。」

一男は、湯呑みに御茶を注ぐと、三本脚の簡易な椅子に座り、飲み始めた。

「あ〜美味しい！これ、宇宙人が持って来た御茶ですか？」

「そう。けっこういい味でしょう?」

「はい。」

「宇宙人も、御茶を飲むのかね?日本の御茶を?」

「さあ、どうなんでしょうね?」

「飲みます。日本の御茶は大好きです。」

「あ、そうなの。じゃあユミちゃんも飲むんだ?」

「はい、とっても好きです。」

「じゃあ、ユミちゃんも飲む?」

「はい。」

一男は、新しい湯呑みに入れてやった。「はい!」

「どうもありがとう!」

「ユミちゃんは、いつもどこにいるの?」

「神社の近くの、大きな桜の木の巣箱のなかです。」

「あ、あのプラスチックの巣箱ね!」

「はい。」

「あれ、寒くないの?」

「少し寒いですが、大丈夫です。」

「じゃあ、今度僕が、木で作ってあげるよ。」

「ほんと?」

「神主さん、作ってもいいですか?」

「作ってくれるんだったら有難いけど、手間がかかるけどいいのかい?」

「はい、大工道具さえあれば。」

「大工道具ならあるよ。じゃあ頼もうかな。お駄賃とかはないけど、いいのかい?」

「そんなものはいりません。どうせ暇ですから。」

「じゃあ、頼みます。いいだろう、ユミちゃん?」

「わたしはいいけど、ミクがああ、巣箱、気に入ってたから、何と云うか?」

「ミクちゃんって、もう一人の宇宙人のこと?」

「はい。今行つて聞いてきます。」

ユミは裏口から出て行つた。数分で戻つて来た。

「おねがいします。作ってください。と言つてました。それから、プラスチックのは捨てないでください、と。」

「そうですか。じゃあ、早速寸法を取りに行きましょう!」

「今からですか?」

「はい。神主さん、紙とエンピツと定規を貸していただけますか?」

「ああ、いいですよ。」

神主は、三十センチの定規と紙とエンピツを紙台つきで手渡した。

「さあ、一緒に行こう、ユミちゃん!」「はい!」二人は出て行つた。

二十一世紀の主要食

「ミクちゃん、一男さん、連れて来たわ!」

ミクは、巣箱から顔を出した。

「こんにちわ。」

「はじめまして。僕、若井一男です。」

「わたしは、ミク。よろしく〜。」

「木の巣箱を作りに来ました。」

「木で作るんですか?」

「はい、そうです。大きさは、これと同じでいいですか?」

「そうですね〜、もう少し大きいほうがいいです。ユミちゃん、どう思う?」

「わたしも、もう少し大きいほうがいいと思うわ。」

「じゃあ、もう少し、大きく広く、ね。」

「はい。」「はい。」

一男は、神社の渡り廊下から、プラスチックの巣箱の寸法を測った。神社の中の部屋は壊れて、床板が見えていた。

「この床板、使えそうだな〜。」

「その床板で作るんですか?」

「うん。綺麗に洗ってからね。」

「器用ですね〜。」

「大したもんだわ!」

「まだ作ってないよ。ちゃんと作ってから言つてよ。」

「そうですね。」

「ははは。」

「よし、この床板、使ってもいいか、神主さんに聞いてみよう!」

一男は去って行った。ポン太は、草葉の陰から、一男を見ていた。

「人間って、何でも出来るんだな〜。おいらの玄関にも、ドアが欲しいな〜。」

一男は、大きな釘抜きとトンカチを持って戻って来た。

床板を二枚外して帰って行った。

一男は、管理小屋の横で作り始めた。「先ずは、下書き下書きと！」

神主が出て来た。

「一男君、お願いがあるんだけど。」

「何でしょうか？」

「巣箱のことなんだけど、巣箱が彼女たちの住まいってこと、内緒にしてくださいませんか。彼女たち、とっても神経質なもので、大勢人がやってくると嫌がるんですよ、どうかへ行っちゃうかも知れないし。」

「分かりました。僕だけの秘密にしておきます。それに、あまり近づきません。」

「ありがとうございます。」

幸子が、駆けてやって来た。

「お兄ちゃん、何やってるの？」

「小鳥の巣箱を作っているんだよ。」

「どうして、そんなことしてるの？」

神主が援助した。「僕が頼んだんだよ。」

「ふゝゝん、お兄ちゃん、頑張つて！」幸子は去って行ったて、神主と一緒に出て来た。

「一男くん、これ何だろうねゝゝ？」

お椀に入れてあった。小鳥の餌みたいな感じだった。

「さゝゝゝ、粟でも稗ひえでもないし…何なんでしょうね？」

森本が入った袋を見せた。

「Quinua、キヌアって発音するのかなゝゝ？」

「キヌアですか？ちよつと携帯から百科事典を調べてみますね。」

一男は、携帯を取り出し、検索を始めた。すぐに出て来た。森本は驚いた。

「早いねゝゝ、さすが検索の達人！」

「アンデス地方原産の穀物。キヌアは栄養価が非常に高く、またアミノ酸のバランスが優れていることより、近年ヨーロッパや日本などで健康食品として注目されてきている。アメリカ航空宇宙局が理想的な宇宙食の素材の一つとして評価し、二十一世紀の主要食と述べている。」

「理想的な宇宙食！」

「二十一世紀の主要食。」

「タンパク質の含有率が他の穀物と較べて多く、その構成は牛乳と似ている。グルテンを含まないため、小麦アレルギーのような対グリアジンアレルギーを持つ人でも摂取できる。アミノ酸はリシン、メチオニン、イソロイシンなどの必須アミノ酸を多く含み、その量は白米に匹敵するかそれよりも多い。」

神主は、せっかちだった。

「能書きは、よく分かったよ。どうやって料理するんだい？」

「え〜〜と、待ってください。」

「ボリビアやペルーでは、スープに入れてよく煮たものを食べる事が多い。煮たキヌアは軽いプチプチとした食感があり、わずかにくせがある。他の食材の味をあまり変えないので、様々な味のスープに合わせる事ができる。現代ペルー料理では、キノット、キヌアのリゾットにもする。果物と煮て甘い飲み物にすることもある。また、小麦粉とあわせてクッキーやパウンドケーキやパンの生地にして焼いて食べる事もある。日本では、白米に混ぜて炊いて食べるのがブームになったことがあった。」

「ご飯に混ぜて炊くのか〜。じゃあ、やってみるか！」

森本と一男は、しきりに頷いていた。アングアルシアが飛んでいた。

狸山の赤トンボ

森本は、一男に尋ねた。

「一男君、さつきから何作ってるの？」

「小鳥の巣箱です。」

神主が加勢した。「わたしが頼んだんですよ。プラスチックじゃ、やっぱり駄目ですね。」

「プラスチックじゃ駄目ですよ。小鳥は近づきませんよ。」

「やっぱり、木で作らないとね。」

「それにしても、一男くんは器用だな。」

「そんなことはありませんよ。以前、趣味で作ってたもので、慣れているだけです。」

「いや大したもんだよ。その鋸の使い方、まるで大工みたいで大したもんだよ。」

「うん、大したもんだ。慣れてる手つきだ！」

「まあ、頑張つて！」「はい。」

二人は去つて行つた。

三時過ぎだった。若井夫妻と、妹の幸子がやって来た。

「ほらね、お兄ちゃん何か作ってるでしょう。」

「さつき言つたろ、小鳥の巣箱だつて。」

神主さんに頼まれたんだつて？」

「そうなんだ。」

幸子は、ソーセージを食べていた。「なんだよ、そのソーセージは？」「おやつ。」

「一男は器用だな。何か手伝おうか？」

「いいよ、父さんは不器用だから。怪我でもしたら大変だから。」

「それもそうだな。」妙に納得していた。

「あつ、そだ！この切った板、小川で洗ってきてくれない？」

「ああいいよ。そのくらいはできるよ。」

「あなた、わたしが洗ってくるわ。あなたは、いい加減だから。」
「まいったな〜。」「お手上げの隆次父さんであった。」

「あ〜疲れた！御茶でも飲むか。父さんも飲む？」「じゃあ、飲むか。」

「幸子は？」「わたしも飲むわ。」「三人は、管理小屋に入って行った。」

映見も仕事を終え入って来た。

「今日は、小川の水が少なかったわ。」

小川の水は、途中で二手に分かれ、炊事場の下水に流れていた。

「幸子ちゃん、わたしの湯呑み取って。」「はい。」

湯呑みには、それぞれマジックで名前が書かれていた。

貯水タンクの水は、管理小屋と炊事場に流れていたが、残りわずかになっていた。

隆次父さんが神主に尋ねた。

「水は大丈夫ですか？」

「雨溜め機能を使ってるんですけどね〜。最近雨も降らないし、困っていますよ。」

「そうですか〜。」「

「あとは、小川の水だけが頼りですね〜。」「

七輪の炭火が弱くなってきたので、神主は炭を一個追加した。七輪の炭は、いつも二個か三個燃えてるだけだった。

三人の若いテレビスタッフが帰って来た。

彼らは、神社の軽トラックに、米や小麦粉や缶詰などを載せて配ってきたのだった。

「近所五軒に配って来ました。残りは、崖崩れで、どうしても通れず断念しました。」

「ごくろうさまでした！御茶でも飲んで。」

「わたしたち。小川の水でオレンジジュースを飲んで来たから、結構です。」

「オレンジジュース？」

一人のスタッフが、レジ袋に入ってる、粉ジュースと紙コップを見せた。

「これ、いつも持ち歩いているんです。」

「それは、いいアイデアだね。」

幸子が、ねだった。「わたしも、ジュース飲みたいな〜。」

映見が叱った。「バンガローに帰ったらあるでしょう!」

「あつ、そうか!」

「じゃあ、わたしたちは、これで。」

三人のスタッフは、狭い管理小屋から出て行った。

神主は、一男に尋ねた。「鳥小屋は、どう?」

「今日中にはなんとか。」

「早いね〜。」

「単なる四角い箱ですから。じゃあ、仕事の続きを。」

一男は出て行った。

映見は、キヌアの袋に目が行った。

「あつ、キヌアだ!」

「御存知で?」

「はい、以前に友人の家で食べたことがあります。」

「そうですか。」

「それ、炊くと、少し青くさい匂いがするんです。だから、混ぜご飯にして匂いを誤魔化すといいんです。」

「ああ、そうなんですか。いいこと聞いたな〜。」

若井家族も、「ごちそうさま!」と言うと、出て行った。

外に出ると、無数のアキアカネが群れをなして飛んでいた。幸子は叫んで追い掛けて行った。

「わ〜〜い、赤トンボだ〜!」

新しい巣箱

夕暮れ迫る頃、一男は管理小屋に戻って来た。

「できました！ニスも塗っておきました。」

「ニスまで塗ったの？」

「あつたものですから。小鳥の巣箱だと、ニスは厳禁なんですが、小鳥が住むのではないので、塗っておきました。」

「きつと、彼女たちも喜ぶよ。」

「一晩乾かせば、オーケーです。」

「じゃあ、早朝取り付けに行きましょう！」

「はい。ところで、神社の裏の御風呂場の屋根が開いたままになつてますけど、いいんですか？」

「あれはね、わざと開けてあるんですよ。」

「わざとですか？」

「雨水を風呂桶に溜めるために開けているんですよ。」

「な〜るほど！」

お風呂は、プロパンなので使えたが、水が無かった。だから、水があつても風呂桶の湯を、身体にかけて洗って使っただけだった。風呂桶に入るとは禁止されていた。

シャワールームは、もつたないの理由で水道の水を止めたので、使えなくなつていた。

「だったら、雨樋あまどいの水も入れたらどうでしょう？」

「いい考えだけど、やるのはちょっと大変だよ。」

「じゃあ、僕やってみます。」

「じゃあ、頼むよ。」

「余分な雨樋とかはありませんよね？」

「そんなのはないよ。」

「それじゃあ、壊れた神社の雨樋を取り外して使ってもいいですか？」

「いいけど、神社が壊れるかも知れないから、注意しなよ。」
「分かりました。注意してやります。」

朝がやって来た。一男は、六時にやって来た。

「おはようございます。」管理小屋のドアをノックした。中から、神主の声が聞こえた。

「入ってもいいよ。」

「おはようございます。」

「待ってたんだよ。さあ行こう!」

神主は、細いビニールのロープを持っていた。

「これいいだろう。荷造り用のロープだよ。」

「いいですね〜、細くて。」

「これなら使えるでしょう。」

「使えます、使えます!」

それは、巣箱を固定するためのロープだった。

「あつ、ちよつと待って下さい。水平器、水平器!」

一男は、道具箱から水平器を取り出した。

神主は、レジ袋を持っていた。

「それ何ですか?」

「今朝、トウモロコシ粉を練ってフライパンで焼いたんだよ。」

「味付けなしですか?」

「うん。」

神主は、一つ食べてみた。

「うん、なかなかいけるよ!」

「じゃあ、わたしも後で。」

二人は、ミクの巣箱の前で立ち止まった。神主が声をかけた。

「おはよう、ユミちゃん、ミクちゃん。」

「おはようございます!」「おはようございます!」

ユミが顔を出した。

「何ですか、朝早くから?」

「木の巣箱ができたんだよ。それで、取り付けに来たんだよ。」

「もう、出来たんですか？」

「早いだろう。一男君は、何でも早いんだよ。」

ミクも顔を出した。

「どれですか？」

一男は、木の巣箱を見せた。

「わくくくあ、かっこいいわくくく！」

「どこにつけようか？」

「じゃあ、この巣箱をどかしたところでいいわ。」

「つまり、同じところね？」

「そう。」

一男と神主は、ユミとミクを追い出し、プラスチックの巣箱を取り除くと、新しい木の巣箱を取り付け始めた。

一男がユミに頼んだ。

「ユミちゃん、水平器を入れるから見ててくれない？」

「水平器？」

一男は水平器を見せた。

「平らを図るもの。泡の位置が真ん中だったらいいんだよ。」

「これが、真ん中だったらいいのね。」

「そう。」

一男は水平器を、巣箱のなかに入れた。ユミも巣箱の中に入って行った。

一男と神主は、ロープで巣箱の四隅と木の枝とを結んで行った。巣箱の四隅には、既に穴が開いていた。

「どう、ユミちゃん、真ん中になってる？」

「右に行ってるわ。」

「右って、言っと、こつちを上げるんだな、どう？」

「真ん中に来たわ。」

「じゃあ今度は、九十度方向。ユミちゃん、水平器を縦方向にしてくれない？」

「これを動かすんですか？」

「そう。」

「うんしょ！うんしょ！とても重くて動かせないわ！」

「あつ、ごめんごめん！」

一男は、手を巣箱の中に入れ、水平器の方向を変えた。

作業は、少し手こずったが、無事に終わった。

ユミとミクは中に入った。

「わ~~~~あ、最高~~~~！」

「いい気分だわ~~~~！」

最後に、一男は新しい雑巾を画鋏で止めて、玄関に垂らした。

「小鳥じゃないから、入口は四角にしたよ。」

「これのほうがいいわ~~~~。」

「四角のほうがいいわ~~~~。」

一男は、プラスチックの巣箱から、雑巾の布団と木綿のハンカチの毛布を取り出すと、木の巣箱に入れた。

「あとは、てきとうに二人でやって。」「はい。」「はい。」

神主は風呂場を指差した。

「さあ、今度は風呂場に行きましょう！」

狸のポン太が、草場の影から二人を見ていた。

神社の守り神

風呂場の中央に、穴が木で塞いであった。

「高田さん、この穴は？」

「この穴は、以前煙突に使ってた穴だよ。」

「今は何にも使ってないんですね？」

「そうです。」

風呂場の窓を開けて見ると、ちょうど風呂桶の上に位置していた。

「ここに雨樋を通しましょう。」

「雨樋は？」

「一男は、神社に向かった。」

「この神社の垂直の雨樋を外して使いましょう。これだと、上下あつて筒状になつてるので便利です。」

「これ外すの？」

「簡単ですよ。梯子に登って、道具を使えば。大きな釘抜きでも外せますよ。」

「ああ、そう。」

「ついでに、母屋の雨樋も、風呂場に繋げましょう。」

「そんなことできるの？」

「できますよ。簡単です。」

「ああ、そ〜う！」

「けつこう時間はかかりそうですけど。」

「じゃあ、ゆつくりと朝食をしてからにしよう！」

「はい。」

ポン太が、草むらから出て来た。二人はびっくりした。

「何だ？」「狸だ！」

ポン太は、ユミの言葉を思い出した。軽く頭を下げた挨拶した。

「あれ〜、この狸、おじぎしてる!？」

「頭を下げたね、今!？」

好感触だったので、もう一度、頭を下げた。

「こんにちわって、言ってるみたいだな？」

「そうですね。」

「可愛い狸だな〜。」

「こんな狸、初めてですよ。」

神主は、手に持っていたレジ袋から、トウモロコシ粉の練り物をフライパンで焼いたものを取り出して、放り投げた。

ポン太は、またまた頭を下げて、食べ始めた。

「お〜〜う、素晴らしい狸だ！」

「こいつは、びっくりですね〜。」

食べ終わると、またまたまた、頭を下げて去って行った。

「いや〜、まいった！」

「不思議な狸だな〜。」

二人は、巣箱に戻った。

「おかえりなさ〜い！」「風呂場も作り直すんですか？」

「うん、ちよつとね。君たち、挨拶する狸って知ってる？」

「ああ、ポン太のことですね。」

「ポン太？」

「この前の地震で、巣穴が潰されて困っていたので、犬小屋をやったんです。言うのを忘れていました。ごめんなさい。」

「いいんだよ、そんなことは。そうだったのか〜。あの狸、可愛いね〜。」

「そうですね。」

「うん、とっても可愛いよ。これから、この神社の守り神にしよう！」

「えっ、ポン太が？」

「ああ、そう伝えておいてね。テレパシーで。」

「分かりました。」

ポン太は、草場の影から二人を見ていた。

神主は、プラスチックの巣箱を拾い上げた。

「どこに捨てようかな〜?」

ミクは驚いた。

「捨てないでください。せっかく神主さんが買ってきたものを!」

「じゃあ、どうする?」

「管理小屋のどこかに置いておいてください。わたしたちが小屋で寝るときもありますから。」

「あつ、そう。じゃあ、どこかに設置しておくよ。」

「おねがいます。」ユミも「おねがいます。」と言った。

二人は、管理小屋に戻って行った。小鳥たちが、新しい木の巣箱を見ながら、ああでもないこうでもない、そうである。と、さえずり合っていた。

エンジンポンプ

「神主さん、農業用のポンプで、小川の水を貯水タンクに汲み上げたらどうでしょう？」

「実は、わたしも最初は、そう考えていたんだよ。で、近くの農家を回ってみたんだけど、どこも無いと言われてね。」

「農家で、ポンプが一台もないというのも、不思議ですね……。自分の家で、小川の水を引き込むに使っているんじゃないですか？」

「そうかも知れない。が、もしそうだとしても、こっちは何も言えないよ。」

「まあ、そうですね……」

「うちにも、どっかにあったような気がしたんだけどな……。」

「エンジン式のやつですか？」

「確か、四サイクルのガソリンエンジンのやつだったかな……。使ってたんですか？」

「昔、三十年以上も前のことで、わたしの父が、今のキャンプ場で果樹園をやっていたね……。そこで、水撒きに使っていたんですよ。」

「ホースを含むと、かなりの大きさになると思っんですけど？」

「そうですねですよ。それだけのものと、直ぐにでも見つかるはずなんですけどね……。」

「不思議ですね。」

「誰かに、やつちゃったのかな……？」

「誰か他に知ってる人はいないんですか？」

「母親も死んじゃったし……。そうだ兄貴に聞いてみよう！」

神主は携帯電話を取り出した。

「あつ、兄貴。ちよつと尋ねたいことがあるんだけど……」

「あつ、そうなの！分かった、どうもありがとう！」

携帯電話をしまった。

「分かったよ！神社の本殿の床下だつて！」

「そんなところに！」

「行ってみよう！」

「はい！」

神社に着くと、本殿に上がった。床板も賽銭箱も、地震で、ばらばらになっていた。

「床板は、はじめっから乗せてあるだけだったからね。」

二人は、足元に用心して進んだ。一男が立ち止まって指差した。

「あれじゃないですか、高田さん！」

それらしい物が見えていた。

「あれだ！」

「かなり重そうですね。」

「若い人を呼んで来よう！」

神主は、キャンプ場に早足で戻って行った。そして、若いテレビスタッフ三人と一緒に戻って来た。

「これ、どうやらエンジンポンプらしいんだ。持ち上げてくれない。」

「

「分かりました。」

三人は、床板を外し、下りた。そして、二人がかりで持ち上げた。上で、残りのスタッフと一男が受け取り、神社の下まで運んだ。

「重かったでしょう？」

スタッフが言った。「三十キロはありますね。」

床下にいた二人のスタッフが、ホースを持って来た。

「これを、どこに？」

「小川から、貯水タンクに流そうと思ってるんですよ。」

「それは、いい考えですね。」

「これ、ガソリンで動くんですか？」

「そうです。」

「ちよつと待って、リアカーを持って来るから。」

神主は、リアカーを取りに行った。キャンプ場に着くと、管理小屋

の前に止めてあつた軽トラックからガソリンを抜いて石油容器に入れて持って来た。

ポンプを、貯水タンクの真下まで持って行った。ガソリンポンプのガソリントankに、ガソリンを入れた。

「よし、入ったぞ!」

一人のスタッフが、貯水タンクに付いている梯子で上り、ホースの中に差し込んだ。二人のスタッフは、小川までホースを伸ばし、流れる水の中に入れた。

神主が、一気にスターターの紐をストローカー一杯引つ張りつた。

「あれっ!?!」

エンジンは掛からなかった。

一人のスタッフが教えた。彼は農家生まれの農家育ちだった。

「丸いプライマリーポンプというのがあります。それを数回押してください!」

「あつ、この丸いやつね?」

「そうです。後は、わたしがチョークレバーで調整します。」

神主は、言われた通り、数回押し、再度スターターの紐を引つ張つた。エンジンはブルルンと唸って掛かった。

水は汲み上げられ、貯水タンクに入つて行った。

みんなは歓声を上げた。

「やった~~~~!」

地軸移動砲

月面ではナロン星人が、次の地軸移動砲の発射を着々と準備していた。

指揮命令しているのは、ナルという提督だった。

「エレルギー充填まで、あと何日だ？」

副提督が答えた。「あと、三十五日です。」

「待ち遠しいな……、充填時間が、この武器の欠点だな。」

「そうであります！」

「ところで、狸山の猿の観察は、どうなつとる？」

「はい、今日は朝から、小川の水を貯水タンクに、エンジンポンプとやらで汲み上げています。」

「ほ……、それは面白い。で、どうなつた？ 水は汲み上がったのか？」

「はい。」

「猿知恵にしては、大したものだ。今後も観察を続けよ。決して猿を殺しては駄目だぞ。」

「はい。いざというときは、いつも助けています。」

「それでいい、それでいい。地球人が、生きるに値するか、今後も観察しなきゃあな。」

「はい、分かっております。」

ナロン星人が、狸山の人々を助けたのも、生きるに値する生物かを確認するためだった。どのくらいの知恵があつて、どのくらいの適応能力を持つてゐるかを確認するためだった。

「不合格の場合は、また地軸移動砲を発射するしかないな。」

「はい！」

地軸移動砲は、中性子エネルギーで、地球の内核に向けて放たれ、個体の内核に命中し、液体の外核を揺らし、地軸を移動して、マントルを揺らし、マグマを移動して、巨大地震を発生させるものだった。

た。

地球のコアは、地下二千九百キロメートルから五千百キロメートルの外核は液体で、地下五千百キロメートル以上の内核は固体になっていた。この個体の揺れが巨大地震を発生させるとメカニズムであった。

「もし不合格の場合は？」

「地軸移動砲を使うしかないな。百回くらい繰り返せば、低脳な地球人くらいは滅びるだろう。」

「そうですね。もともとは猿ですからな。」

「猿ごときが、生き延びたら、宇宙は下品で大変なことになるからな。」

「はい、そうですね。」

「これが、銀河宇宙連盟の下した命令だ。われわれは、それに従って行動するのみ。」

「はい、そうですね。」

「同じ宇宙人として可哀想だが、宇宙の平和と安全のためだ、仕方がない。悪い病原菌は、早く殺さないとな。」

「はい、そうですね。」

地軸移動砲は、暗黒の風景のクレーターの中から美しく青い地球に向けられていた。

日本に揺らした最初の一撃は、地球人の反応を観測するためのものだった。

「あんな美しい星なのにな、猿程度の人間しかいないとは、残念だな。」

ナル総督は、虚しく悲しく地球を見ていた。月面には、一切の風は無かった。虚しい暗黒の空と、宝石のように光るだけの、大気という生命のベールのない天空を、物理法則に従って点滅している星々だけだった。

「ところで、その前の物資は、いったいどこから運ばれて来たんだ？」

「すみません。その時間は観察してなかったもので。分かっています。」

「ちゃんと、一日中観察しろ！」

「はい。すみません！」

「一トンもの物資を、あんなところに一瞬に運ぶなんて、とても地球人には出来ないしな〜、おかしいな〜。」

お祝いの歌

ユミとミクは、新しい巣箱を祝って、お祝いの歌を歌っていた。

ほいほいほ～～いの　よいよいよい♪
今日はめでたい　喜びの～～誕生日
ほいほいほ～～いの　よいよいよい♪
お祝い　お祝い　楽しいな～～♪
よいよいよ～～いの　ほいほいほ～～い♪

狸のポン太は、下でその歌を聞いていた。お昼過ぎのことだった。
ポン太は、下で拍手をしていた。

「お上手、お上手！」

ユミは雑巾のドアから、顔を出した。

「あら、ポン太さん、聞いてたの？」

「うん、聞いてたよ。いい歌だね～～。」

「わたしが作ったのよ。」

「上手だね～～。」

「ポン太さん、お昼は食べたの？」

「農家の柿を拾って食べたよ。」

「ああ、そうなの。大変ねえ。」

「ちつとも大変じゃないよ。いつものことだよ。」

「そうなの？」

「そのドア、いいねえ。」

「とつてもいいわよ。風を防げるの。」

「おいらも欲しいな～～。」

「今度、一男さんに頼んでみるわ。」

「ほんと！それは嬉しいな～～。」

神主がやって来た。ポン太は、草むらに身を潜めた。

「お風呂は、こちらです。どうぞ、どうぞ！」

一緒に歩いているのは、映見と幸子だった。

「ここです。なるべく、次の方のために、身体を洗ってから湯船に入るようにしてくださいね。」

「はい、分かりました。」

「風呂釜の使い方は分かりますね。」

「はい。」

「では、ゆつくりと！」

神主は、キャンプ場に戻って行こうとして、巣箱の前で立ち止まった。

「ユミちゃん、ミクちゃん！」

二人は顔を出した。「はい。」「はい。」

「君たちも、お風呂に入りたかったら、言つて。」

「はい。水は出るんですか？」

「さつき、小川の水をタンクに入れたから大丈夫だよ。ご心配なく！」

「どうやって入れたんですか？」

「ポンプを使つたんだよ。」

「さつき神社の本殿から運んだやつですか？」

「そう。今日はいいい天気だよ。君たちも、外に出てみたら？」

「はい。」「はい。」

神主は去つて行った。

二人は、外に出ると大きくなつて、丸い籐の座布団を、桜の木の下に敷くと、そこに座り、あやとりを始めた。

ポン太がやつて来て、二人を不思議そうに見ていた。

「何やってるの？」

「あやとり。」

「あやとり？おいらもやりたいな〜。」

「その手じゃ、無理よ。」

映見と幸子が、お風呂場から出て来た。ポン太は、草むらに隠れた。

しばらくすると、一男がやって来た。

「やあ、君たち。あやとり？」

「そう。」「そうです。」「

一男は、そのまま行こうとした。

「あつ、ちよつと待って、一男さん！」

「なあに？」

「ポン太さんの犬小屋のドアを作ってくれない？」

「ドア？」

ポン太が出て来た。ペコリつと頭を下げた。

一男はびっくりした。「面白い狸だな」。まるで言葉が分かってるみたいだな。

ポン太は近づいて来た。

「お、可愛いな」。一男は、ポン太の頭を撫でてやった。

ポン太に尋ねた。

「犬小屋って、どこにあるんだい？」

ポン太は、案内を始めた。

「一緒に来いってか。まいつたな」。

ポン太は犬小屋まで案内した。

「これか」。分かった、考えさせてくれ！」

ポン太は、二度首を上下に振った。

「言葉が分かってるのか、凄い狸だな」。

お見舞い

「ミクちゃん。奥さんの見舞いに行きましょう！」

「行きましょう！」

二人は、歩いて管理小屋に向かった。裏口から入って行つた。

「奥さ〜ん、大丈夫ですか〜？」

「涼子さ〜ん、大丈夫ですか？」

涼子は、小屋の隅で寝てた。

「大丈夫ですか？」「大丈夫ですか？」

「大丈夫だけど、果物が欲しいわ。」

「どんな果物が？」

「イチジクとか、桃とかが欲しいわ。」

「分かりました。」

「泥棒はしちや駄目よ。」

「…はい。」

ドアをノックする者がいた。ユミはドアを開けた。隣の隣の小池の奥さんだった。

「小池です。昨日は、貴重な物、大変ありがとうございました。」

奥さんが返事した。「いいえ、困ったときは、お互い様です。気になさらないでください。」

「御礼と言つては何ですが、果物を持つて来ました。みなさんで召し上がってください。果物しかないもので、すみません。」

「とんでもない。わたし風邪を引きまして、今果物が欲しいと思つてたところなんですよ。」

「それは、ちょうど良かった。」

後ろで、小池さんが、箱を抱えていた。小屋の中に運んだ。

「これが、桃です。」外に出て、また箱を入れた。「これが、イチジクです。」もう一箱入れた。「これが、巨峰です。」

「わ〜〜、こんなに沢山！」

「いいんですよ、どうせ売れないんですから。」

「どうもすみませんねえ〜。」

「こういうときは、お互い様です。何か不自由な物や事があったら、遠慮しないで言うてください。」

「はい、そうします。わざわざありがとうございます。」

「じゃあ、お大事に！」

小池夫妻は、頭を下げ去って行った。

「奥さん、イチジクも桃もあるわ！」

「グッドタイミングね。きっと神様がいるのね。」

「どっちを食べます？」

「じゃあ、イチジクを食べるわ。皿にのせて二つ取って。」

「はい！」

「あなたたちも食べなさいよ。」

「はい。」「はい。」

ユミはイチジクを、ミクは桃を取った。

「あら、ミクちゃん、巨峰じゃないの？」

「今は、桃が欲しいの。」

奥さんは、美味しそうに、イチジクを食べていた。

「あ〜〜、美味しいわ〜〜！病気になる、どうしてこういうものが欲しくなるんだろうね？」

「さ〜〜、どうしてなのでしょうね〜？」

「ミクちゃん。巨峰が欲しかったら持って帰ってもいいわよ。」

「は〜〜い、そうしま〜〜す！」

ミクは喜んでいた。「じゃあ、わたしは、桃を持って帰ってもいいですか？」

「いいわよ。欲しいだけ持って帰ってもいいわよ。」

「欲しいだけ？」

「そんなに持つて行っちゃあ、駄目よ！」

「は〜〜い！」「は〜〜い！」

涼子は、妖精が果物が大好きなことを、すっかり忘れていた。

果物を食べた後、ユミとミクは御茶を飲み始めた。

「奥さんも飲みます?」「わたしにもちようだい。」

「イチジクには、ビタミンがたくさんあるのね。なんだか少し元気になって来たわ。」

奥さんは、上体を起こした。

「あなたたちの顔を見ると、なんだか元気になってくるわ。」

「そうですか?」「そうなんですか?」

「アンデスの話しが聞きたいわ。」

「はい。」「はい。」

ユミとミクは、アンデスでの出来事を話し始めた。

機械鳩

管理小屋から外に出て、貯水タンクを見ていると、鳩がタンクの上に止まっていた。

「ミク、あの鳩見て。何か変な鳩よ、動きが変だね。」

「そうね、変な感じね……」

一男がやって来た。「どうしたの?」

「一男さん、鳥に詳しいんでしょう?」

「まあね。」

ユミは指差した。

「あの鳩見て。何か変じゃない?」

「変と言えば変だね。あんなところに、一羽でいるってもの変だね。動きもおかしいし……」

「でしょう。」

「で、どうするの?」

「捕まえて確かめようと思って。」

「捕まえる? どうやって?」

「ミク、おつかぶせ作戦で行きましょう!」

「オーケー!」

ミクは小さくなって、瞬間移動した。黒い袋を持って戻って来た。ユミに手渡した。

「これ、ゴムが付いてるの。わたしが瞬間移動して、あの鳩の上に乗る、こいつを鳩の頭にかぶせるわ。視界を失いバランスを失って落ちるから。それを、一男さん、下で捕まえてください。」

「オーケー、分かった!」

「じゃあ、行きます!」「いいよ!」

小さくなったユミは、瞬間移動して鳩に飛び乗った。素早く黒い袋を、鳩の頭にかぶせた。鳩はバランスを失って落下した。一男は急いで、落下地点に走った。両手で捕獲した。ユミは降りて来て大き

くなつた。大きいミクも駆け寄つて来た。

「こいつは、機械だよ！」

「え〜〜〜〜！？」「機械の鳩だったの！？」

三人は驚いた。羽をばたばたさせていた。

「脚をしばらく！」一男は管理小屋に走った。脚を縛つて出て来た。突然、鳩が口から火を吹いた。黒い袋は燃え上がった。

慌てた一男は、手放し、近くにあった大きな石で、鳩の頭を砕いた。
「あ〜〜、びっくりした！」

それを見ていた、テレビ局のスタッフたちが駆け寄つて来た。

「なになに、どうしたの！？」森本だった。

「これ、機械の鳩なんです。」

「機械！？」

スタッフたちは、驚きの表情で、横たわつてゐる鳩を見ていた。

森本は、足で蹴飛ばした。がちゃがちゃと転がって行つた。「ほんとだ、機械だ！」

一男は、熱心に機械を見ていた。「よくきてるな〜〜。」

「こんなもの、今の人間にはできないよ。」

「そうですね。」

森本は、ユミとミクに尋ねた。「君たちが作ったんじゃないの？」

「いいえ、とんでもない。」「こんなもの作りません。」

「じゃあ、誰が作ったんだろう？」

「いったい、何のために作ったんでしょうね？」

「そうだな〜〜、いったい何をやってたのかな〜〜？」

スタッフの一人が言った。

「やっぱり、人間が作ったんですよ。どこかの趣味人が。」

「趣味で、火まで吹くか？」

「吹くかも知れませんが。」

「そうかな〜〜？何のために、こんなところで？」

「実験とかじゃないですか？」

「この非常時に？」

「非常時に役立つものかも知れませんよ。」

「そんな人間がいるのかな〜、この非常事態の世の中に？」

「そう言われれば、そうですね。」

「とにかく、不思議だ！」

アンダルシアが不思議そうに、空を飛んでいた。降りて来た。

「何かあったんですかい？」

森本は指差した。「これ、機械の鳩！」

「え〜〜〜〜！？」

アンダルシアは、右足でつまんだ。「ほんとだ！？」

赤トンボ

森本は、金槌で機械鳩を砕いていった。中から、見たことのない素材と部品が出てきた。

「やっぱりこれは、地球のものではないな……」

一男は森本の前で見ていた。

「ってことは、われわれ人間が作ったものじゃない？」

「そういうことになるね。つまり、宇宙人が作ったもの。」

森本は、改めて、ユミとミクに尋ねた。

「ユミちゃん、ミクちゃん。ほんとうに、こういうの見たことないの？」

「見たことないわ。」「はじめて見たわ。」

「じゃあ、君たちは、こういうの作れる？」

「わたしは作れないわ。でも機械屋さんだったら作れると思うわ。」

「専門家だったら作れると思うわ。」

「君たちには作れない。でも、仲間だったら作れるってことね。」

「まあ、そういうことです。」「そういうことです。」

「じゃあ、やっぱり、君たちの仲間が作ったのかな……？」

一男が反論した。

「でも、宇宙人はホイホイ星人だけじゃあないでしょう。この前来た宇宙人は、ナロン星人とか言っていましたよ。」

「ナロン星人か……、じゃあ、ひよつとしたらナロン星人かな？」

「でも、彼らは、われわれを助けてくれましたよ。」

「助けたことと、機械鳩は関係ないんじゃないか？」

「そうかも知れませんが、他にも宇宙人はいるんじゃないでしょうか？」

「われわれの知らない宇宙人が？」

「はい。宇宙は広いですから。」

「そうかも知れないな……。」

スタッフの一人が言った。「この機械鳩、スパイロボットじゃないでしょうか？」

「スパイロボット？われわれをスパイするために？」

「そうですね、われわれをスパイしたって、何も出てきませんよね」。

「何も出て来ない…何も出て来ないかな？」

「じゃあ、監視ロボットとか、見張りロボット？」

「うううん、そういうのも考えられるな」。

夕暮れが迫っていた。またも赤トンボの大群が飛んでいた。幸子は無邪気に追い掛けていた。

それを、ブリキのユーフォーの中から、コスモスの蜜を吸いながら見ていたユミとミクであった。

二人は大きくなって、幸子と一緒に、赤トンボの群れを追い掛けはじめた。

三人は、いつの間にか友達になっていた。三人は笑い合いながら追い掛けていた。

赤トンボは、今も昔も同じだった。三人は、遠い日々の赤トンボを追い掛けていた。

幸子は幼かったときの赤トンボを、ユミは屋久島の赤トンボを、ミクは道草神社の赤トンボを。

三人の心の中に飛んでるのは、昔の赤トンボであり、今の赤トンボであった。

夕焼小焼の赤トンボ 負われて見たのは いつの日か…

妖精は神の子

「提督、非常事態です！」

「どうした！？」

「スパイ鳩が見破られて、破壊されました！」

「なに！？」

少女二人に見破られて、不思議な方法で落とされ、破壊されました。

「

「どうやって見破られたんだ？」

「分かりません。」

「不思議な方法って、何だ？」

「黒い袋をかぶせられ、目が見えなくなつて落下しました。その後、破壊されました。」

「なかなか頭がいいじゃないか。猿ながら大したもんだ。」

「あの少女二人、ただ者ではないと思われます。」

「そのようだな。」

「破壊直前の映像では、あの少女は、いきなり身体が小さくなり、鳩の背に瞬間移動しています。」

「身体が小さくなり、瞬間移動……」

「不思議なことに、機械などを介さずに行なっています。いったいどういうことでしょうか？」

「それは不思議だなあ、そういう芸当のできる人類は、銀河宇宙には存在しないな。」

「はい、わたしの知る限り、存在しません。」

「おかしい少女だな？」

「地球人の突然変異種でしょうか？」

「その可能性はあるな。」

「しかし、いかなる突然変異種でも、小さくなつたり瞬間移動までは、物理的に不可能です。」

「それもそうだな。」

「神か？」

「神なんているんでしょうか？」

「いるかも知れんぞ。神でなければ、神の子。」

「ということは、地球の神の子ということですか？」

「そういうことになるな。」

「これは、銀河宇宙で初めての出来事ではないでしょうか？」

「そういうことになるな。これが、ほんとうだと、おそらく、銀河宇宙連盟の命令はくつがえるな。」

「攻撃中止ということですか？」

「そういうことになる！」

「もっと、彼女たちを、調べますか？」

「もっと、調べる！」「はい！」

二人は、暗黒の宇宙に美しく光り輝いている、地球を見ていた。

その頃、ユミとミクは、大きな桜の木の下で、月を見ていた。

「森本さんが、あの鳩は、どこかの宇宙人のスパイ鳩って言うたわ。今度、また見つけたら、またミクと一緒にやつつけましよう！」「うん！」

ユミとミクは歌い出した。観客は、狸のポン太と木の上のカラスたちと、大きなイチヨウの木の実穴にいるアオゲラの青丸だった。

妖精は 神の子 大地の子 ほしいほゝゝいの ほしいほゝゝいで 気楽に生きてます♪

盗み合い助け合って 一生懸命に気楽に生きてます こりゃいいことだ いいことだ♪

お天道さまに感謝して 毎日楽しく生きてます ほしいほゝゝいで生きてます♪

スパイ狸

次の日の朝だった。ユミとミクが、桃と巨峰で朝食を済ませ、再び小さくなつて、巣箱ですやすやと眠っていると、狸のポン太がやって来た、

「おはよう。」

二人は目を覚ました。

「おはよう。」「おはよう。」

「寝てたの、ごめん！」

「いいわ、起きようと思つてたの。どうしたの？」

「朝、散歩してたら、見たことのない変な狸がいたんだよ。」

「どんな狸？」

「なんか変なんだよ、全体的に。動きもぎこちないし……」

「ロボットみたいな感じ？」

「そう、機械で動いてるような感じ。」

「それ、きつとロボットのスパイ狸だわ！」

二人は飛び起きて、大きくなった。

「どの辺りにいたの？」

「キャンプ場。」

ポン太のお腹が鳴った。

「お腹空いてるの？」

「今朝から何も食べていないんだよ。」

「じゃあ、桃をあげるわ。」

ユミは、ダンボールにしまっておいた桃を二個あげた。

「はい、食べなさい。」

「二個もいいの？」

「いいわ。」

「じゃあ、遠慮なく、いっただきま〜す！」

食べ終わると、ポン太は小さくなった二人を背中に乗せて、キャン

プ場に向かった。

ポン太の背には、ユミが前に、ミクが後ろに乗っていた。

「なかなか、いい気持ちだね。」「毛がふさふさしてて、いい気持ち。」

「どこにいたの？」

「タンクの下。」

「いないわね。」「もういないよ。」

「どうやって探す？」

「歩いて探すしかないね。」

ユミは、カラスをテレパシーで呼んだ。狸山に残ってるカラスが、十羽ほど集まって来た。

「みんな、この辺りに変な狸がいるんだって、その狸を探して。」カラスたちは、アアアアと返事した。アアアアは、分かった、という意味だった。

「カラスたちは、頼りになるわ。」「こういときは、カラスね。」キャンプ場の人たちは、まだ寝ている感じだった。神主さんが、管理小屋の前で、体操をしていた。

「ユミ、ミク、狸なんかに乗って、何してるんだい？」

ユミとミクは、神主の前に行った。

「ロボットの狸を探しているの。」

「ロボットの狸？」

「昨日の機械鳩みたいなロボット狸。」

「そんなのがいるのかい？」

「ポン太が、見たらしいの。」

ポン太は、二回首を振って頷いた。

「狸が狸を、見て言うんだから間違いないな。」

ポン太は、またも二回首を振って頷いた。

カラスからテレパシーが入った。

「変な狸を発見しました！」

「どこ？」

「炊事場の後ろに隠れています。」

「分かった、今行くわ！」

「見つかったか？」

「炊事場にいるらしいわ。」

「どうやって捕まえる？」

「どうやって捕まえましょう？」

「いちばん単純な方法は、カラスたちが囲んで、アンダルシアに掴んでもらって、高い場所から堅い場所に落とす方法だな。」

「硬い場所ですか？」

「そうだな、駐車場が堅いかな。」

「分かりました。」

ユミは、カラスたちに、取り囲むよう命じた。それから、アンダルシアを呼んだ。彼は、すぐにやってきた。

「機械の狸ですって！？」

「カラスが取り囲んでいる、あそこよ。掴まえて高いところから、駐車場に落として。」

「分かりました！」

アンダルシアは、狸の上空まで行くと、急降下した。狸は、一羽のカラスめがけて走った。カラスは、びっくりして投げた。まんまと逃げられてしまった。

妖精のバカ踊り

「なんだか、神主さんの奥さんが寝込んでからは、料理と言えば味噌汁だけで、あとは単なる素材焼きだな〜。」

森本は、ハムとトウモロコシを焼きながら、ぼやいていた。

「野菜も食べないとね。」映見は、近所の農家から頂いたキャベツやピーマンを焼いていた。

それでも、みんなは、楽しく語らい合いながら、食事をしていた。神主はいなかった。

隆次父さんは、満足気に食べていた。「ご飯があるだけでも、有難いですよ。」

ユミとミクが、ポン太に乗ってやって来た。

「こんばんわ〜！」「こんばんわ。」

一男は尋ねた。「何してるの？」

「パトロールです。スパイ狸の。」

「トウモロコシでも食べて行きなよ。ポン太も。」

「はい。」「はい。」

ユミとミクには、小さく輪切りにして醤油をつけて焼いたトウモロコシを皿に五つ、ポン太にも五つ、洗面器に入れて地面に置いた。

ポン太は、あっという間に食べた。森本は驚いた。

「早いな〜。」

自分の生のトウモロコシを一本、皮をはいでナイフで半分に切つて、洗面器に入れた。それから、焼いてる自分のハムも入れてやった。

ポン太は、美味しそうに、ハムを食べてから、トウモロコシを食べ始めた。

「ごちそうさま！」「ごちそうさま！」

ユミとミクが食べ終わり、ポン太が食べ終わると、またパトロールに出発した。歌いながら、

よいよいよゝゝいの　ほいほいほゝゝい
ほいほいほゝゝいの　よいよいよゝゝい♪

森本は笑って二人を見ていた。

「あれじゃあ、こっちの位置を教えるようなもんだな？」

隆次父さんも、笑って見ていた。

「あれでいいんですよ。どっちみち、ばれぱれですから。たんに威嚇してるんじゃないですか？」

「そうでしょうね。彼女たちは彼女たちの考えでやってるんでしょね。」

キャンプ場を二周すると戻って来た。

「何もいなかったわ。これから、駐車場を見てから帰ります。もうここには来ません。では、皆さん、お休みなさい！」

駐車場に向かって、歌いながら出発した。

よいよいよゝゝいの　ほいほいほゝゝい
ほいほいほゝゝいの　よいよいよゝゝい♪

ユミとミクは、大きな桜の木の下に戻って来た。ソーラーランタンの灯りが二人を出迎えて光っていた。

「パトロール終了！」「異常なしでありました、隊長！」「ごくろうであつた！」

ユミとミクは、ポン太から降りて大きくなった。

「ポン太隊員も、ごくろうであつたぞ！」「ちよつと歩いただけですよ。」

「今日のパトロールは、これにて終了！」

「あつ、スパイ狸だ！」

ポン太が、グーで指差した。そこには、草場の影に潜む機械狸がいた。

「こっちを觀察してるみたいね。」

「どうしましょう？捕まえましょうか？」

「駄目、怪我でもしたら損だわ。」

「どうしましょう？」

「観察が目的だったら、大いに見せましょう。何も悪いことはしてないんだから盛大にね。」

「盛大に？」

「ミク、こういうときには、あれよ。」

「あれね！」

「妖精のバカ踊り〜〜〜！」「妖精のバカ踊り〜〜〜！」

「わたしたちが、地震なんかには負けていないと言うことを、愉快に踊って見せてあげましょう〜〜〜！」

二人は、奇妙なステップで、手を上げ踊り始めた。

「ポン太も踊って！」「えっ？」「真似をして踊ればいいのよ。」

「はい。」

ポン太も踊りだした。

「カラスのみんなも、ここに来て踊って！」

カラスたちも、舞い降りてきて、羽を広げて踊りだした。

「青丸も踊って！」アオゲラの青丸も、舞い降りてきて踊り始めた。

よいよいよ〜〜いの　　ほいほいほ〜〜い♪

ほいほいほ〜〜いの　　よいよいよ〜〜い♪

海風

若井親子は、夕食後、バンガローに帰る前に、管理小屋に立ち寄った。

「どうですか、奥さんの様態は？」

神主は、ラジオのビュースを聞きながら、御茶を飲んでいた。

「今、お粥と梅干を食べさせてあげたところです。」

「まだ、お粥ですか……」

「梅干というのは、常温でも腐らずに便利ですねえ。昔の人の知恵は大したものです。」

「そうですね。」

ニュースでは、各地の避難民の様子を伝えていた。

「この下の町の人たちは、今どうしてるか伝えてますか？」

「伝えてます。なんでも高いところの民家や、その近くの空き地に、自衛隊から空輸されたテントに暮らしているそうです。」

「テントですか……。大変だな……。ここはいいほうですね……。」

「そうですね。水も食料もあるし……」

「神主さーっば、おかげです。」

「きつと、お稲荷さんの、おかげです。なにせ穀物の神様ですから。」

「ああ、そうですね。」

「何か困ったことはありませんか？」

「大丈夫です。」

奥さんは、寝ていた。

「じゃあ、お大事に。」

若井家族は、バンガローに戻って行った。隆次父さんは、しんみりと考え込んでいた。

「テント暮らしが……大変だな……。」

妻の映見も、同様に心配気味だった。

「テント暮らしじゃあ、これからは、夜は冷えるでしょうね〜。」

「それよりも、雨とかが大変だよ。」

「そうですね〜。」

ここには、テレビは無かった。

一男が、時々バッテリーを気にしながら携帯電話のワンセグを見ていた。

ときどき、手回しの充電器で充電していた。みんなの携帯にも充電していた。

今も、自分の携帯電話のワンセグでニュースを見ながら、幸子の携帯に充電していた。幸子の携帯には、ワンセグは付いてなかった。

「この手回し充電器が無かったら、万事休すだったね。」

「そうだな。」

幸子の携帯の充電が終わった頃、森本がやって来た。

「すみません。手回し充電器、貸してください。」

「ああ、いいですよ。」

一男は手渡した。

幸子は、早速、友達に電話をしていた。繋がる友達と、繋がらない友達があった。

一人の友達と繋がった。電話の後、一男は尋ねた。

「どうだった？」

「テント暮らしで大変だった。水がないって言ってたわ。」

「で、どうしてるの？」

「あまり出ない古い井戸水を使っているんだって。」

「そりゃあ、大変だね〜。」

風が、木の葉を揺らす音が聞こえていた。一男はぼやいた。

「山は、夜になると風が強くなるんだね〜。」

「海風ってやつだな。」

「海風？」

「昼は海から陸へ、夜は陸から海へと風向が変化する風のことだよ。高い場所ほど強いんだよ。」

「へ〜〜え。」

「風が強いと、テント暮らしも大変でしょうね〜。」映見の友人もテント暮らしだった。

「大変だよ。」

一男は首を傾げた。「もっといい方法はないのかな〜?」

「政府もキャンピングカーとか提供すればいいんだよ。でも道路が先決問題だな。」

「父さん。」

「何だい?」

「今、考えたんだけど、神社で使えなくなった畳があるでしょう。」

「母屋とかのか?」

「そう。あれを切って、壁にすれば、少しは風を防げるんじゃない?」

「それは、いい考えだな。」

「でも、神主さんの許可を得ないとね。」

「今日は、神主さんも忙しそうだから、明日、相談してみよう。」

風は、一段と強くなって来た。

「さてと、ラジオを聞きながら、みんなで話し合う時間だね。」

隆次父さんは、ラジオのスイッチを入れた。ラジオは、電池の節約のために一日に三回一時間と決められていた。

レーザービーム

「わっはっはっは！実に愉快的な神の子だな~~~~！」

ナル提督は、大笑いしながら、スパイ狸から送られてくる映像を見ていた。

「ほいほいほ~~~~いの、よいよいよ~~~~い、か。実に楽しい！」

「はい、さようでございます！」

「動物まで動かすとは、大したもんだ。さすがに神の子だ。」

「大したものでございます。」

「こういう楽しい神の子を殺すのは、宇宙文化遺産の損失だな。」

「さようでございます。」

「直ぐに、この映像を銀河宇宙連盟に送って、判断を仰ごう。」

「はい。直ちに送ります！」

「はっはっはっは、こんな楽しい映像は初めて見たよ。踊りが、実に愉快だ。」

「さようでございます。」

「これを、銀河宇宙の動画サイトにのせれば、きっと一番になるぞ。」

「

「わたくしも、同感でございます。」

「ところで、今地球の避難民は、どうなつとるんだ？」

「大半の者たちは、テント暮らしをしております。」

「不憫なもの哟……」

「どうしたもんでしょう？」

「いちばんいいのは、猿のような地球人は滅ぼして、神の子だけ助けたいところだが、それは難しいようだな……」

「はい、極めて難しいです。」

「とにかく、銀河宇宙連盟からは、猿人類撲滅命令が出ている。連盟が、どう判断するかだな。」

「はい、そうであります。」

「神の子だけは、助けてやりたいな〜。」

「はい。同感であります。」

「提督、この前の一トンもの物資のことですが、提督の言われた通り、やはりホイホイ星人でした。」

「そうか、やっぱりそうだったか…」

突然、警報がなった。

ホイホイ星人のパトロール円盤が五機接近中！

「なに！？」

「どうしましょう、提督！？」

「地軸移動砲を、すぐに地下に隠せ！」

「はい！」

地軸移動砲は、地下に潜りはじめた。

「早く隠せ、早く！」

「はい、今やっております！」隠すのに五分かった。

「間に合いました！」

ホイホイ星人のパトロール円盤が、地軸移動砲が隠れた辺りを、レーザービームで攻撃してきた。

「提督、大丈夫です。地下はレーザーでは破壊されません。」

「そうだな…」

ホイホイ星人のパトロール円盤は、数回攻撃を繰り返すと、去って行った。

「発見されちまったな〜。」「はい。」

「迂闊には、地軸移動砲を出せなくなったな〜。」

「どこかに隠れて、不意打ちを食らうと終わりです。」

「そうだな〜。この次は、そうやってくるだろうな〜。」

用心棒のボン太

ユミは、ミクに屋久島の話をしていた。

神主がやって来た。

「ユミ、ミク。トマトと桃のサラダを持ってきたよ。食べるかい？」

「神主さんが作ったの？」

「そうだよ。女房が病気だからね。」

二人は、顔を出した。「食べるわ！」「食べるわ！」

二人は桜の木の下に降りると、大きくなった。

「はい。」小鉢に入っていた。箸と一緒に手渡した。

「桃とトマトとタマネギを頂いたので、作ったんだよ。作ったと言っても、ドレッシングをかけたただけだね。」

「奥さんも食べたんですか？」

「うん、食べたよ。風邪のときには、こういうのがいいと思ってね。理由はないけど。」

二人は食べ始めた。

「とってもいいと思います。とっても美味しいです。」「とってもいい味です。」

「そうかい、ほめてくれて、ありがとう。」

ユミとミクは、桜の木の下で、籐の丸い座布団に、お尻をのせて食べていた。神主は立っていた。

「あつ、そうだ！未使用の雑巾が余ってたから、持ってきたんだよ。敷布団に使うといいよ。」

「敷布団ですか。そういうば、何か足りないな〜と、思ってたんです。」

「わたしも、思ってたんですよ。」

「じゃあ、中に入れておくからね。」

「ありがとうございます。」「ありがとうございます。」

「神主さん、神主さん。」

「なんだい？」

「ユミは、イチヨウの木の下を指差した。」

「あつ、スパイ狸だ！」

「あの機械狸、バカなの。」

「馬鹿？」

「隠れもしないで、こつちを見てるの。バカのスパイだわ。」

「そりゃあ、そうだ。」

「何も悪いことはしてないから、勝手にさせておくことにしたの。ちよつと気持ち悪いけど。」

「ユミは、足元にあつた石を投げつけた。スパイ狸は逃げて行った。」

「また、同じ場所に戻って来るの。バカだから。」

「そりゃあ、まさしく、馬鹿だな〜。」

「きつと作つた宇宙人が、大バカなんだわ。」

「そういうことだな。」

「きつと、宇宙一の大バカだわ。」

「ははは、それは面白いな！」

「馬鹿は、放っておきましょう！」

「そうだな。そのほうが利口だな。」

「ほら、またやって来たわ！」

「ほんとだ。馬鹿だな〜。」

「でしよう。何考えてるのかな〜？」

もう一度、石を投げつけた。逃げて行った。神主は笑って見ていた。

「食べ終わったら、ここに置いて。」

「わたしたち、管理小屋まで持って行きます。」

「ああ、そう。それは、ありがたい。」

神主は、帰って行った。

食べ終わると、ユミとミクは、小鉢と箸を持って、管理小屋に向かった。手には、神主の奥さんから貰った、ペンシル型のライトを持っていた。

「やっぱり、夜になると暗いわね〜。」「真っ暗だわ〜。」

後ろを見ると、スパイ狸が忍び足で歩いていた。

「あいつ、アホだね。ばればれで歩いてるよ。」「ほんと、大アホだわ。」

ポン太が走ってやって来て、機械狸を追っ払った。

「ありがとう、ポン太!」「ありがとう!」

ポン太は頷くだけだった。

ユミとミクは、届けると、すぐに戻って来た。今度は、ポン太が先を歩いていた。

巣箱に着くと、ポン太に礼を言った。

「ありがとう。じゃあ、お休み、ポン太。」「ありがとう。おやすみなさ〜い。」

「おいら、ここで見張ってます。お休みなさい。」

「ここに、ず〜っといるの?」

「はい。」

「じゃあ、そのダンボールに入ってるといいわ。温っかいわよ。」

ユミは、ダンボールを取り出した。ポン太の上にかぶせた。

「わ〜、ほんとだ。犬小屋よりも温っかいや。」

「うん、ちょうどいいサイズだわ。」

「取っ手の穴を、イチヨウの木に向けてくれない。」

「こっ?」

「そう。これでオツケー!じゃあ、お休みなさい!」

「じゃあね。」「適当に頑張ってね!」

「オーケー!まかしといて。出てきたら追い払うから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1307x/>

狸山の謎の少女

2011年11月21日15時41分発行